
至高の日常 ルーフェイア・シリーズ10

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

至高の日常 ルーフエイア・シリーズ10

【Nコード】

N2568G

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

春の日差しに誘われて出た街で、思いがけない事態に……。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第10弾◆◆8作・9作に続き、外向きの話です。でも前半はほのぼの風味？◆◆反王道、「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ◆◆携帯版は1行毎の改行or空行です◆◆現在、第11作「空なる真実」を連載中♪

Episode: 01

◇ Sylpya

「やれやれ……。どこをどう計算したら、そういう答えになるのです?」

「す、すみません!」

調理室で昨日途中まで作っておいたケーキを、調理室で仕上げていると、後ろからそんなやり取りが聞こえてきた。

声の主は、タシユアとルーフエイアだ。

最初は任務帰り——夜通しだったらしく陽も高い今ごろになって戻ってきた——のタシユアに、食べてもらうつもりだった。だが途中の廊下でばったりルーフエイアに会い、一緒に食べさせることにしたのだ。

そんなわけで2人で調理室の隅で待っていたのだが……。いくらも待たないうちに真面目なルーフエイアは、宿題を持ってきてここで始めたのだ。

ただその宿題と言うのが、どうやら苦手な物理だったらしい。

「これが、こうだから……。あれ?」

あの子がよく分からなくて首をひねっているところへ、さっきからタシユアがからかい半分に口を出している。

——ようは暇なのだろうが。

泣き虫のルーフエイアは、タシユアにとってはかっこのおもちゃだった。

この子がタシユアを恐れているせいもあって、何気ない一言で泣

き出してしまうのだが、それが面白くてたまらないらしい。

「えっと……」

「式が間違っていますよ」

「え？」

今はよく面倒をみているが、たぶんそのうち泣かせるだろう。

「使っている公式そのものが間違っているんです。

あなたが使っている式は、 t がひとつ余計ですよ」

「あ……」

完全に文系のルーフェイアは、言われて初めて気が付いたようだ。ただ今度は、どうしてこの式なのか分からないのだろう。また必死に考え込んでいる。

「どうもあなたは、応用力に欠けるようですね」

この一言で、この子がうつむいた。

「すみません……」

綺麗な碧の瞳から、涙がこぼれる。

もっとも最近気付いたのだが、この子が泣くのは何か言われてというよりも、自分が情けなくなっていることらしい。

分からないのが悪いとは私は思わないし、タシユアもそうは言っていないのだが……。

「泣いても問題は解けませんよ」

「……………」

容赦ないタシユアの一言に、真面目なルーフェイアが泣くまいと涙をこらえている。

だがかえって涙は止まらなくなったようで、さすがに可哀想になった。

ともかくいじめ癖のあるタシユアにはこれが面白いわけで、普通と違って、そのまま放っておくとずっといじめ続ける。

「とりあえず、一休みしたらどうだ？」

タイミングを見計らって間に入り、2人の目の前に出来上がったケーキのお皿を置いた。

「ほら、泣いていると食べられないぞ？」

「あ、はい……」

ようやくルーフェイアが泣き止んで、涙をぬぐう。

それからこの子が、まじまじと目の前のお皿を見つめた。

「黒……？」

「黒？」

予想もしない言葉がルーフェイアの口から出て、面食らう。

「いえ、白じゃなくて黒って……」

「??」

なんのことだかさっぱり分からない。

Episode: 02

「シルファ、おそらくこのケーキのことです」
考えこんでいる私へ、タシユアが説明した。

「このケーキって……これはチョコレートだぞ？」
間違ってもイカ墨を入れたりはしない。
だいいち、見れば普通は……。

「……チョコレートって、ケーキに使うんですか？」
——この子は例外だったらしい。

「ルーフェイア、チョコレートが何かは知っていますか？」
「携帯食のキットによく入ってる、黒くて甘くて四角いのですよね？」

問いにルーフェイアは、無邪気に答えた。しかも「美味しいから好きだ」と言う。
やれやれとタシユアがため息をついて、この子がきょとした顔になった。

「あの、違うんですか……？」
「間違っではないんだが……」
どう説明したものか。

悪気は無いのだが、どうもルーフェイアは一般常識に疎い子だった。
知識が必須だった戦闘関係と医療・語学、あとはなぜか歴史に偏っていて、その他の事となると不安なほどに知らないのだ。

「ともかくチョコレートは、もともとはお菓子だったんだ。

ただそれが非常食に向いていたものだから、キットに入れるようになっただけで……」

「あ、だからおいしいんですね」

とりあえず納得したらしく、この子がうなづく。

「その調子で、よく今まで平気でしたね」

——いけない。

せっかく泣き止んだルーフェイアが、また泣き出しそうになった。

「と、ともかく食べたらどうだ？ お茶でも淹れるから」

慌ててまた間に入る。

「コーヒーにしていただけですか？」

「分かった。」

——ルーフェイアは何がいい？」

「あ、あたしはなんでも……」

およそ自己主張とは縁のないこの子は、予想通りの返事だ。

「紅茶でいいか？」

「あ、はい」

それにしても保護者役のイマドがいない分、ルーフェイアを泣き止ませるのは大変だった。

なんでもこの子が言うには、いつもこの時期になるとイマドは、親戚のいるドルへ母親のお墓参りに帰るのだそうだ。

「そう言えばイマドは、いつ帰ってくるんだ？」

なんととはなしに訊く。

「えっと、今日の午後帰ってくるんです」

嬉しそうにルーフェイアが答えた。

当人は全く自覚していないのだろうが、やはりイマドの傍がいいらしい。

「じゃあこのあと、ケンディクまで行くのか？」

「はい」

その答えを聞いて、私は少し考えこんだ。

「そうしたら……ケンディクまで一緒に行くか？」

ルーフェイアの表情が一瞬だけ輝く。

ただ遠慮深いこの子は、またすぐにうつむいてしまった。

「どうした？」

「いえ……その、迷惑、ですから……」

「いいんだ」

きっぱりと言い切る。

「今日はもともと、このあとケンディクへ出て、買い物しようと思っていたんだ」

こう口添えすると、ようやくルーフェイアが安心した顔になった。

Episode 03

「シルファも甘いこと」

「でも、どうせ行くんだ。それに駅までだし」
きつちりと突っ込んできたタシユアに、いちおう言葉を返す。

ルーフェイアはひとりを嫌がる子だ。だからもう慣れているケン
デイクでも、あまりひとりでは行きたがらない。

だが、その気持ちはよく分かった。

私も……やはりひとりには、苦手だから。

「イマドはいつ頃、駅に着くんだ？」

尋ねると、ルーフェイアが顎に手を当てちよつと首をかしげて――
癖らしい――から答えた。

「ええと……確か、12時半過ぎには着くって……」

思わず時計を見る。

が、状況を理解したのはタシユアのほうが早かった。

「次の連絡船に乗らなければ、間に合いませんよ」

「え、あ、すみません！」

「誰も謝れとは言っていないませんが」

またタシユアに突っ込まれて、ルーフェイアの瞳に涙がにじむ。

――でも。

私以外は誰も気付いていないだろうが、これで案外タシユアは、
ルーフェイアに甘い。確かにいつも泣かせてはいるが、逆に言えば
それだけ相手をしているということだ。

タシユアがこうやって多少なりとも相手をするのは、知るかぎりではこの子だけだろう。

だいいち今も突っ込みながらだが、ちゃんと間に合う時間を教えている。

「とりあえず、まだ時間はあるだろう？」

ほらルーフェイア、食べてしまった方がいい」

このまま泣いていて食べはぐるのも可哀想だから、そう言うてうながす。

「すみません……」

「それはいいから」

華奢な手にフォークを握らせる。

ここまでやると、ようやくこの子はケーキを口に運んだ。

隣のタシユアも食べ始めて、内心ほっとする。

「おや、何か材料を変えましたか？」

味と香りが、いつもと微妙に違いますが」

「――よく分かったな」

もっとも彼は五感が鋭い。このくらいなら分かって当然だろう。

「ブランデーを切らしていたから、リキュールを入れたんだ」

「なるほど。」

ですが私は、いつもの方が好きですね」

そうは言いながらしっかりと食べているのだから、さすがだ。

「あの、リキュールってなんですか？」

「――後で教えるから、先に食べてくれないか？」

「あ、はい」

無邪気に訊いてきたルーフェイアを、どうにか食べる事に専念さ

せる。

恐らくリキュールが何かなど全く知らないだろうから、ここでそんな話になればまた墓穴を掘って泣かされるだけだ。

――それにしても。

この2人が並んで食べていると、不思議な雰囲気があった。

男子と女子、銀髪と金髪、紅眼と碧眼……その容貌は見事に正反對だ。

しかも容貌だけではなく、性格も正反對。

ただこうしている様は、どこことなく兄妹といった感じにも見える。

「あの、なにか……？」

私が見ている事に気付いて、タシユアではなくルーフェイアが顔を上げた。

「いや、なんでもない。

――2人とも、もう少し食べるか？」

すでに食べ終えてしまったタシユアと、半分ちよつと食べたルーフェイアとに尋ねる。

Episode: 04

「いえ、私はけっこうです」

「あたしも、もう……」

とりあえずは2人とも、満足したようだった。

「そうか。そうしたら私はこれを片付けるから、その間にお茶も飲んでおいてくれ」

たいした量ではないが、一応洗い物がある。

「シルファ、それではあなたが食べられないでしょう」

そう言くと、最後に残っていたコーヒーを口にして、すっとタシユアが立ち上がった。

「洗っておきますから、食べてはどうですか？」

「すまない」

流しの前にタシユアが立ち、入れ替わりに空いた席へ座る。

——これならもう、この子は泣かされないな。

そんなことを思いながら、フォークを手にした瞬間。

「シルファ、私は別に泣かせるようなことは言っていませんよ」

見透かしたかのように、すかさずタシユアが突っ込んできた。

「あ、いや……」

思わず返答に困る。

当のルーフエイアの方は、目を丸くして彼が洗い物をする様子を眺めていた。タシユアが私に代わって洗い物をするなど、考えもつかなかったらしい。

だがこの学院では孤児が多いせいもあって、自分のことは自分でやるのが普通だ。男子でも例外ではない。

むしろルーフェイアのように、自分でなにもしなくとも困らなかつたという方が、ずっと稀だろう。

「ルーフェイア、何をそんなに見ているのです」

「ご、ごめんなさいっ！」

背中を向けたままのタシユアに鋭く言われて、この子が縮こまつた。

そして彼が振り返る。

「以前もそう言ったかと思いますがね」

「……………」

ますます身を縮めたルーフェイアの瞳から、何度目かの涙がこぼれた。

タシユアの暇つぶしなのは分かっているが、これでは埒があかない。

「その、タシユア、ルーフェイアが食べ終えるまで……泣かせないほうが……」

柔らかな金髪を撫でてやりながら、タシユアに言う。

だいいちタシユアの毒舌も、泣かせるのが目的なせいで、言っていることはかなりいい加減だ。

「泣かせているわけではないと、先ほども言ったはずですが？」

「でも、これでは間に合わないだろうし」

いくらなんでも泣かされ続けて遅れるのは、可哀想だろう。

「やれやれ……」

タシユアはそうため息をついたが、今度はもう何も言わなかった。

またこちらに背中を向けて、洗い物の続きを始める。

「ほら、ルーフェイア、早く食べてしまわないと」

「……はい……」

顔を上げたこの子の涙をぬぐってやりながら、急かす。

「おいしいか？」

「はい」

この後はタシユアが黙ったこともあって、順調だった。どうにか時間前に食べ終わる。

さすがの彼も、遅刻させる気はないのだろう。

Episode: 05

「さあ、行こう」

この子をうながして調理室を出、船着場まで行った。
休みの日の、それもちようどお昼前のせいか、案外混んでいる。

「えっと……」

「あそこが、空いているぞ」

ちようど船内の真中辺り、通路を挟んだ両側の席が空いていた。

「あ、はい」

この子が素直にそこまで行って、向かって右の席を選ぶ。ケンデイクへ行くときは、左舷に本島を見ながらになるから、海原の見える右側を選んだのだろう。

私たちも後から続いて、反対側の席へ座ろうとした。

と、ルーフェイアがこちらに視線を走らせ、心細そうな表情を僅かに見せる。

「――何を甘ったれているのです」

隙を見逃すようなタシユアではない。ルーフェイアの視線の意味を即座に悟り、すかさず突っ込んだ。

「ご、ごめんなさい!」

またこの子が謝る。

「1年生でも、行く子はひとりでケンデイクまで行きますよ。ましてやあなたは何年生ですか」

「ごめんなさい……」

キリがない。

ただ私は、ルーフェイアの気持ちは分かった。
ひとりは――寂しい。

「ルーフェイア、そっちへ座っていいか？」

「え、あの、でも……」

泣きそうになりながら、それでもそう言うこの子が、なんだか可笑しかった。

「座るぞ」

ルーフェイアを窓際へ押しやり、私も座る。

「あの……」

「いいんだ」

言い切って頭を撫でると、この子がやっと少し落ち着いた。

「そうやって甘やかすから、いつまでたっても成長しないのですよ」

「ご、ごめんなさいっ！」

私に言ったはずの言葉に、なぜかルーフェイアが謝る。

「謝る暇があるのでしたら、少しは考えたらどうなのですか？」

「……」

またこの子が泣きだした。

「ほ、ほら、動き出した」

急いで気を逸らす。

「泣いていたら、海が見えないぞ」

「あ、はい」

ルーフェイアが慌てて涙を拭いた。
ほっとする。

「……♪」

入り江から広い海へ出ると、この子が嬉しそうな表情になった。

——本当に好きなんだな。

ルーフェイアは海が好きだった。特にケンディクの港で眺めるのが好きで、時々友だちやイマドと一緒に座り込んでいるのを、見かけることがある。

と、タシユアが不意に口を開いた。

Episode 06

「ルーフェイア、そんなに海がいいのでしたら、泳いできてはどうです？」

「え、でも……」

タシユアの冗談——もつとも声音はいつものまま——を真に受けて、この子が困り果てた。

意外だが、ルーフェイアは泳げない。どうやら育った戦場では陸戦ばかりで、泳ぐ機会は全くなかったらしい。

もちろん学院へ入学してからは、イマドや私に教わって必死に練習しているが、それでもまだ「支障なく」とはいかなかった。

「いい加減に覚えたらどうです。

どこかで川にでも落ちたら、助かりませんよ」

この一言で、またこの子が泣き出した。

うつむいて唇を引き結んで、必死に泣くまいとしているが、意に反して涙はこぼれるばかりだ。

どうも泣かされ続けて、自制が効かなくなっているらしい。

「タシユア……その辺に、したらどうだ」

さすがに一言言う。

本来の年よりずっと幼い見かけの、ルーフェイアだ。こうしていると完全に、タシユアが小さい子をいじめているようにしか見えない。

だが、船の中でも気にする生徒はいなかった。相手が「タシユア」なのと、これが日常になってしまっているせいだろう。

最初の頃はそれでも、「タシユアが小さい子を泣かしている」と

騒がれたりしたのだが、最近はどう他の生徒も慣れてしまったらしい。1対1で泣かされている場合は見かけた生徒が私やロア、イマド、シーモアあたりに連絡？してくれるが、誰か一緒にいた場合はほったらかしだ。

幸いタシユアは、それ以上言わなかった。ずっと泣かせているので、興味が薄れたらしい。

黙ったまま、窓の外を眺めている。

――何を観てるんだろう？

タシユアの座る左舷側は、学院のある本島だ。島を覆う緑と、その間から見え隠れする五つの塔は、いつもと同じたたずまいだった。これといって、変わったものは見当たらない。

まあもしかすると、違う「何か」を観ているのかもしれないが……。

それからしばらくは、静かだった。タシユアは左の、ルーフェイアは嬉しそうに右の窓の外を観ているだけだ。

このまま最後まで行けば、そう思ったが甘かった。

「まったく、本当に遠足に来た1年生ですね」

外を見るのに飽きたのだろう、不意にこちらを向いたタシユアの口から、また毒舌が飛び出す。

「すっ、すみません！」

言葉に過剰反応して、この子が身をすくめた。

「同じ事を何度言わせるつもりですか？」

「……………」

またもやルーフェイアが泣き始める。

「やれやれ」

そう言ってタシユアはまた視線を戻したが、この子が泣きやんだわけではない。

——やれやれと言いたいのは、こっちなんだが。

そんな思いと共にため息をつきながら、私はルーフェイアの頭を撫でただけだった。

Episode: 07

◇Rufair

ケンディクの街は穏やかだった。

もっともこの街は年間を通して観光客で賑わうから、どの時期でも人通りはけっこう多い。

——あとで港で、海が見たいな。

観光都市で景観のいい場所が多いこのケンディクで、あたしがいちばん気に入ってる場所だ。

海は好きだった。

港の栈橋の突端に座って潮騒を聞いていると、不思議と落ちつく。理由はわからないけど……抱かれているような気になって、とても安心だった。

実を言えばゆっくりと海を見たのは、学院へ入学してからだ。

もちろんその前も見たことがないわけじゃないけど、戦場から戦場へ渡り歩く途中でちよつと立ち寄る程度だったから、座りこんでながめているほどの時間は取れなかった。

「海の色はね、あんたの瞳と同じなのよ」

そう母さんがよく言ってたけど、ケンディクへ来て初めてそれが本当だと知った。

それに海は繋がってる。父さんや母さんがよくいるアヴァンの大陸にも、シュマーの本拠地がある大陸にも。

「ルーフェイア、何をしているのですか。遅れますよ」

「あ、はいっ！」

船を降りたところで立ち止まっていたものだから、たちまちタシユア先輩に叱られる羽目になった。

——どうしてあたし、こうなんだろう？

また悲しくなる。

考えるだけなら後でもできたのに、今考えてるなんて……。

「泣く暇があるのなら、早く駅へ行きなさい。もう列車が着く時間ですよ」

「ごめんなさいっ！」

こみ上げてきた涙をぬぐって、慌てて歩き出す。
でも次の瞬間、あたしは思わず立ち止まった。

「どうした？」

「いえ、その……」

シルファ先輩に上手く返せないまま、周囲を探る。

「なにをしているのです」

「いえ、今何か、気配が……」

「——？ 何もないようですが」

あたしと同じように戦場で育って、気配を捉えることが上手いタシユア先輩が、そう言う。

——気のせいだったのかな？

確かに視線を感じたと思ったけど、勘違いだったのかもしれない。
なによりもう、辺りにはなにもなかった。

「急ぎなさい。待たせるつもりですか？」

「すみません……」

「私に謝っても意味がありませんよ」

「……………」

もう、どうしていいか分からなくなる。

「とにかく駅まで行こう。イマドが待ってるかもしれないだろう?」

「あ、はい……」

シルファ先輩にうながされて、あたしは歩き出した。

連絡船が着く栈橋から駅までは、少し距離がある。

初めてここへ来たのは、まだ一昨年の話だ。だけどその前と後とで、あたしの生活は言葉通り一変した。

この穏やかなケンディクにいたら想像できないような——でもそういう場所で、あたしは育った。

——どっちが本当なんだろう?

あの地獄が夢だったのか、それとも今が偽りなんだろうか。

どちらも現実だとわかっていても、そう思わずにいられなかった。けどあたしは、いつかはあの場所に戻らなくちゃならなくて……。

Episode: 08

「ルーフェイア、どうかしたのか？」

「あ、いえ、なんでもありません」

黙りこんでしまったあたしを心配して、シルファ先輩が声をかけてくれる。

「それならいいんだが。」

——それにしても今日は、ずいぶん暖かいな」

「そうですね。」

あ、だから先輩、スカートなんですか？」

あたしがそう言うと、シルファ先輩が困ったような顔をした。

「あの……？」

またあたし何か、悪いことを言っちゃったんだろうか。

「すみません、あたし……」

「あ、いや、そうじゃなくて……その……見ないでくれないか……」

「え？」

見ないでって言われても、どうすればいいんだろう。

「その、目をつぶっちゃうと……歩けないんですけど……」

「そういう意味じゃないんだが」

あたしの言葉が可笑しかったみたいで、シルファ先輩が笑った。

——素敵だな。

シルファ先輩は本当に大人の雰囲気で、とても懂れる。

今もワインレッドのシャツに、もう一段濃い色のひとつボタンのジャケット、それに黒に近いグレーのタイトスカート——それも前

スリット――を、さりげなく着こなしていた。

けど本当に、シルファ先輩のスカート姿は珍しい。覚えているかぎりでは、ドールでのドレス姿以外じゃ初めてだ。

それもドレスを着てもらうのに大騒ぎ(?)するほど、先輩はスカート類は大嫌いだった。

「だから、見ないでくれないか……」

「え、でも……」

「――やれやれ」

シルファ先輩の言葉に困っていると、タシユア先輩から呆れられてしまった。

「すみません……」

「ですから、あなたが謝る事ではないでしょう。

これで何度目だと思いますか？」

「――ごめんなさいっ!」

思わず下を向いて、泣かないように唇を噛んで――でもやっぱり、涙がこぼれた。

ここへしゃがみこんでしまいたくなる。

けどそうやってても、絶対にまた怒られるだけだから……。

「その、まあ、とりあえず行こう。イマドが待っているぞ?」

「あ、はい……」

シルファ先輩がまた、あたしをうながした。

そのままメインストリートを真っ直ぐ行く。この先は右へ行けば駅、左の坂を下れば公園だ。

不意に潮風が吹きぬけた。

碧い海から駆け上がってきた青い風。

やっぱりあとでイマドに頼んで、海を見ようと思いながら、あたしは突き当たりで右へと折れた。

駅前の広場は暖かいせいなのか、けっこう賑わっている。だけど駅から出てくる人はいないから、まだ列車は着いていないみたいだった。

「どうにか間に合いましたかね？」
同じことをタシユア先輩も言う。

「あの、そうしたら、ここでいいですから——」
「ルーフェイアっ！」

先輩たちにお礼を言いかけたところで、聞き慣れた声が重なった。

Episode..09

「イマド！」

後ろへと振り向く。

出てくる人に混じって、学院に入学した時からずっと目にしている姿があった。

「悪いいな、わざわざ迎えに来てくれたのか？」

あ、先輩たち、こいつのお守してもらってすいませんでした」
イマドが頭を下げる。

「お守りをしていたわけではありませんね。まあ、手がかかったのは確かですが」

「ごめんなさい……」

いつも迷惑ばかりかけている自分が情けなくて、また涙がこぼれた。

「ですから、もう何度も言っただけですが」

「先輩、言うだけ無駄ですって。こいつ、言い返す代わりに泣くんですから」

「……なるほど」

隣でやり取りを聞いていたシルファ先輩が、納得したようにうなずいた。

「タシユアの毒舌の代わりに、泣くわけか」

「シルファ、何が言いたいのです」

「あ、いや……」

先輩が口籠もる。

タシユア先輩の言葉には、シルファ先輩も言い返せないみたいだった。

もったもたタシユア先輩に平気で言い返せる人がいるとは、ちょっと思えない。

――母さんはやったらしいけど。

ただ母さんの場合は、言い返すどころか以前に常識を無視しているから、迷惑のかけ通しだったんだろう。

「えーと先輩、取り込み中申し訳ないですけど」

「別に取りこんでなどいませんが」

この言葉にも、先輩は見事に切り返す。

でもイマドはけろっとしているから、こっちもある意味凄いかもしれない。

「それはともかく、俺、昼メシ食いにいきたいんですけど」

「どうぞ」

一言で終わって、一瞬呆然とした。

「あの、先輩たちは食べないんですか……？」

信じられないほど食べる――イマドもだけど――タシユア先輩が、お昼抜きで持つとはとても思えない。

「誰も食べないなどとは言っていないません。イマドに食べに行っていないと言ったんです」

「ご、ごめんなさい！」

鋭く言われて、思わずあたしはすくみ上がった。

また涙があふれてくる。

「――シルファ先輩、これ何回目です？」

「たぶん……午前中に一緒になってから、10回は超えてると思うが……」

「なんだ、まだ記録更新ってわけじゃなさそうですね。」

「——ほら、顔上げろって。あとでお土産やるから」

「あ、うん……」

言われてあたしは顔を上げた。

不思議だけど、イマドの声を聞くと落ち着く。

「物でつられるとは、まさに1年生ですね」

「……」

またタシユア先輩に鋭く言われて、自分が情けなくなった。
涙が止まらない。

「タシユア……」

「先輩……」

イマドとシルファ先輩とが、ため息をついた。

「あゝもう、ともかくメシ食いに行きませんか？　こんなところで突っ立ってるのもなんですし」

「そうだな。」

「——タシユアも行くだろう？」

「シルファがそれでいいのでしたら」

気が付くと、みんな一緒に食事することになったらしい。

Episode..10

「ルーフェイア、泣くの一時停止な。メシ食いに行けねえから」
「う、うん」

急いで涙をふく。

いつも「お腹がすいた」と言ってるイマドを待たせるのは、いくらなんでもできなかった。

「シルファ先輩、どっかお勧めのどこありません？」

「そう言われても……」

話を振られたシルファ先輩が考えこむ。

「先日新しい店がオープンしたとか、言っていませんでしたか？」

「だが、あそこはけっこう高いし……」

どうやらそのお店というのは、それなりに高級なところのようだった。

「あの、でしたらあたしが、お支払いしても……」

何を考えてるのか知らないけれど、あたしの口座には毎月母さんが、かなりの額を振りこんでいる。

——使い道、ないのに。

服は学院の制服で大半は用が足りるし、学用品はたいした金額にはならない。

あとはせいぜいケンデイクへ出た時に使うくらいだから、けっきよくお金は貯まる一方だった。

「支払うって、4人分をか？」

なぜかシルファ先輩が慌てる。

「この様子ですと、いつもミルドレッドたちに、支払われているのでしょうかね」

「え、でもみんなが、お金がある人が……払えばいいって……」

ケンデイクに自宅があるミルはともかく、シーモアやナティエスは学院からの支給だけだから、外食のお金まで毎回払っていたらとても持たない。

「まったく。人の言うことを疑わないのも、ここまで来ると困ったものです」

けどタシユア先輩の言い方だと、とても悪いことをしてしまったみたいだった。

「あの、あたし何か悪いこと……?」

心配になって尋ねる。

イマドとシルファ先輩とが顔を見合わせた。

「まるっきり悪い……とは言わないだろうが……」

「つつーか、あの連中に見事に言いくるめられたような……」

2人は理由が分かっているみたいだけど、あたしにはさっぱりわからない。

「ねえ、何が悪いの……?」

「えーと、どう説明すりゃ……って、後じゃダメか? 話が込み入っちゃうし、腹減ったし」

「あ、ごめん!」

なんの話をしていたのか思い出して、あたしは謝った。
これじゃいつまで経ってもお昼にならない。

「まあどちらにしても、ルーフェイアが払わされる気もしますがね。
——ともかく今日は私が出します。後輩に払わせるわけにはいきません」

「え、でも、大丈夫なんですか？」

シルファ先輩が躊躇うようなところで4人分も支払ったら、かなりの金額になるんじゃないだろうか？

と、タシユア先輩があたしに視線を向けた。
思わずすくみ上がる。

「出来ないことを私は言いませんよ」

「でも……」

確かに先輩は嘘は言わないけれど、高額になった場合が心配だ。
けどそんなあたしへ、シルファ先輩が言葉をかけた。

「ルーフェイア、私もタシユアも上級だから、ちゃんと学院から給料をもらっているんだ。

だから心配しなくていい」

「あ……」

初めて思い出す。

「その顔だと、完全に忘れていたようですね」

「す、すみませんっ」

見透かされたような言葉に、またあたしは小さくなった。
泣きたくなる。

「――早くその店に行きませんか？」

「――そうだな」

イマドとシルファ先輩とがそう言って歩き出して、あたしも慌てて後についていった。

Episode..11

◇I mad

——ホント、よく泣くよな。

やっとついたその店で、隣のルーフエイアのヤツを見ながらつくづく思った。

まあもともとが大人しい性格で、言い返すより泣くやつだから、しょうがないつつやしようがないんだろうけど。

ただそれを差し引いても、タシユア先輩とは相性が良すぎるらしくて、下手すりゃ何分かおきに泣かされる。

その上何をどうしたのか、それでも懷いてつきまとうから、延々と泣かされっぱなしってやつだった。

——もっともこの先輩、ルーフエイアは無視しねえからな。

そこら辺考えると、一応可愛がって？る範疇に入るんだろう。

「ルーフエイア、あとはあなただけですよ」

「すみません……」

今も可愛がってんだかいじめてんだか、ともかく相手だけはしてるし。

けどメニュー選んでるこいつに突っ込んだら、尚更遅くなるような……。

なにせルーフエイアのヤツの食べ物音痴——もう料理音痴ってレベルじゃない——はかなり致命的で、メニューを見せてやってもどれがなんだか分かつちゃねえ。

今も案の定、メニューとにらめっこしながらひたすら悩んでやがった。

「おい、貸せよ」

「あ、うん」

けつきよく見かねてメニューを取り上げる。

「何が食いたいんだ？　肉か、魚か？」

「えっと、お魚」

「オツケー、んじゃあとは、なんか野菜とスープでいいな」
「うん」

もっともこいつの場合、好き嫌いが無いから楽だ。

——味もわかってねえだろうけど。

戦場で育ったのが良かったのか悪かったのか、ともかくこいつは「生き延びる」のが最優先で、料理の味やら素材には一切文句言わない。

それこそ腐ってなくて食えりゃ、なんでもいいってやつなんだろう。

けど、この外見でそれっつーのも……。

「そうやって甘やかすから、いつまで経っても子供のままなのだと思いますがね」

「でも俺、メシ遅くなるのヤです」

突っ込んできたこの先輩に、思わずホンネを言った。

だいいちルーフェイアに選ばせた日にゃ、どんだけ待たされるか分かったもんじゃないやねえし。

「イマド、ごめん……」

「ですから謝っている暇があったら、早く選びなさい」

——キリねえの。

この2人だけおいといたら、日がな一日こうやってんじゃねえのか？

どっちにしてもこのままじゃ埒があかねえから、俺はさっさとウエイトレスを呼んだ。

ようするにこの2人はじゃれてるだけ——ルーフエアはそう思ってたねえだろうけど——なワケで、どこにも実害がない限りは見なかったことにして、話を進めるに限る。

「シルファは何にしたのですか？」

案の定この先輩は、泣かせたルーフエアのことなんかまるっきり知らん顔で、しっかり注文を始めた。

「こっちも頼むかな？」

「うん」

俺もこいつの分と合わせて注文して、ようやく待つ体制になる。にしてもガキンちゃんもないのに、なんだってこんなに時間がかかるんだか……。

それから思い出した。

「どこ入っちゃったかな？」

持って帰ってきたバッグの中を漁る。

「どうしたの？」

「えーと、ちょい待ってるな」

どうにか俺は、荷物の中から小さい箱を引っ張り出した。

Episode..12

「魔力石かなにか……?」

「ンなわけねえって。」

えーと……あ、これだこれ」

箱の中から、目当てのものを探し当てて出してやる。

こいつの顔に笑みがこぼれた。

——これが可愛いんだよな。

ルーフエイアのやつは素直で無邪気だから、なんかちょっとやっただけですげえ喜ぶ。

「このカード、可愛い……♪」

「何のカードです?」

「え……」

何気なくタシユア先輩が訊いてきたとたん、慌ててこいつがカードを、胸に抱くようにして隠した。

しかもそのあとが傑作だ。

「ルーフエイア、見せてくれないか?」

「あ、はい」

シルファ先輩の方にはこいつ、にこにこしながらあっさりカードを差し出す。

もうこれには俺もシルファ先輩も、横を向いて笑いをこらえるだけで精一杯だった。

「やれやれ、嫌われたものですねぇ」

「先輩がこの間こいつからレアカード巻き上げたから、警戒してる

んですよ」

「巻き上げたとは聞き捨てなりませんね。

あれはきちんと勝負をした上で、勝ったから頂いたまでです」

——あれを「きちんと」って言うか、普通？

ルーフェイアにやったのは、けっこう前からあるトレーディングカードの一枚だ。何年か前から学院の中で、かなり流行ってる。

で、勝負して勝てばもらえんだけど、こいつこないだタシユア先輩に負けやがった。

じつ言やルーフェイアは、そんなに弱くなかったりする。クラス内じゃ屈指の強さだ。なんでも同室のロア先輩がめっぽう強い人だったとかで、カードを一揃いもらった上に、一から教えてもらったらしい。

それにこいつも飲みこむまではともかく、分かっちゃえば今度は忘れない性格？してる。ルールも今じゃかなり複雑でもきっちり把握して、しっかり利用すつから始末に追えない。

けど、タシユア先輩となるとなあ……。

「先輩相手にルーフェイアが、勝てるわきゃないじゃないですか」
もうこの人は、「普通」の範疇は外れてる。

「なのに勝負すんですから、巻き上げてんのと一緒ですよ」

「勝負を言ったのは、ルーフェイアです」
毎度のことながら、この先輩は絶対自分が悪いとは言わない。

「話には聞いていたが、可愛いな。初めて見た」

シルファ先輩のほうは俺らのやりとりより、このカードが気に入

つたみたいだ。

——まあ、女子が欲しがるカードだよな。

やっぱ気になんのか、タシユア先輩がシルファ先輩の手もとを覗き込む。

「ほう、仔竜ですか。確かに珍しいですね」

ほんと言うとこのカード、まるつきり枚数がないってわけじゃないんだとか。でも女子が秘蔵しちまうことが多くて出回らないから、結果的にかなりレアになってる。

「それにしても、良く手に入ったな」

「真ん中の姉貴——って従姉妹ですけど、かなりのカードプレイヤ——なんですよ」

このゲームはアヴァンのほうが本家で、姉貴ときたらガキの頃から、オモチャ代わりにカードやってたつつーツワモノだ。

で、この姉貴に頼んどくと、けっこうレアカードを取ってきてくれる。

「あと叔父さんもマニアで、しっかり集めてますし」

もっともこっちはプレイはさほどしなくて、友達やら患者——一応開業医——が持ってきてくれるらしい。

Episode..13

「……カード一家なのか」

「いや、その姉貴と下の姉貴と叔母さんと上の姉貴のダンナだけですよ、めっちゃくちゃプレイするのは」

「それなら十分一家総出でしょう」

「そですか？」

みんな住んでる家はばらばらだから、あんまピンとこない。

「イマドもカードするの？」

隣で話を聞いてたルーフェイアが、不思議そうに尋ねてきた。

——ってそういうや、こいつの前でやったこと、なかったつけ。

「一応やるぜ。ただ俺反則に強えから、普段やらねえけど」

「ふうん……」

テキトーな説明に、こいつもシルファ先輩も別段異議は唱えなかった。

けど、そうじゃなかったのが約1名。

「おやおや、ずいぶん自信ですね」

「別にそゆんじゃないんですけど」

俺の場合は妙な能力があるおかげで、周りの考えてることが耳に飛びこんできたりする。

で、これがカードやってる最中に聞こえた日にゃ——やっぱ反則だろう。

「ねえイマド……そうしたら今度、やろう？」

俺がカードやるって聞いて、嬉しくなったんだろう。ルーフェイアのヤツが無邪気に言ってきた。

「んー、お前じゃ相手になんねえからなあ」

「え、でも……」

カードにはそこそ自信があるからこいつ、意外そうな表情だ。

「ダメなの……？」

「うーん、なんつーか……おまえ、筒抜けだから」

「ーあ」

この一言で、こいつも俺が洩る理由に気が付く。

ルーフェイアはこの手の能力に関しては、持ってないくせにかなり詳しい。なんでも親父以外の血縁が、殆ど全部そうだって話だった。

なのにどゆわけか、こいつは心をガードするってことがない。

なんか常時ガードかけてるタシユア先輩と違って、ルーフェイアはいつも無邪気に、あけっぴろげたままだ。

——たいしたもんだよな。

「読まれて困ること、ないから」 ってのが言い分だったけど、掛け値ナシでマジだったらしい。

ガキつつやあガキなんだろうけど、ここまで他人を信じられれば十分立派だ。

「ともかく、フェアじゃねえだろ？」

「ーそうだね、わかった」

理由が理由なだけに、こいつがまたあっさり納得する。

「どしてもやるってんなら、トレードなしで練習な」

「うん」

これなら、丁度いいくらいの相手になるはずだ。

「まったく、どこまで甘やかせば気が済むのです」

「だから、そゆんじゃないんですってば」

もっともこの先輩の場合、説明しても信じるかどうか。

だいいちそれ以前に、すっかり話して弱みでも握られた日にゃ、目もあてられない事態になる。

けど幸い、それ以上先輩は訊いてこなかった。単純に突っ込んだだけで、別段興味はなかったってやつなんだろう。

「仔竜のカードが、こうなってるとは思いませんでしたね」
すっかり興味は向こうの方だ。

「私も、探してみるか……」

こっちはこっちで気に入ったらしくて、シルファ先輩がそんなことを言いだした。

「んじゃそれ、あげましようか？」

「――イマド！」

間髪入れずに隣から抗議の声が上がる。

Episode..14

「どした？」

「だってそれ、さっき……」

おもしろ半分にからかうと、そこまで言っただけでルーフエイアがうつむいた。

考えてるのは多分、自分が欲しいのが半分、先輩に譲らなきゃいけないってのが半分ってとこだ。

——タシユア先輩がいじめたくなる気分、分かるよな。

なにせ困ってるこいつ、妙に可愛い。

ってもこれ以上やると、間違いなく泣きだしちまうだろう。タシユア先輩はそれが目当てでいじめてっけど、俺はそういう趣味はない。

「心配するなって。2枚あんだよ」

「あ、なんだ……」

別を出して渡すと、こいつが思いっきりほっとした表情になった。

ついでに頭撫でてやると、もっと嬉しそうになる。

「だが、いいのか？ 珍しいカードなんだろう？」

今度はもう一枚を持ってる、シルファ先輩が尋ねてきた。けっこう気にしてるらしい。

「確かにレアですけど。」

——あ、そしたら『雪の女王』と、交換ってことで」

「え、そう言われても、そのカードは私は……」

先輩が言いよどむ。

実言や俺も、シルファ先輩が持つてるとは思っちゃいなかった。
なにせこのカードも、けっこうレアだ。だから、持つてるのはよ
ほどのプレイヤーか、収集マニアの連中になる。

けど思惑通り、タシユア先輩がこっちに鋭い視線を向けた。

「そういう魂胆ですか」

隣でルーフェイアのヤツが、自分が言われたわけでもないのに身を硬くする。

「タシユア、持っているのか？」

「ええ、まあ」

先輩は曖昧に答えたけど、持つてないわきやない。なにしろこないだルーフェイアから巻き上げたカードってのが、その雪の女王だ。

「先輩、こいつにあのカード、返してやってもらえますか？」

この仔竜は好きにしていいますから」

「——いいでしょう」

上手いこと交渉が成立した。

「タシユア、なにもそこまでしてくれなくても……」

「かまいませんよ。別に私は、集めてるわけではありませんから」

「だが……」

さすがに気が引けたらしい。シルファ先輩が必死に遠慮する。
だけど。

「いいんです」

きっぱりそう言われて、黒髪の先輩はそれ以上言うのをやめた。
さすが長年？付き合ってるだけあって、タシユア先輩の性格はよ

く把握してるらしい。

「――すまない。」

そうしたらイマド、もらっていいか？」

「どうぞ」

仔竜が手に入った先輩、けっこう嬉しそうだ。

――けどタシユア先輩、少し変わったよな？

前からシルファ先輩にゃ甘かったけど、この頃はなんつーか「甘やかしてる」って感じた。

もっともこの先輩の場合やたら厳しいから、これでやっと差し引きゼロってとこだろう。

「カードは今持っていますから、学院へ戻ってから渡します。

それでかまいませんね？」

「ええ、ぜんぜん」

俺も気楽に答えた。なにせこの先輩が約束を破るってコトは、有り得ねえし。

「先輩すみません、ありがとうございます……」

戸惑いながらルーフェイアが礼を言った。

って、ここでそれ言った日にゃ……。

「言う相手が、違うと思いますがね」

「ご、ごめんなさいっ！」

あ、やっぱり。

予想通りに突っ込まれて、またこいつの瞳に涙が浮かぶ。

――ホント、相性いいよな。

隣でべそかいてるルーフェイアの頭をテキトーに撫でながら、俺

はなんとなくため息をついた。

Episode..15

◇Tasha Side

「――すまない。」

そうしたらイマド、もらっていいか？」

「どうぞ」

仔竜のカードを手に入れたシルファは、嬉しそうだった。普段は気丈にしているが、やはり女子ということなのだろう。

時折こうやって見せる彼女の無邪気な姿は、決してタシユアは嫌いではなかった。

テーブルの向こう側では、イマドがぞんざいな調子でルーフェイアの頭を撫でている。

（気付いていないのですかね？）

どう見ても「相手をしている」というよりは「適当にあしらっている」といった感じなのだが、やられている当人は満足しているようだ。

もっともこの後輩が、ルーフェイアを泣かしているのは見たことがない――どうやったらそうなるのかは不思議だ――から、これで十分なのだろう。

それにしてもイマドは、案外食わせ物だ。

この間ルーフェイアから得たカードを、どうにか取り返そうとしているのは気付いていたが、まさかこういう手段で来るとは予想しなかった。

見た目の好青年ぶりとはうらはらに、その性格はけっこうしたたかと言える。またそうでなければ、ここまで上手く交渉できないだろう。

（まあ、構いませんが）

実を言えばタシユアは、別段雪の女王のカードに思い入れはない。たまたまルーフェイアが使ってきたカードがそれだったというだけで、コレクションするつもりなどさらさらなかった。

「カードは今持っていますさんから、学院へ戻ってから渡します。それでかまいませんか？」

「ええ、ぜんぜん」

そう答えながらこの後輩は、時々ルーフェイアの長い金髪を、撫でるついでに軽く引っ張っている。

だがそれでも、ルーフェイアの方は嫌がる様子もなかった。

（――よく懷いたこと）

状況を理解しているのかいないのか、ともかくこの子は素直過ぎる。

「先輩すみません、ありがとうございます……」

何度言われようがこうやって、自ら墓穴を掘るのだ。

「言う相手が、違うと思いますがね」

「ご、ごめんなさいっ！」

また少女が瞳に涙を浮かべて、べそをかきはじめる。

（学習能力がないのですかね？）

確かにルーフェイアは学院の学年主席だが、全体的に応用力に欠けていた。

その上自主的な行動力も乏しい。同じ育ちかたをしているタシユアから見れば、よくこれで戦場を生き延びてきたとしか言いようがなかった。

もっとも任務にこの子を同行させたシルファの話では、戦闘となるとやはり群を抜いているという。また先日、新型の人形をイマドと2人で倒したらしい。

(どこまでいっても極端ということですか)

どう育てばこうなるのかは、もはや謎としか言いようがないだろう。

「ほら、こぼすなよ？　ンな端に置くなって」

「大丈夫だから……」

見ればまたルーフェイアを、イマドが甘やかしていた。

「イマド、少しは考えたらどうです。

24時間、あなたがついているわけにはいかないのですよ」
呆れながら忠告する。

ともかく彼女の母親といい従姉といいイマドといいシルファとい
いロアといい、ルーフェイアの周囲はどうも甘やかし過ぎだ。

「24時間って――まあ、それでもいいですけど」

「ルーフェイアには、まだ無理だと思うが……」

何気ないシルファの言葉に、一瞬場が凍りついた。

「先輩、いきなりそゆこと言います……」

「え、あ、いや、その……」

シルファが口を滑らせたのに気が付いて、しどろもどろになる。

Episode..16

「まったく、2人とも何をやっているんですか」

さらに例によって、何もわかっていないルーフェイアが追い討ちをかけた。

「何が、無理なんですか……?」

2人が顔を見合わせる。

「黙っていないで、説明してあげてはどうです?」

「タシユア……」

これほど面白い見世物はない。

「ねえイマド、どういう意味?」

シルファに訊いても叶わぬと知ると、ルーフェイアは相手を保護者に変えた。

もつとも結果は変わらない。

「ンなこと言われても……ああもう、そのうちな、そのうち!」

そう簡単には動じないイマドも返答に窮して、必死に言葉を濁している。

「いったい、いつの『そのうち』やら」

「先輩、煽らないでくださいってば!」

「煽った覚えはありませんがね」

もともとがいじめ癖のあるタシユアだ。見つけたネズミを、そう簡単に逃すわけもない。

一方で話題の当事者のルーフェイアは、まだきょんとしたままだった。

「ねえ、どうしたの？」

「なんでもねえって！」

——そですよね、先輩！」

「ああ、大したことじゃないんだ」

どうにか言い繕って場を収めようとする2人の慌てぶりは、最良クラスの娯楽と言える。

「何事も、知っておいたほうがいいと思いますが？」

「先輩！」

「タシユアっ！」

が、ここで思惑とは少々違う方向へ事態が転がった。

「あの、えっと、ごめん……！」

自分のせいだとしても勘違いしたのだろう、ルーフェイアがまた謝り始める。

「あなたが謝ってどうするんですか」

「す、すみません！」

こうなると、いつもの堂々巡りだ。

「なんでも謝ればいいとも思っているなら、大間違いですよ」

「……」

これがとどめになって、見事にルーフェイアが泣き始めた。声をあげるようなことはないが、涙が次々とこぼれ落ちている。

「やれやれ、今度は謝る代わりに泣くわけですか。呆れたものです
ね」

だがタシユアはそれ以上言わなかった。

ただし可哀想に思ったわけではない。単純に注文していた食事が

来ただけのことだ。

とりあえず口を閉じたタシユアに、シルファが隣でそれと分かるほどはつきりと安堵の表情を見せたが、これにも彼は突っ込まなかった。

通常より3ヶタほどずれているとはいえ、タシユアにも一応加減というものはある。

「ほら、泣いてねえで食べろって」

「あ、うん……」

向かいでも後輩たちが、運ばれてきた食事に手をつけ始めた。

「あ、これ……おいしい♪」

「だろ？」

とは言えルーフェイアにどこまで味がわいているかは、かなり謎だ。

「それが何か、わかっているのですか？」

「えっと……お魚ですよね……？」

試しに突っ込んでみると案の定、要領を得ない答えが返ってくる。

なにしろこの少女、華奢で繊細な外見に似合わずなんでも食べる——というか、何を食べさせられても文句を言わない。どうも基準は「毒でないこと」程度のようで、いざとなれば木の根でも「おいしい」と言うのでは、と思うほどだ。

（確かにそのほうが、戦場ではいいのでしょうか……）

ともかく色々な意味で、ルーフェイアは基準がずれている。

Episode..17

「まったく。自分が食べているものくらい把握しなさい。」

「それも分からないようでは、いざという時に生き残れませんよ」

「すみません……」

食べている最中にもかかわらず、ルーフェイアがうつむいた。もうひと押しすれば、また泣くだろう。

だが今度はそれより早く、イマドが口を開いた。

「ほら、泣かないで食べよな？ 早くしねえと晩メシの材料買うヒマ、なくなっちまうから」

「う、うん」

涙を飲みこんで、ルーフェイアが慌てて食べ始める。

「買いに、行くのか？」

シルファが尋ねた。

「材料」と聞いて気になったのだろう。

「んと、市場の中央通りの先にある、ちっちゃい店へ行こうかと思っ
て」

「もしかして、セスさんのお店か？」

「あ、そうです」

その店にはタシユアも覚えがあった。シルファが言うには、珍しいものを取り揃えているのだとかで、時々買い出しに付き合わされている。

「あの店じゃないと、そろわないモノって多いじゃないですか」

「そうだな。」

だが……大丈夫なのか？ それなりに値も張るはずだが……」

この2人、どちらもいろいろ作るだけあって、こういうことでは話が弾むようだ。

「叔父さんに小遣いもらったんですよ」

「なるほど。じゃあ、そこまで一緒に行くか？」

――タシユアもいいだろう？」

どうやらシルファも、同じ店へ行くつもりだったらしい。

「別にかまいませんよ」

話が決まって、みなで並んでいる食事を片付けにかかる。

テーブルの向こうでは、ルーフェイアが嬉しそうな顔をしていた。思いがけずこのあともシルファと一緒に行動できることになって、喜んでいいるのだろう。

タシユアにもこの少女はよく懐いているが、いじめることのないシルファには、もう一段懐いていた。

「ルーフェイア、その店へ行くのがそれほど嬉しいのでしたら、先にひとりで行ってきてはどうです？」

「え……」

思った通り、今度もルーフェイアが困り果てる。

ことごとく予想通りの反応を示すこの少女は、からかいやすいことこの上なしだ。

「遠慮せずにどうぞ」

「けど……ごはん、残したら……」

真に受けて、どうしていいか分からなくなったらしい。おろおろしながら、隣のイマドをすぎるように見ている。

「確かにお前、たいてい最後だもんなあ。先に行くどころか、最後になりかねねえし」

「でしたら、後から来ればいいでしょう。私たちは先に行きますから」

ルーフエイアを泣かすのが面白くてしょうがないタシユアだ。容赦がない。

「だがタシユア、この子をひとりで残すのは……」

シルファが横から口を挟んだ。可哀想だ、というのだろう。

「——ルーフエイア、早く食べてしまいなさい。みんな遅くなりま
す」

「は、はい！」

「あ、バカ、せっかくなんだから味わって食え」

イマドとタシユアの2人から正反対のことを言われながら、また慌ててルーフエイアが食事を食べ始める。

「やれやれ。」

早くとは言いましたが、喉でも詰まらせるつもりですか？」

「え、あ、ごめんなさい……」

またもやルーフエイアが謝ったが、シルファを困らせるつもりはないタシユアは、それ以上は言わなかった。

Episode..18

◇Sylpha

外は午前中にもまして暖かくなっていた。周囲を歩く人々もそれにつられたのだろう、やはりどこか華やいている。

会計の方は言葉通り、タシユアが払った。

——その時また、ルーフェイアが泣かされたのだが。

こともあろうに、支払をしようとしているタシユアに「本当に大丈夫か」といったことを、うっかり尋ねたのだ。

まあ、この子は心配してのことなのだろうが……。

性格はともかく、上級傭兵の中でもトップクラスの実力を持つ彼は、その給料も当然高い。かといって本以外にはさして使うわけもないから、タシユアはけっこう貯めこんでいた。

だがそれをルーフェイアが知るわけもなく、親切心から言っ泣かされた格好だ。

ただもう幾らか時間が過ぎているから、今はこの子も、春たけなわの雰囲気を楽しみながら歩いている。

「なんか面白れえもん、入ってるといいんだけどな」
少し前を歩くイマドがひとりごちた。

それにしても、彼も珍しいタイプだろう。この学院では男女関係無しに料理は教えられるし、何より自分のことは自分でやるのが基本だが、この少年はそういうレベルは遥かに超えている。

しかも5歳からずっとここにいるというのだから、どこで教わっ

たのか……。

「何、買うの？」

「わかんね」

とりあえず行ってみようというのだろう、いい加減な答えを返していた。

隣をとこと嬉しそうに歩くルーフェイアは体格差のせいで、まるで後輩か妹といった感じだ。

もっとも普段のやりとりもそうだから、そういう風に見えてもおかしくない。

「それにしても、暖かくなりましたね」

「ああ」

先に行く後輩たちを見ながら、駅前広場を抜けた。目的の店がある市場は港のほうから行けるが、今はこっちのほうが近い。

——それにしても、可愛いな。

前を歩くルーフェイアの姿は、人形が動き出したようだ。

普段見る制服姿も十分可愛いが、今は薄桃色——この年齢でこの色が着られる子は少ないだろう——の洒落たワンピースに、真っ白なボレロを羽織っている。

どうも同室のロアやクラスメートが、この子を着せ替え人形にして楽しんでいらしい。だが当人の好きにさせるとまるで少年のような格好ばかりするから、この方がいいのだろう。

これで太刀さえ持っていなければ、言うことないのだが……。

タシユアと同じでこの子も、丸腰というのは落ちつかないらしい。しかも太刀はタシユアの両手剣に比べて携帯が楽だから、学院外で

もたいていどうにかして持ち歩いている。

そうやっているうちに、市場となっている広場へさしかかった。

「人が……ずいぶん多いな」

「陽気がいいですからね。それにけっこう、観光客もいるようですし」

「確かに……」

言われてみれば、ツアーらしい集団も時々見受けられた。

と、不意に前を歩いていたルーフェイアが立ち止まる。

イマドが気軽な調子で振り向いた。

「どした？」

私とタシユアも、この子の傍へと行く。

「何か……あったのか？」

「いえ……」

ルーフェイアの言葉は歯切れが悪かった。

「はっきり言いなさい。言わずにわかってもらおうなど、虫が良すぎますよ」

だが珍しくタシユアのきつい言葉にも泣かず、ただこの子は首を振る。

Episode..19

「なんだ、自分でもわかんねえのか？」

「——うん」

「では、気のせいだったのでしょうか」

あっさりタシユアが切り捨てて、おしまいになった。

ただ例によって、彼は一言付け加える。

「だいいち、この世の中にあなたを気にする人が、そうそういるとも思えませんしね」

「ごめんなさい……」

また冗談？を間に受けて、この子がうつむいた。

——朝から何度目だろうか？

普通とは違う意味で、タシユアとルーフェイアは相性が良すぎる。

「ほら、泣いてっと置いてっちまうぞ？」

「や、やだっ！」

イマドの言葉に驚いたのだろう、この子が泣くのを止めて慌てて走り寄った。

「ばーか、ウソだって」

「もう！」

それにしてもイマドも、案外意地が悪いような……。

「ほら、怒るなって。向こう着いたら、めずらしいチョコでも買ってやつから」

「……♪」

さすが保護者を買って？出るだけあって、対応が見事だ。ルーフ

エアが、嬉しそうな表情になる。

「チョコレートひとつで釣られますか」

「……………」

こっちも対応が見事だ。今嬉しそうにしていたこの子が、たちまち悲しそうな表情に変わる。

それにしても、大人しいなりに表情がくるくると変わるルーフェイアは、見ていて飽きなかった。

「そんなに……悲しそうにするな。」

新しい材料が買えたら、またケーキを作るから」

「シルファまで一緒になって甘やかして、どうしますか」

例によって忘れずタシユアが突っ込んできたが、私は切り返した。まるつきり言われっぱなしというのも、なんとなくつまらない。

「別に、いいじゃないか。それに作れば、タシユアも食べるんだろう？」

「それとこれとは別でしょう」

——やっぱりかなわない。

なにしろタシユアの毒舌を躲せる人間は、数えても片手で十分にと足りるのだ。

これ以上何か言っていると、それこそ收拾がつかなくなりそうで、結局私は言うのを止めた。

「ルーフェイア、行こう。もうすぐそこだから」

「あ、はい」

案の定タシユアはもうなにも言わなかった。

自分に矛先が向けば話は別だが、基本的に彼はあまり他人に興味

を示さない。自分は自分、他人は他人という態度がはっきりしている。

——ルーフェイアだけは、別らしいが。

いじめ易いのがことのほか気に入ったのだろう、この子が寄ってくるとタシユアは、ほぼ必ず相手をしていた。

しかもルーフェイアのほうも「泣かされる」ではなく「自分が悪いから叱られる」と思い込んでいるから、嫌うことがない。

まあそのうちに、気が付くだろうが……。

「その角を……左、だよね？」

ルーフェイアが通りの先を指差した。イマドと行ったことがあるらしい。

だが店を良く知っているはずのイマドの方が、訝しげな表情になる。

「どうしたの？」

「いや、なんか……休みみてえだぜ？」

「？」

まだ店が見えているわけでもないのに、この後輩がそんなことを言い出した。

Episode..20

「おやおや、ずいぶんと目がいいですね」

「ンないじめないでくださいよ。それに、行ってみれば分かりますって」

それもそうだと、みんなで通りの角を曲がる。

果たしてイマドの言うとおりで、店は「今日と明日、臨時休業します」という札が下がっていた。

「おやすみですね……」

「せっかく、来たんだが……」

「あれ買おうと思ってたのにな」

私とイマド、それにルーフェイアから、三者三様の声があがる。

「これは残念でしたね」

タシユアが、見ると意地の悪い微笑みを浮かべていた。ともかく人を困らせる——この場合は「困っている」だが——のが好きなのだ。

「——遊びに行くぞ！」

妙に悔しくなって宣言する。これが2人だけなら買い物に引き回すところだが、後輩たちがいるからその手は使えない。

ルーフェイアの手を引いて歩き出すと、従順なこの子が戸惑いながらもちゃんとついてきた。

「あの、先輩、でも、どこへですか……?」

訊かれて少々考え込む。とっさにああ言ってしまったが、「どこ」と決めていたわけではない。

だがここで下手に黙っていると、またタシユアに突っ込まれるし

……。

もう少しだけ考えて、私は答えを口にした。

「キエーグでもしよう」

「あ、俺賛成♪」

付き合いのいいイマドが早速乗ってきた。ルーフェイアは最初から拒否しない。

「タシユア、行くだろう？」

実はこれだけは、私のほうが上手いのだ。

「――ええ」

思惑通りの少しだけ憮然とした表情で、それでもイエスと言った彼に、なんとなく可笑しくなる。

「シルファ先輩、で、どこへ行くんです？」

イマドがまた、気軽な調子で尋ねてきた。このケンディクに何軒もある店の、どこへ行くのかというのだろう。

確かに店によってはいろいろ趣向を凝らしていたりもするが、私はあまり、そういうものには興味はなかった。

「そうだな……。」

近いところで、いいんじゃないのか？」

「それもそうですね」

ケンディクは観光都市のせいか、娯楽施設の数は一見多い。目立たないのは、街並みを重視した建築規制のせいだ。

もちろんいちばんの売り物は透き通った海、それに豊かな自然なのだが、この街も雨に見舞われることはある。

そうなれば海や周囲の森はとも観光どころではなくなるし、そ

うでなくても泳ぐのに疲れて「今日は屋内で」という観光客もいないとは限らない。それに今のような季節は、どうやっても泳ぐには寒いだろう。

そんなわけで、この街は楽しむ場所には事欠かなかった。

「あそこ行くんだったら、割引券持ってくるんだったぜ」

「近いところ」ですぐにどの店か分かったのだろう。イマドがぼやいている。

「私が出すから、気にするな。それは今度……友達とでも、使うといい」

「あ、ども♪」

実家からの仕送り？でお金に困ることがないルーフェイアはともかく、この少年の方はお小遣いは、学院からの支給だけのはずだ。それなのにまさか、上級傭兵で給料をもらっている私たち相手に、割り勘というのは可哀想だった。

だいいち誘ったのは、私だ。

それからふと気付いた。

「ルーフェイア、まさかとは思いますが……キエーグは、知ってるのか？」

「ええと、ボール投げて、壊すのですよね？」

「どうやら知っていたらしい。」

Episode..21

「想像しているのが本当にキエーグかどうか、怪しいものですがね」
タシユアが毒舌を付け加える。

「す、すみません！」

もう条件反射になってしまっているのか、誰も「悪い」と言わないうちから、ルーフェイアが謝りだした。

「何に謝っているのです？」

「いえ、あの……ごめんなさい……」

「誰が謝れと言いました」

次々と返されてこの子がうつむく。

もつとも私に手を引かれているから、立ち止まることはなかった。

「ほら、ルーフェイア、そうやっているとつまづくぞ？」

「あ、すみません……」

「いや、謝らなくてもいいんだが……」

やはりこの子の相手は、イマドが適任らしい。いつものことなのだが、ともかく私とだと会話も続かなかった。

まあこれは、私が上手く話せないせいもあるのだが……。

「お前がさ、どんな点数出すか楽しみだな」

「イマド、ひどい……」

珍しく言外を感じ取ったようで、ルーフェイアが少し拗ねて抗議している。

——こんな表情をするんだな。

タシユアが相手だとこの子は泣くばかりで、なかなか他の表情は

見られない。性格が繊細なものも手伝って、何か言われるとすぐ自分を責めるのだ。

「それ以前にルールをどれほど理解しているか、少々疑問ですが」
「……………」

タシユアにからかわれて、ルーフェイアがまたうつむいた。
ともかくきりが無い。

「ほら、ここだから」
これ以上タシユアに言われないうちに、建物のなかへ連れていく。
中と思ったほどの人はいなかった。

「らっきー、すいてるぜ」
イマドが声をあげる。

もっとも「空いている」といっても、いくらか待っている人はいった。いつもに比べれば、というだけだ。

「待つしかないな」
「まあ、さほどは待たないでしょう」

自分の言葉に確信があるのだろう。タシユアはさっさと準備を始めた。

私たちもそれに習う。心配したルーフェイアも友達と来たことがあるためか、教えなくても同じようにしている。

「あの調子なら、大丈夫そうだな」

「あの年齢で知らなくては、あまりにも常識外れですよ」
いつものことながら、タシユアの毒舌は途切れることがない。
そうこうしているうちに順番が来たのだろう、係員がこちらへと向かって来た。

「ルーフェイア、ちゃっちゃとボール取ってこいって」

「う、うん」

見ればイマドは、いつのまにかボールを既に手にしていた。ともかく要領のいい子だ。

「どれでも……いいんだよね？」

「その辺に並んでるやつから、テキトーにな」

「わかった」

こつくりとわずいて、ルーフェイアがボールを取りに向かう。

——大丈夫だろうか？

ただボールを取ってくるだけなのだが、ルーフェイアがするとなると何か心配だ。

だが見ていると、無事この子は柵——重さの違うボールが、幾つも並べてある——へと向かった。それから少し首をかしげて考えて、柵に沿って歩き始める。

そのうちタシユアの隣まで来て、ひょいとひとつ手に取った。

Episode..22

「――あいつ、どーゆー腕力してるんですかね？」

「私に言われても、困るんだが……」

何を思ったのかルーフェイアは、タシユアと同じ重さボールを手にしたのだ。

「ルーフェイア、あなたの腕にその重さは、余ると思いますがね」
さすがのタシユアも、呆れ顔で忠告する。

当たり前だが重いものだと、破壊力がある代わりにコントロールが難しい。大剣を片手で軽々と扱うタシユアならともかく、折れそうに華奢なルーフェイアでは、どう見ても手に余るだろう。

だがこの子は、なんのことか分からないようだった。しばらく自分が手にしたボールを見、首をかしげながら言う。

「これ、重いですか？」

一瞬私たちは沈黙した。

「おい、いちばん重いやつだぞ、それ」

「え、そうなの？」

イマドに言われてもまだ、この子はピンとこないらしい。

確かにその細い腕は、ボールの重さなど感じていないようだが……。

「――今も精霊を憑依させているのですか？」

「はい」

訊かれてルーフェイアは、素直にうなずいた。

タシユアの表情がちらりと――私にしか分からないだろうが――

険しくなる。

「普段から精霊に頼るのは、考えものですよ」

しかし言葉には微塵もそれを見せず、いつもと同じ声音だった。

「ルーフェイア、本当に、大丈夫なのか？」

私も心配になって尋ねる。

シエラ学院では確かに精霊の使用を認めているが、それでも上級傭兵か候補生に限られ、それ以下の子供が使うのは禁止されている。

公式には何事もないということになっているが、精霊を使うと稀に精神障害を起こすというのは、公然の秘密だからだ。

それなりに大人の上級隊でさえこれなのだから、小さい子供が使った際に「喰われる」可能性は、かなり高かった。

またそうでなくとも精霊には、身体機能を強引に引き上げる作用がある。そんなものを成長途中の小さな子が使って、ただで済むとは思えない。

ルーフェイアが重さを感じなかったのはこのせいだろうが、それだけに心配だった。

「私も、普段から精霊を憑依させるのは、よくないと思うが……」

この子の表情が翳る。

どきっとするような、子供らしくない哀しげな表情。

「いや、その――今までそうしていたなら、大丈夫なんだろうが」
言い繕った私の言葉に、ルーフェイアが寂しげに微笑んだ。

次いでその手に光がわだかまって、2つの石になる。この子が精霊を外したのだ。

「2体も憑依させていたのですか」

「――はい」

タシユアの声は相変わらずだったが、珍しくこの子は泣かなかった。碧い瞳に、その年齢からは考えられない悲しさをたたえながら、手の上の石を見つめている。

なんだかいたたまれなくなって、私は口を開いた。

「その精霊は……炎系か？」

石化させた精霊は、たいていその属性に応じた色を持つ。2つ持っているうちのひとつは、紅みを帯びているから、たぶんそうだろう。

「えっと、炎系の……サラマンダーなんです」

あまり聞かない精霊の名前を、この子は口にしました。

Episode..23

「サラマンダー？ 珍しいな、中級か？」

「えっと、多分そうだと、思うんですけど……」

あまり聞かないだけに分類も曖昧らしい。

もっともこの分類も、その威力で適当に人が決めただけで、これといった基準もないのだが。

「こっちはこないだの、雷呼ぶヤツだろ？」

イマドは見たことがあるのだろう、薄黄色のクリスタルを指差してそう言った。

「うん、イマドも……いる？」

「いいっていいって」

低位でも精霊は貴重なのに、まるでその辺の石ころのような扱いだ。

「でも、家にいっぱい……余ってるし……」

「――マジかよ」

「なんと言うか……凄いな」

イマドといっしょに私も驚く。

先日のアヴァンでの件から、何か相当の曰くつきだとは思っていたが、想像以上だ。

すぐ使用できる状態の精霊は貴重で、シエラでさえ余りなどないのだ。なのにそれが、「いっぱい」余っているというのだから、常識的なラインを遥かに超えている。

何より、そういうものを大量に備えていること事態が、かなりあ

り得ない話だ。どこかの組合ならともかく、ふつうの家で持つようなものではない。

「まったく、あなたの家と来た日には。

ですがそれより、早く始めたほうがいいと思いますがね」

「――あ」

タシユアの言葉に、私たちがここへ何をしに来たのか思い出す。

「ルーフエイア、ほら、早くいちばん軽いの持ってこいって」

「……うん」

とことごと、この子が歩き出した。

だが……何か様子がおかしい。

「ルーフエイア、どうかしたのか？」

「いえ、なんでも……」

そう答えながら、この子がふらりとよろける。

「おいっ！」

「ルーフエイアっ！」

とっさにイマドと2人で駆け寄って、両側から支えた。

「どうしたっ、大丈夫か！」

「うん……」

だが表情はどこか虚ろで、かなり消耗しているようだ。

「本当に大丈夫か？ 戻って休んだほうが、いいんじゃないのか？」
が、答えがない。

「ルーフエイアっ！ しっかりするんだ！」

「……精……霊……」

私たちに支えられたまま、ぼんやりとこの子がつぶやく。

「え？」

「精霊？　それがどうしたんだ？」
だがこの子は、答えなかった。

Episode..24

◇Tasha Side

妙に強引なシルファに連れられていったキエーグ場は、思いのほか空いてた。休日なもの、春たけなわと言った暖かい日和のせいだろう。

とはいえ、まったく人がいないわけではない。

「待つしかないな」

「まあ、さほどは待たないでしょう」

ざっと見回した感じからタシユアは、すぐ空くと判断していた。さっさと用意をし、ボールを取りに向かう。

「ルーフェイア、ちゃっちゃとボール取ってこいって」

「う、うん」

いつのまにかボールを手になっているイマド——呆れるほどに要領がいい——にうながされて、ルーフェイアもボールを取りに来た。

（無事に選べますかね？）

面白半分に見ていたが、さすがにこの程度は知っていたらしい。きちんと柵に沿って歩いて、どれにするか迷っている。

と、この少女がタシユアの隣まで来て立ち止まった。

「♪」

なにやら嬉しそうな顔を見ると、ひょいと同じボールを手にする。

「——あいつ、どーゆー腕力してるんですかね？」

「私に言われても、困るんだが……」

少し離れたところで、同じように見ていたシルファとイマドがそ

んな言葉を交わしているのを、タシュアの鋭い耳は捉えた。

もっとも、そう言って当然だろう。

なにしろタシュアは、普通なら持ち上げるのがやっという両手剣を、「片手で」振り回せるほどの臂力の持ち主だ。それなのに折れそうなほど華奢なルーフェイアが、楽々と同じボールを持っているのだから、これはもう奇異としか言いようがない。

「ルーフェイア、あなたの腕にその重さは、余ると思いますがね」
さすがに呆れて忠告する。

だがこの少女は、事態をまったく理解していなかった。

「これ、重いんですか？」

シルファやイマドはもちろん、タシュアも一瞬絶句する。

「おい、いちばん重いやつだぞ、それ」

「え、そうなの？」

どうにか立ち直ったイマドが説明したが、まだそれでもルーフェイアは理解できないようだった。

この状況にタシュアは、あることに思い当たる。

「――今も精霊を憑依させているのですか？」

精霊を使って身体機能を引き上げれば、本来を遥かに上回る力を出せるようになる。

「はい」

案の定、この子が素直にうなずいた。

「普段から精霊に頼るのは、考えものですよ」
言われて少女は視線を落とす。

「ルーフェイア、本当に、大丈夫なのか？」

シルファからも言われて、ルーフェイアがひどく悲しげな表情になった。

（――なにが悲しいのやら）

なにしろタシユアにしてみれば、泣いたり嘆いたりしてもことは運ばないと言うのが信条だ。

だが優しいシルファは、そうは思わなかったらしい。

「いや、その――今までそうしていたなら、大丈夫なんだろうが」
慌てて言い繕っている。

ルーフェイアが寂しげに微笑み、その手の上にクリスタル状のものが2つ現れた。所有者が決まってる精霊を外すと、こういう形をとる。

――それにしても。

「2体も憑依させていたのですか」

「――はい」

憑依させる精霊の数が増えれば、それだけ負担も増すのだ。

Episode..25

(よくまあ、平気ですこと)

そのタシユアの前で、少女はやはり悲しそうに石化した精霊を、見つめるだけだった。

雰囲気になえかねたのだろう、シルファが口を開く。

「その精霊は……炎系か？」

「えっと、炎系の……サラマンダーなんです」

シュマーなだけあって、あまり聞かない名前の精霊だった。

「サラマンダー？ 珍しいな、中級か？」

「えっと、多分そうだと、思うんですけど……」

しかも分類まで適当らしい。

とはいえ分類は人が設けたものだ。すべての精霊が当てはまるとは限らない。

「こっちはこないだの、雷呼ぶヤツだろ？」

翠かったほうのクリスタルを指差して、イマドが訊いた。いつも一緒にいるがゆえに、何を持っているか把握しているのだろう。

「うん」

ルーフェイアのほうもうなずく。

ただ次の台詞は、少々予想外だった。

「イマドも……要る？」

貴重なはずの精霊を差し出して、呆れるようなことを言い出す。

「いいっていいって」

「でも、家にいっぱい……余ってるし……」

「――マジかよ」

イマドがため息をついた。

「なんと言うか……凄いな」

シルファもさすがに度肝を抜かれたようだ。

「まったく、あなたの家と来た日には。

ですがそれより、早く始めたほうがいいと思いますけどね」

「――あ」

ひとり冷静だったタシユアが指摘すると、シルファが妙な声を出した。

改めて思い出したのだろう。

「ルーフェイア、ほら、早くいちばん軽いの持ってこいって」

「……うん」

イマドにうながされて、少女も精霊を仕舞い込み、とことことボールを取りに歩き出した。

が、その足取りが何かおかしい。

「ルーフェイア、どうかしたのか？」

「いえ、なんでも……」

心配したシルファが問いかけたが、帰ってきたのはいつもどおりの答えだ。

（ですが……）

医者ではないタシユアが見ても、平気なようにはとても思えない。と、不意にこの子がよろけた。

「おいっ！」

「ルーフェイアっ！」

イマドとシルファとが、とっさに出て両側から支える。

「どうしたっ、大丈夫か！」

「うん……」

問いに答えるその表情は、虚ろだった。そうとう消耗しているように見える。

「本当に大丈夫か？ 戻って休んだほうが、いいんじゃないのか？」
心配そうに言ったシルファの言葉も、今ひとつ届いていないようだ。ぼうつとした様子のまま、かすかにつぶやく。

「……精……霊……」

「え？」

「精霊？ それがどうしたんだ？」

両側で支えながらイマドとシルファとが不審がったが、タシユアはピンときた。

すぐに少女の荷物を開け、先ほど外していた精霊を取り出す。

Episode..26

「ルーフェイア、これを」

瞳が何も見ていないのに気づいて、やむなく手に持たせた。

そのまま様子をうかがう。これで当人が、手の内のものを認識出来なければお手上げだ。

だが幸い、この子の表情が僅かに動いた。上手く気づいたようだ。結晶化していた精霊が光に変わり、消える。同時にルーフェイア自身に表情が戻り、荒い息をついた。

「いったい……どうしたんだ？」

何が起こったのか、まだ理解出来ないのだろう。シルファが尋ねる。

少し間を置いて少女が答えた。

「あたし、精霊外すと……体調、狂って……」

「ばかやろっ、そゆのは早く言えっ！」

「ご、ごめん……」

間髪入れずのイマドの怒声に、ルーフェイアが泣くのも忘れて謝る。

「まったく、言うこと聞くのも時と場合によるだろっ！

こんなんでどうかなったら、どうするつもりなんだよ！」

「イマドの言うとおりだぞ」

心配しているのだろう、シルファの声もいつもに比べるとやや厳しい。

「ごめんなさい……」

保護者二人に言われて、さすがに少女がしよげ返った。

「――まあいいや、とにかくボール持ってこいって」

「あ、うん」

慌ててルーフフェアが、軽いボールを取りに行く。

（問題なさそうですね）

さっきとはうって変わって、その足取りも動きもしっかりしている。

程なく少女が戻ってきた。

「ええと、向こうか。」

――ルーフフェア、行こう」

シルファが場所を確認して移動し、後輩たちが続いた。係員に指定された場所まで行くと、借りたベルト浮遊石が反応して身体が軽くなる。

誰かバランスでも崩すのではないかと、ひそかに期待したのだが、それはなかった。

（残念ですねえ……）

ルーフフェアあたりが何かしくじると面白いのだが、この子は身体を扱うことに関しては、群を抜いている。

「ほらルーフフェア、お前投げてみるよ」

「え、でも……」

うながされたこの子がためらう。

「まさか、やり方が分からないというのではないでしょうね」

「いえ……」

そうは言うものの、ルーフフェアは不安そうだ。

キエーグは要するに、玉投げだ。少し離れた場所にある魔法で作った10個ほどの玉を、こちらから別の玉を投げて壊す。

——ただし、浮いた状態で。

元々は玉を転がして、少し先にある的に当てていたらしい。だが浮遊石が増産出来るようになった頃から、今のスタイルに変わった。単純なルールに加え投げ方なども自由度が高いのだが、足元が不安定なうえ玉の重さは変わらないので、コントロールが難しい。

加えて的のほうも、ふわふわと漂う魔法球が使われるようになり、さらに難しくなっている。

「まったく、んじゃ、俺投げっぞ」

埒があかないと見たのか、イマドがトップを買って出た。本当にこの後輩はそつがない。

そのままふわりと投球ゾーン——床はない——へ出て、意外なくらいきれいなフォームで、だがどこか無造作に投げた。

Episode: 27

「――げ」

投げると同時に妙な声。

「どうしたの？」

「2つ残った」

不思議そうにルーフェイアが考え込む。

「よく……分かるね？」

「普通分かるだろ？」

「そうなの？」

それにしてもここまで知らないとなると、たいしたものだろう。ともかく後輩たちがそんなやりとりをしているうちに、ボールが密集していた魔法球に当たり、言った通り2つ残った。少女が顔を上げる。

「――イマド、占い師になれるね？」

「やめてくれ……」

珍しく突っ込んだ少女の言葉に、イマドは心底嫌そうな表情だ。

「えっと、あの、イマドごめん……」

「いって。つつーか、こないだ妙に姉貴にからかわれただけし。

――けど、なんか思い出したらハラ立ってきたな」

なにやらぶつぶつ言いながら、戻ってきたボールを手にし、また無造作に投げる。

「って、またかよっ！」

「今度は……どうしたの？」

「外した」

「そうだな」

ボールのコースを見ながら、シルファが相槌を打つ。

「先輩も……分かるんですか？」

「いや、慣れてくれば大抵、分かるぞ？」

そのうち見事にボールが、魔法球を素通りした。

「スペア行くと考えたのによ」

「すぺあ……？」

ぼやくイマドの隣で、ルーフェイアは今度はきょとした表情だ。

「どこに、スペアなんてあるの？」

「違うって！ あゝもう、今説明すつから……」

毎度のことながら、本気で知らなかったらしい。

「この調子では、投げ方を知っているかどうか怪しいものですね」「すみません……」

いつものパターンだ。

もっともシルファもイマドも慣れてしまっているから、以前のようには気にしない。

「ルーフェイア、先に投げてもいいか？」

「あ、はい、どうぞ」

すんなりとルーフェイアが了承した。そもそもが、自発的な行動力には欠ける子だ。反対するわけもない。

投げようというシルファは、嬉しそうだった。もともと上手い——タシユアより上だ——のに、しばらく来ていなかったせいだろう。

女性なうえ長い髪と口下手ゆえの無口から、大人しい性格と思われることが多いが、実際の彼女はかなりの肉弾派だ。

軽く床を蹴ると、優雅に投球ゾーンへと出る。

「――！」

イマドがまた妙な声を出した。

「どこを見ているのです」

「あ、いや、その……」

「――？」

例によってルーフェイアは分かっているが、タシユアは周囲で投げていた男性グループも、こちらを見ているのに気がついていた。
(まったく、よく見つけますこと)

要するに、深く開いたスカートの前スリットから覗く、シルファの脚を見ているのだ。

――当のシルファは気づいていないのだが。

どうもこの辺が、シルファは鈍い。肌を見せるのはひどく嫌がるのに、ブラウスが透けているのは気にしなかったりするのだ。

投球動作に入った彼女は、流れるように腕を動かし、なめらかにボールを押し出した。

Episode..28

「あ、すげえ……」

「これは行きましたかね？」

「――?？」

若干1名分かっていないようだが、理想的なコースだ。振り向いたシルファも、満足げな笑みを浮かべている。

それからすぐ、軽快な音と共にすべての魔法球が弾けた。

「あ、先輩、すごい……♪」

ルーフェイアもようやく理解したようだ。

（この程度はさすがに、知っているわけですか）

そう思っこの少女を見ていたのも束の間。

「先輩……もう1回、投げないんですか？」

これには訊かれたシルファのほうが、啞然としている。

「ぜんぶ壊した時は……もう1回は、投げないぞ？」

「え？ あれ……?」

どうも何かと勘違いしているらしい。

「ルーフェイア、本当にキエーグをしたことがあるのですか？」

「すみません……」

「質問に答えていませんよ」

「えっと、あの……」

話が進まない。

「ともかく、やったことはあるんだろう？ ほら、投げたらどうだ」

いじめている途中で、シルファが攫っていった。
この子にボールを持たせて、投球ゾーンへ送り出す。

「まっすぐ投げれば、大丈夫だ」

「まっすぐ、ですか……？」

ルーフェイアが少し考えて、投球動作に入った。

（――おや？）

意外に綺麗だ。生と死が交錯する場所で育ったゆえか、自分の身体を扱うことには長けているのだろう。

――もつとも水に入ると、まともに動けないのだが。

そんなことを思いながら見ているうちに少女の手からボールが離れ、軽く飛んで行った。

「なんてやつだよ……」

イマドが呆れる。

それもそのはず、ルーフェイアの投げたボールは、ほぼ完全に真っ直ぐなのだ。計れば多少の差はあるのだろうが、左右に曲がることはない。

結局そのまま魔法球へ突っ込んで中央を抜け、ボールが軽いせいもあって、右に1つと左に4つ残す結果になった。

「驚いたな……」

見ていたシルファも、どこか呆れた声になる。

「え、でも、先輩真っ直ぐって……」

「だが、こうまで真っ直ぐというのも……」

「ですけど……」

当人は言われたとおりにしただけらしい。

「——お前さ、こゆふに真っ直ぐに投げんのって、かえって難しいんだぜ？」

「そうなの？」

これで出来るのだから、たいしたものだ。

「にしても、これじゃ全部壊すのはムリだな。

んと、そうしたら——この辺からあっち向かって、真っ直ぐ投げてみ」

「わかった」

こっくりとうなずいて、この少女が再度投球ゾーンへ出る。
それからまた、なめらかにボールを投げた。

Episode..29

「って、ホントにまた真っ直ぐ投げるか？」

「たいしたもんだな……」

素直と言うのだろうか？ ルーフェイアが投げたボールは、また見事に真っ直ぐ進んでいく。

「なんと言いますか」

タシュアも呆れる以外に言葉がない。

そうしているうちに、ボールは左側の4つを次々と壊した。

「えっと……9個？」

「10個しか的がないんですから、当然でしょう。引き算すればすぐ分かります」

「ごめんなさい……」

本当に面白いくらい予想通りの反応を示す。

「これだけ壊したんだから、いいじゃないか。

——タシュア、投げないのか？」

「投げますよ」

どうもシルファは、最近は対応の仕方を覚えてきたようだ。

（——他の手を考えますかね？）

そんなことを思いながら立ち上がってボールを手にし、投球ゾーンへ出る。

後輩2人が興味深々といった調子で見ているのが分かった。

「何がそんなに面白いのです」

「す、すみません！」

「あ、気にしないでくださいってば」

振り向いてのタシユアの一言にルーフェイアはまた謝ったが、イマドのほうは適当な調子だ。

さらに言うのも面倒で、そのまま投げる。

「さすが、速ええぜ……」

「すごい……」

後輩たちが驚いた。

「まあ——まずまず、ですか」

コースがやや甘く左半分が残ったが、左右に散らなかっただけいいだろう。

だが戻ってくると、シルファが怪訝そうな表情だった。

「どうかしたのですか？」

「その……大丈夫、なのか？」

「なにがです？」

重ねて訊くと、シルファがくちごもる。

「はっきり言わないと、わかりませんが」

「いや、なんと言うか……力任せに投げてるように、見えただが……」

「そんなことはありませんよ」

言い切ると、シルファはそれ以上追求してこなかった。それ以上訊いても無駄だというのを、よく知っているからだろう。

それにしても、さすがに彼女は鋭い。普段から傍で見ているだけのことはある。

実を言えば、今日に限って任務の疲れが抜けなかった。そのせい

でどうもコントロールが今ひとつ効かず、力の加減も上手くないかなのだ。

（――徹夜が祟りましたかね？）

たいした任務ではなかったのだが、警戒時間が長くほとんど仮眠も取っていない。

ただこういう事は初めてだった。かつて戦場にいた頃も、上級傭兵となって任務をこなすようになってからも、徹夜程度でバテたためしはない。

とはいえ、いま本調子でないのは確かだ。

Episode: 30

（今晚は早く寝ますか）

さっさとそう結論付けて2度目のボールを手にとった、その時だった。

「――？」

不意に辺りが揺れた気がして、動きを止める。

（地震、ですか……？）

が、その割には周囲が騒ぐ様子はない。

そして急に視界が暗転する。

シルファが何か言っているのが、遠く聞こえた。

（そんなに騒いでは、他のお客の迷惑でしょうに）

なにがどうしたのか把握しようとしながら、ぼんやりと突っ込みだけは入れる。

状況が良く分からなかった。

「きゅ、救急車っ！ 早くっ！！」

「シルファ先輩、落ち着いてくださいってば」
やりとりが聞こえる。

と、誰かがちよんちよんと突付いてきた。

「先輩、生きてますか……？」
ルーフェイアの声だ。

「――勝手に殺さないでもらえますかね」
反射的にそう言い返してから、やっとタシユアは自分の状況に気がついた。

（私としたことが）

体調が悪いのに出歩いたのが祟って、倒れたらしい。
うろたえきったシルファが目に入る。

「なんですか、その顔は。たいしたことはありませんよ」

「倒れておいて、『たいしたことない』わけがないだろう!!」

「動けるのですから、問題ありません」

言って起き上がろうとする。

「おや？」

身体に力が入らなかった。上手く立ち上がれない。

「だから言ったじゃないかっ!!」

普段は物静かなシルファが、かなりの剣幕だ。

もっともイマドはあの性格だし、ルーフェイアも以前こういうシルファを目にしたことがあるため、それほど気にする様子はない。
むしろタシユアのほうを見て、2人とも「意外そのもの」という表情をしていた。

「私が入並みなのが、そんなに意外ですか」

「いえ、あの……すみません……」

「タシユア、突っ込んでる場合じゃないだろう!」

始まりかけたいつものやりとりを、シルファが遮る。よほど心配しているようだ。

（――彼女らしいですね）

意外だが、シルファにはこういう一面もあるのだ。

「熱でも、あるんじゃないか? じゃなきゃ、なにか病気とか」

もう一度起き上がりかけたところへ、彼女が手を伸ばしてくる。
これがルーフェイアあたりなら反射的に避けたのだろうが、シル
ファだったために避けなかった。

次の瞬間。

「タシユアっ!!」

「なんです、大声を出したりして」

「こんなに熱があつて、何で言わなかったんだっ!」

「おや、熱がありましたか」

どうりで調子がよくないわけだと納得する。

Episode 31

見るとルーフェイアが、呆然とした表情だった。イマドにいたつては、後ろを向いて笑っているらしい。
そしてぽつりと少女がつぶやく。

「タシユア先輩、強いんですね……？」

「そういう話じゃない！」

「ご、ごめんなさいっ！」

珍しくシルファに突っ込まれて、ルーフェイアがまた平謝り状態に入った。

「泣かせてどうするのです」

「え、あ、いや……えっと、そういうつもりじゃ……。」

——そうじゃない！ タシユア、病院へ行くぞ！
なぜか、とぼっちりがこっちへ来る。

「一晩寝れば治ります」

「だめだ！」

いつになくシルファは強引だ。

そこへおずおずと、ルーフェイアが口をはさんだ。

「あの、先輩……風邪薬ならあたし、持ってますけど……」

言いながら、持ち歩いている小さなポーチを開けている。

「本当か？ そうしたらタシユア、とりあえずそれを——」

「冗談はやめてください」

飲まされそうな勢いに、思わず言い返した。

「ルーフェイアに合わせた劇薬など飲まされた日には、命がいくつ

あっても足りません」

「あの、これ……わりと普通の、お薬ですけど……？」

「その『わりと』と言うのはなんですか」

「え……」

ルーフェイアが答えに窮する。

——もつとも薬というものは、どの辺を「普通」とするか微妙なのだが。

どちらにしても、得体が知れないのは確かだ。

「ともかくお断りします。まだ病院の薬のほうで、数段ましでしょうからね」

「じゃあ、行くんだな？」

シルファはなんとしても、病院へ連れて行きたいらしい。

「誰が行くと言いましたか」

と、このやり取りを聞いていたルーフェイアが、珍しくまた口をはさんだ。

「あの、先輩、もしかして、病院嫌い……なんですか？」

「病院が好きな方というのは、見たことはありませんが」

タシユアの答えに、少女がちよっと首をかしげて考え込む。

「あたし、嫌いじゃないですけど……」

「それは例外です」

「話が違おうだろう！」

延々と続く押し問答？に、とうとうシルファがしびれを切らした。

「ともかく、行くんだ!!」

「……分かりました」

ため息をつきつつ同意する。タシユアが絡むとシルファは頑固な

のだ。

それにここで逆らったところで、医者に診てもらうまで彼女が騒ぎつつけるのは間違いない。

どうせ行き着く先が同じなら、先に済ませてしまおう方がいいだろう。

「んじゃ俺、車呼んできましようか？」

「ああ、頼む」

シルファの答えを背に、妙に気の利くイマドがフロントのほうへと駆けていった。

Episode: 32

◇I mad

場所替えして行った先の近くの病院は、かなりデカイところだった。

つつか、呼んだ車の運ちゃんが、連れきてくれただけだったりする。

公立系の総合病院で、この辺じゃいちばん大きいクラスだ。建物も建築基準とやらがうるせえこのケンディクで、珍しくそれなりの高さのビルになってる。

もつとも外観は他の建物に合わせた作りだから、ちよつと見た目じゃ病院とは思わねえだろう。

円筒形の8階建て、あと両側に2階建ての小さいドーム——かたつぽが外来でもうかたつぽは事務所らしい——がくつついた、面白い構造だ。中も床が大理石だったり窓が大きく取ってあったり、かなり洒落てる。

ただ——めいっぱい混んでやがった。

おかげでもう、ごちゃごちゃした受付のなんとやらが終わってから診察まで待たされて、その後採血とやらで待たされて、挙句に説明聞くのにまた待たされて、だ。

——にしても、なんでデカイところ選ぶんだろな？

総合病院なんざ待たされるばっかで、俺はあんまり好きじゃない。だいいち風邪程度だったら普通の町医者で十分だし、ヤバきゃそこからちゃんとでかいところへ回してもらえる。

もつともここの話は俺は叔父さんが開業医だから知ってっけど、

普通はでかいところいいところって考えなんだろう。

とりあえず一通り終わって、今は病室まで移動したとこだ。

——ちよいうるせえけど。

このフロア、7階だから見晴らしは抜群だけど、向こうの病棟に小児科が入ってる。で、当然チビ連中がなんか騒いでた。

ただ意外にもタシユア先輩、チビどもの騒ぎを気にする様子はない。

「まったく、病院だと言うのに病人を待たせるとは、何を考えているんでしょうかね」

違うとこで毒舌が相変わらずだ。

にしてもこれで39度を超える熱があるってんだから、もう人間の範疇を超えてんじゃねえかって気がする。

とは言えその腕にはきっちり点滴つけられてるから、見かけだけは病人だ。

「んと、生理食塩水と消炎剤と……あと、なんだろう？」

実家のせいで妙に薬に強いルーフェイアは、点滴のボトル見ながら違うとこで悩んでるし。

「こんなものがなくとも、寝れば治るのですがね」

「だめだ！」

さっきからシルファ先輩は、この一点張りだ。

けどこの人がこう言うだけでタシユア先輩、きっちり大人しくしてる。

——すげえよな。

あの教官泣かせのタシユア先輩を御してるってんだから、神業に近い。

まあこの場合、タシユア先輩のほうがめいっぱい惚れてて、言うこと聞ってるだけかもしれないけど。

どっちにしたってこれが出るのは、世界広しと言えどもシルファ先輩ひとりだろう。

――タシユア先輩を強引に一泊入院させたのも、この先輩だし。

「だいいちお医者さんも言ってたじゃないか、たかが流感でも甘くみるなと」

先輩、よほど心配らしい。いろいろ理由まで並べてる。

けど一応悪性の流感らしいから、確かに用心したほうがいいだろう。甘く見てつと、大の男でも2・3日でくたばることがあるって、叔父さんから聞いたことがある。

「でも……もう流行、終わりましたよね……？」

ルーフェイアのやつが不思議そうに考え込んだ。

確かにこいつの言うとおり、いちばんひどかった時期はどうに過ぎてる。今年はあるかも知れどもこっちは休講やらクラス閉鎖で大騒ぎだったけど、もういいかげん下火でしばらく話も聞いてねえし。

「それは……タシユアだし……」

「どういう意味ですか」

こいつとシルファ先輩とのやりとりに、またタシユア先輩が突っ込んだ。

にしても、よくこれだけ突っ込むネタがあるっつーか、見つけるっつーか……。

――ってそれ以前に俺、なんだってこんな場所にいるんだか。

まあ、とことこルーフェイアのやつが、先輩たちにくつついてっ
ちまったんだけど。

Episode; 33

「どっかで食いモンでも、買ってくっかな」
なんとなく言う。

「また、食べるの……？」
聞いたルーフェイアのやつが、目を丸くしやがった。

「しょうがねえだろ、腹減るんだから」

「――私も行きますかね」

「タシユアっ!!」

起きてどうにか出てこうとした、タシユア先輩に声が飛んで、またベッドの中へ逆戻りだ。

「なんでそう、抜け出そうとするんだ!」

「ですから、最初から必要ないと言っていますか?」

「そんなワケないだろう!」

ずくっとこの調子だし。

「タシユアが抜け出さないなら、ちゃんと私が買ってくる」

「私がいつ、抜け出すと言いました」
けっこう聞いていると面白えかも。

「今、抜け出そうとしたじゃないか!」

「買いに行こうとしただけです」
ほとんど夫婦喧嘩だ。

そこヘルフェイアのヤツが、おそろおそろって調子で割って入った。

「あの、でしたら……あたしが、買いに行きますけど……」

「遠慮します」

間髪入れずにタシユア先輩が断る。

——気持ちは分かっけどな。

なにせルーフェイアときた日にゃ、ウソみてえな食べ物音痴だ。

「だから、抜け出さないなら私が行くと、言ってるじゃないか」

「分かりました、抜け出しませんよ。約束します」

結局腹が減った——この食欲でホントに熱あるのか？——のに勝てなかったらしくて、タシユア先輩が根負けした。

で、シルファ先輩の態度が一変する。

「そうか、そうしたら——何がいいんだ♪」

妙に嬉しそうだ。

タシユア先輩もおんなじことを思ったらしい。

「シルファ、何がそんなに嬉しいのです？」

「そ、そんなことは、ないぞ」

黒髪先輩が慌てて言い繕った。

——まあ、世話やくのが嬉しいんだろな。

世話やく機会に事欠かねえルーフェイアと違って、タシユア先輩じゃそゆことはゼロに近い。

「——やれやれ。

そうですね、そうしたら……食べるものを少々と、暇つぶしになるような本をお願いしますか？」

「分かった♪」

いそいそとバッグを持って出てこうつつーシルファ先輩、やっぱ嬉しそうだ。

それからふと、立ち止まった。

「ルーフエイア、一緒に来るか？」

「――？ あ、はい♪」

一瞬だけきよんとしてから、ルーフエイアのやつがにこにこ後ろにくっつく。

「ここにいると、またタシユアにいじめられるだろう？」

「え、そんなこと……」

「私がいつ、いじめましたか」

「いつも、泣かせるじゃないか」

どうもシルファ先輩、さっきからの騒ぎでついた勢いがまだ残ってるらしい。

Episode..34

「ともかく、行ってくる。」

——イマド、ちゃんとタシユアを見張っててくれないか？」

「そりゃ構いませんけど……」

なんかヘンな役が、俺に回ってくるし。

と、ちよこちよこルーフェイアのやつが、俺のどこまで戻ってきた。

「どした？」

「あのね……イマドも何か、いる？」

「へえ、気が利くじゃんか」

ヒヨコ一辺倒のこいつが、珍しく他の事に気がついたっぽい。

「そしたらそうだな、俺も食いモン頼むわ。あと、なんか飲みもの——フレッシュジュースがいいかな？」

「——うん♪」

お遣い頼まれたガキンちよよろしく、にこにここいつがうなずいた。

「じゃあ、イマド、頼むぞ。」

——ルーフェイア、行こう」

女性陣2人が、楽しそう？に病室を出てく。けどこっちはヤロー2人で残されてるから、たいして面白かない。

——ま、いいけど。

とりあえず俺は、自分のバッグを漁ることにした。叔父さんちから帰る途中でここまで来ちゃったから、当然中の荷物はそのままだ。

「えーと、お、無事だ無事♪」

目当てのものを引っ張り出す。

「先輩、食います？」

出したのは、道中の食料の残りだ。

なんせルーフェイアとシルファ先輩、本までお遣いに頼まれてる。だとすりゃ、ちょっとやそつとじゃ戻ってこねえだろう。

けど冗談ヌキで、それまで待ちきれねえし。

「おや、ありがたいですね」

こと食料になると、タシユア先輩も素直だ。

「残りで悪いんですけど、ちゃんと食えますから」

「では遠慮なく」

妙な光景になる。

とは言えバッグの中に入ってる食料の量なんぞ、たかが知れてる。挙句にヤロー2人じゃ、なくなるのにさして時間はかかなかった。——かといって一応腹がふくれたから、買出しに行くのは面倒だし。思いつきすることがない。

「……あいつ帰ってくるまで、寝っかな」

「どこです」

「いや、ここで」

大部屋がやだとかタシユア先輩がごねたせいで、ここは2人部屋——個室はいっぱいだったらしい——だ。
んでこの部屋、ベッドが1つ空いてる。

「入院したわけでもないでしょうに」

「バレなきゃそれまでですって」

それに病院の看護師は忙しいから、こんなぴんぴんした患者をそ

うそうは見に来ない。看護師やってる叔母さんの話じゃ、だいたい2時間おきくらいだったはずだ。

「えーと、1・5時間後にして……」

アラムを合わせる。

「まったく、何を考えているんです。

だいいちイマド、シルファに私の見張りを頼まれていたのではありませんか？」

「俺が先輩見張ったって、ムダだと思いますけど」

この先輩がマジで抜け出す気になったら、どうやったって出し抜かれるのがオチだ。

「んじやすいません、俺、寝ますんで」

さっさとベッドの上に上がりこむ。

それから、思い出した。

「先輩、看護師やってる叔母さんの話じゃ、勝手に点滴早くして終わらせようとかすると、ショック起こすらしいですよ？」

って言うか、そゆ患者、マジでいたらしい。

けど先輩からは、けっこう意外な答えが返ってきた。

「――私をなんだと思っていますか」

「あ、知ってました？」

こんな情報、どこで手に入れたんだか。

――まあ、こうやって釘刺しときゃ、点滴終わるまではどこにも行かねえだろうけど。

「んじやそゆことなんで、今度こそ寝ます」
ちゃっちゃと毛布をかぶる。

あとは幾つも数えないうちに、俺は眠りに落ちた。

Episode..35

◇Rufeir

「先輩、どこへ……行きますか？」

「そうだな……」

病院の外へ出たところで、あたしとシルファ先輩は悩んでしまった。

食料はまだその辺りの食料品のお店で買えるだろうけど……。

「タシユアの暇つぶしの本、か……」

「歴史の本が、いいんでしょうか……？」

「いや、タシユアは案外、なんでも読むぞ」

「そうなんですか？」

シルファ先輩が言うには、タシユア先輩は乱読家らしい。けどあたしは、歴史関係しか思いつかなかった。

不正アクセスとかの本じゃ呆れられそうだし、その他はあまり興味がないさそうだし……。

「どちらにしても、小さい本屋じゃ置いてないだろうな」

「たぶん……」

それどころか、さとう大きな本屋さんへ行ってもみつからなそうだ。

「実家へ帰れば、珍しいのがたくさんあるんですけど……」

「だが、取りに行くわけにいかないだろう？」

「はい……」

取りに行ったりしたら、往復で1週間くらいかかりかねない。

「ともかく、どこか大きな本屋へ行ってみないか？」

「はい」

その時また、あたしは不意に「何か」を感じた。

何かひどく殺気立っているのに、それを押し殺したような……。

「どうかしたのか？」

けど不審そうにシルファ先輩が尋ねた時には、もうその気配は消えていた。

「何か気配が、したと思ったんですけど……」

「――そうか」

言って先輩が考え込む。

「あとで学院に、報告したほうがいいかもしれないな」

「あ、いえ、そんな大したことじゃ……」

「だが、したんだろう？」

きっぱりと訊かれて、あたしはうなずいた。

「タシユア先輩が『気のせい』って言うから、そうだと思ってたんですけど……」

「まあ、タシユアは熱があったからな。」

「ともかく本屋へ行かないか？」

先輩がうなずく。

「あの、食べ物……？」

「それは後で、いいんだろう」

「あ、そうですね」

食料は後に回して、病院から少し離れた大型書店へ行くことにした。

それによく考えてみると、携行食でないものを長時間持つて歩く

のは、食中毒でも起こしそうで何か嫌だ。

「駅のほうの、本屋さんが……大きいですよね？」

「そうだな」

行き先も決まる。

そのまま10分ほど歩いて、あたしたちは目当ての本屋さんに入
った。

案内板を見て階段を上がり、歴史関係の本が置いてあるフロアま
で来る。

「先輩、どれに……します？」

「そう言われても、歴史は苦手で……」

シルファ先輩が言いながら、本のタイトルを見て考え込んだ。

「それにタシユアじゃ……全部読んでいそうだ」

「そうですね……」

タシユア先輩は時間がある時はたいてい図書館にいて、何か本を
読んでいる事が多い。

それにシルファ先輩の話じゃ、寮の自室も壁が一面全部本棚にな
っていて、本で埋め尽くされているって言う。

——うまく、見つかるのかな？

むしろ情報関係の雑誌の新刊のほうが、いいのかも……。

Episode..36

シルファ先輩がフロアの向こう側へ行く様子だったから、あたしは反対側へ回った。

たくさんある棚の中から、古代ローム時代を探す。
でもどれも、図書館にあったような……？

シエラ学院の図書館は、案外歴史関係の本は多い。レポートの課題に出たりして、資料で使う機会が多いからだ。

ただ古代ローム時代はもとの資料が少ないから、おのずが発刊されている本の数も少なかった。

もちろん新刊は時々出るけれど、突拍子もない解釈だったり何かの本をまとめただけだったりして、面白そうな本が出る事はあまりない。

——やっぱり、ファクトリーに頼もうかな？

なにしろうちは歴史だけはあるから、古い時代の資料も多い。だからデータだったら、すぐに送ってもらえるはずだ。

そんなことを考えながらうろうろしているうちに、あたしは一冊の本を見つけた。

タイトルは「神話における竜機の伝承」。

もう10年以上前、旧ワサル領の地方で荒れ果てた神殿？が発見されたことがあったのだけど、そこから貴重な古文書も一緒にみつかった。

この本はその古文書を、解説して編集したものの考察だ。

実は以前から発刊すると言う噂はあったけど、発売直前に延期とすることが度重なって、いつ出るのか分からずじまいになっていた。

「よいしょ……」

近くに置いてあった踏み台を引っ張ってきて、上に昇る。
けどあたしの身長じゃ、一番上の棚にあるこの本には、それでもまだ上手く届かなかった。

必死に手を伸ばす。

――届く、かな？

どうにか指先が、背表紙の下側のへりにかかった。

もう一段、背伸びをする。

少しづつ少しづつ引っ張り出して、本がどうにか半分くらい出てきた時。

「――！！」

急に踏み台が傾いて、バランスを崩す。

そのまま後ろへ落ちながら、とっさに受身の体勢を取って――。

「？」

床じゃなくて、何かの上に落ちた。

「えっと……？」

そして気が付く。

「す、すみませんっ！」

誰か男の人を、下敷きにしてしまっていた。

「あのっ、すみません、大丈夫ですか？！」

しかもよく見ると、学院の先輩だった。確か上級傭兵じゃないけれど、シルファ先輩と同じ学年だったはずだ。

「あ、大丈夫。ほら、君、軽いし」

「……………」

なんか、ぐさりと来ることを言われた気がする。
けどこの先輩が身体をさすっているのを見て、心配になった。

「あの、本当に……？」

「ああ。」

それより……その、ケガはないかい？」

「あ、はい、あたしは大丈夫です」

受身を取っていたし、床に叩きつけられたわけじゃないから、打ち身すらない。

でもその先輩は気になるのか、あたしのことを上から下まですつと見ている。

「あの、あたし、何か……？」

なんとなく不安になって尋ねると、この先輩がかぶりを振った。

「いや、別に——」

何か悪いことを言ったらしい。

Episode: 37

「その、すみません……」

「いやいや。」

それよりその——ひとりかい？」

「え？」

今度は突拍子もないことを訊かれる。

「えっと、その、他の先輩と一緒に……」

「その先輩、どこに？」

答えに詰まった。

この本屋さんの中にいるのは間違いないけど、「どこか」は分からない。

「その、ここのお店のどこかに、いるはずなんですけど……」

「ふうん……」

奇妙なものを感じて、どうしようか迷う。

けど、先輩にあんまり失礼な事はできないし……。

内心困っていると、ちょうどいい具合にシルファ先輩が戻って来てくれた。

「ルーフェイア、何かいい本は——？」

言いかけて、シルファ先輩がこの男の先輩に気づく。

「何か、あったのか？」

「その、踏み台から落ちたんですけど、こちらの先輩に助けてもらって……」

「なんだって?!」

今度はシルファ先輩があたしの前に立って、上から下まで一通り

眺めた。

「あの、ほんとに平気なんです」
「なんだか恥ずかしくなって、慌てて言う。」

「そうか？ それならいいんだが」
それからシルファ先輩が、この男性の先輩に向き直った。

「——この子を助けてもらって、済まなかった」

「いや、俺も別にそういうわけじゃ……。」

「とりあえず用事もあるし、これで失礼するよ」

「どういうわけか、あたしたちが止める間もなくその先輩は立ち去ってしまふ。」

「なんだったんでしょ……？」

「私に訊かれても……」

「シルファ先輩と2人で首をかしげたけれど、理由は分からずじまいだ。」

「——あとでイマドに、訊いてみようかな？」

「こういうことは、彼はよく知っている。」

「それより本当に、大丈夫だったのか？」

「まだ心配みたいで、シルファ先輩が尋ねてきた。」

「あ、はい、大丈夫です。」

「その……落ちたときに、さっきの先輩の上に、あたし落ちて……」

「そうだったのか。運が良かったな」

「——そういう問題なんだろうか？」

「何かが微妙に違う気がするけど……。」

でも床に落ちていたらアザくらい作っただろうから、やっぱり運が良かったのかもしれない。

「それにしても……どうして落ちたんだ？」

「あの本、取ろうと思って……」

棚の上を指差す。

引き出しかけたさっきの本は、落ちたりしないでまだその場所だ。

「——これか？」

シルファ先輩は背が高いから、片足を踏み台の上に乗せたただけで手が届いた。

「なんだか、難しそうな本だな……」

「ずっと発売延期になってた、本なんです」

「そうなのか」

本を見ながら、なぜかシルファ先輩が感心する。

Episode..38

「先輩も、何か見つけたんですか？」

その手にやっぱり本があるのを見て、あたしは訊いてみた。

「ああ、これか？ 一応、新刊なんだが……」

先輩が本を見せてくれた。タイトルは「光と闇の氾濫」、著者がサラⅡアルテニーと書いてある。

内容は、何かファンタジー系の小説みたいだ。

「面白そうですね」

「そうか？ 実を言うと、私もそう思ったんだ」

結局、2人で自分の読みたい本を選んでしまったらしい。

「これで……タシユア先輩、大丈夫でしょうか……？」

せっかく買っていてっても先輩の好みじゃなかったら、申し訳ないけど、シルファ先輩が請け合ってくれた。

「タシユアは何でも読むんだ。だから、心配なくていい」

「じゃあ、大丈夫ですね」

2人で1冊づつレジへ運ぶ。

タシユア先輩の本だからと、シルファ先輩はあたしが持ってきた分まで、会計を済ませてくれた。

「あとは、食べ物……ですよね？」

「そうだな」

病院のほうへ戻りながら、また悩む。

「何に……しましょう？」

「そうだな……。」

途中のスタンドあたりで、買えばいいんじゃないか？」

「あ、いいですね♪」

ケンディクは観光都市のせいか、ちよつとした軽食を売るスタンドがけっこう多かった。簡単だしそこそ量もあって、学院の生徒には特に人気だ。

もちろん病院まで帰る途中にも、何軒もある。

「サンドイッチとかで、いいんでしょうか……？」

「なんでもいいんじゃないか？ 量は、要ると思うが」

確かにタシユア先輩もイマドも、とてもよく食べる。多分2人で4人前くらい要るだろう。

ともかく食べているのを見ると、どこへ入るのか不思議でしようがないほどだ。

と、シルファ先輩の表情が引き締まる。

「ルーフェイア、分かるか？」

「はい」

実を言えばあたしは、もう少し前から気がついていて。

誰かが、あたしたちを尾けている。

ただその気配にはたいして緊迫感がなかったから、放って置いたのだ。

「——なんだろうな？」

「さあ……？」

何をするわけでもなくて、ただついてくる。

けど、こういうことは初めてじゃなかった。ケンディクの町だけじゃなくて学院の中でも、時々誰かが後ろをついてくることがあるのだ。

——殺気があれば、考えるんだけど。

最初はスパイかなにかとも思ったけど、ついてくるのは大抵学院の先輩の誰かだ。それに聞いた話じゃ、シルファ先輩も時々そういうことがあるという。

だからもう、気にもしなくなってたけど……。

「先輩、いちおう確かめますか？」

「そうだな」

途中の十字路で、二手に分かれる。

気配は、シルファ先輩のほうへ向かった。あたしも気配を殺して逆戻りして、今度は後ろから追う形を取る。

ついてきていたのは、やっぱり男の人だった。

——あれ？

途中の曲がり角でちらっと見えた顔に、見覚えがある。やっぱり学院の先輩で……でも、シルファ先輩やタシユア先輩よりは年下だったはずだ。

だとすると、何か用なんだろうか？

思い切って近づいた。ただ気配は殺したままだ——というより、気配を隠すのが染み付いてしまっている——から、この先輩は気づかない。

Episode: 39

「あの――」

「うわっ！」

いきなり声をかけたのがまずかったのか、ひどくびっくりされた。

「す、すみません、おどかすつもりじゃ……」

「べ、べつに僕は何も……」

――この先輩、何を慌ててるんだろう？

何か困ることがあるとも、思えないけど……。

やりとりに気づいて、シルファ先輩も戻って来た。

「大丈夫か？」

「あ、はい」

「そうか。」

――何か、用なのか？

シルファ先輩が尋ねると、この男の先輩がすごい勢いで首を振る。

「なんでもない、なんでもないですっ！」

それから猛スピードで、駆け去ってしまった。

「――？　なんだ、あれは？」

「なんででしょう……？」

また2人で首をかしげたけど、やっぱり理由は分からずじまいだ。

「よく分からないが……ともかく、食べるものを買って帰らないか」

「そうですね」

あの先輩のことは、保留にする。

「そう言えば、ずっとルーフェイアが言ってた気配は……あれとは違うのか？」

「はい、違います」

きっぱりとあたしは答えた。あの気配はもっと殺気立っていて……ともかく、間違えようがない。

「そうか。」

——ああ、その店が、美味しいんだ」

「ほんとですか？」

シルファ先輩に連れられるまま、ちいさなスタンドの前まで来る。

「うわぁ♪」

確かに店の前には、美味しそうなサンドイッチの写真がたくさん貼られていた。

「どれにしよう……？」

ひたすら悩む。

あたし自身は、どれでもいいんだけど……。

しばらく悩んでいると、シルファ先輩が待ちくたびれたみたいで注文を始めた。

「すみません、これと、それと……」

タシユア先輩の分だけじゃなくて、イマドの分まで頼んでくれる。

「これだけあれば、足りるだろう？」

「あ、はい」

なにしろ先輩が頼んでくれたサンドイッチは、5人前くらいある。それを少し待って作ってもらって、持ち帰り用の箱に詰めてもらった。

「早く帰ろう。きつとタシユアもイマドも、お腹を空かせているぞ」

「はい」

急ぎ足で病院まで戻る。

「タシユアが、逃げ出してないといいんだが……」

「どうでしょう……?」

こればかりは、行ってみないと分からない。

ただタシユア先輩は「約束する」と言っていたから、待っているんじゃないかと思った。

「診療が終わってるのに……人が、多いな」

「お見舞いの人じゃないですか?」

シルファ先輩の言うとおり、確かに病院内は人が多い気がした。けどここは500床近い大きな病院だから、お見舞いの人だけでもかなりの人数になるんだろう。

先輩の病室にいちばん近い昇降台まで行って、ボタンを押した。病院はどこもそうだけれど、2台並んだ昇降台が2箇所にあるから、あまり待たない。

そのまま他のお見舞いらしい人たちと乗り合わせて、一番上の7階——8階は立ち入り禁止——で降りた時。

「——あっ!」

急に声をあげたあたしに、シルファ先輩が怪訝そうな顔をした。

「どうしたんだ?」

「その、あたし……飲み物、頼まれてたのに……」

「そういえば、そうだったな」

先輩も思い出す。

「あたし、今から行ってきます」

「だが、ここまで戻ってきて……」

「でも――」

イマドががっかりする顔を、見たくなかった。

「あの、やっぱり行ってきます！」

「そうか？」

そうしたらイマドには、私から言っておこう」

「すみません、ありがとうございます」

お礼だけ言って、あたしはもう一度下へ向かう昇降台へ乗り込んだ。

Episode..40

◇The Men

4人男性が、病棟への昇降台を待っていた。
誰も何も言わない。

ただ病院ではそういう見舞い客も多い——相手の病状が深刻だととても雑談できない——ので、誰も気にしなかった。

3人とも少々大きめの荷物を手にしているが、それもよくある話だ。特に身内が長い間入院すると、なにやら自宅から運び込むことは多い。

「他の連中は？」

「もう、別口で」

短い会話が交わされて、また3人は黙り込む。

じき昇降台が着いて扉が開き、男たちを吸い込んだ。

「あ、待って〜！」

扉が閉まろうとしたところへ声がかかり、男の1人がボタンを押す。

「すみません。」

——ほら、はやく〜！」

どうやら見舞いの一団だったらしく、最初に昇降台を止めた女性の他に、10人近い人がどやどやとやって来た。

「ちょっと、全部は乗れないよ？」

「しょうがない、私とこいつは後から行くよ」

中でも体格のいい2人が、昇降台に乗るのを諦める。

「じゃあ、先に行ってるね。」

――すみません、もういいですから」

女性に言われて、3人組の1人がまたボタンを押した。

扉が閉じ合わさり、昇降台の現在位置を示すランプの位置が次々と上へ移る。

そして入れ替わるように、もう1機の昇降台がこの場所へと着いた。

ひとりの少女が中から出てきて乗り遅れた2人に会釈し、翼があるかのように軽く外へと駆け出して行く。

「可愛い子だな」

「金髪に碧い瞳か。人形みたいに綺麗だったな」

そんなことを話しながら、この2人も昇降台へと乗り込んだ。

もしここで少女が――ルーフェイアがあと少し早くここへ着いて例の男たちと鉢合わせしていれば、事態はまったく違う方向へと行っただろう。

だが実際には男たちとルーフェイアが顔を合わせる事はなく、彼女は頼まれ物を買いに病院の外へと出て行った。

◇Tasha Side

なんととはなしにタシユアは、天井を眺めていた。

――することがない。

シルファに「約束する」と言った以上は抜け出すわけにもいかず、大人しくベッドの上で寝ているだけだ。

（まあ、今晚だけの辛抱ですし）

本音を言えばすぐにでも出て行きたいが、そんなことをすればシ

ルフアが大騒ぎするのは目に見えていた。

もっとも彼女の前で倒れた——そもそもこんなふうに倒れた事がない——のは初めてだから、心配で仕方がないのだろう。

隣のベッドではイマドが、それこそ気持ちよさそうに熟睡していた。

（何を考えているのやら）

呆れて言葉が出てこない。

だいたいがアラムまで合わせていると言うのだから、完全な故意犯だ。

（看護師でも来れば、面白いのですがね）

叩き起こされて慌てふためく顔を見てみたいが、さすがに看護師を呼ぼうとまでは思わない。

だいいちうつかり何かをして、目をつけられては面倒だ。

ヴァサーナ産まれでわけありのタシユアは、調べられるとやっかいなことが多い。幸い先ほどの採血では誰も気づかなかったようだが、これ以上は願い下げだった。

それにしてもドクターも看護師も気づかないのだから、ある意味たいしたものだ。

（よくそれで、医療者と言えますこと）

暇なことも手伝って、タシユアの毒舌は途切れる事がない。

Episode..41

シルファとルーフェイアは、まだ戻る気配はなかった。

あの2人のことだ。きっと真剣に本を探しているのだろう。

（何を持ってくるやら）

ただ歴史に強いルーフェイアと、タシユアの好みを良く知っているシルファとの組み合わせだから、それなりに楽しみでもあった。

穏やかなシルファと、その後ろをヒヨコよろしくついて歩く、ルーフェイアとの姿が目につかぶ。

おそらくは2人して、学院の男子生徒あたりにつきまとわれているだろう。

——気づかないだろうが。

シルファもルーフェイアも、こういうことには相当に疎い。

（それにしても……）

キエーグ場で倒れたルーフェイアの「理由」を思い出して、タシユアは考え込んだ。

精霊というのは所詮、人に「取り憑く」存在でしかない。

だがルーフェイアのあの様子は——完全に逆だ。

普段から彼女が精霊を外さないことには気づいていたが、まさか外せないとは思いつかなかった。

確かに外せば身体機能が通常に戻るため、一時的に身体がついていかなかったり、感覚が混乱したりということはある。

とは言えそれは、あくまでも一時的なものだ。時間が経てば元

戻る。

その辺りから見ても、ルーフェイアの反応は異常としか言いようがなかった。

（あれではまるで……）

憑依させているのではなく、共生していると言っている。

――シュマーのグレイス。

代々傭兵をしているシュマー家に産まれる、少女。

産まれながらにして強大な魔力と戦闘力とを備えると言うが、それ以外にも間違いなく何かがある。

だがそれが何なのかは、さすがに見当もつかなかった。

シュマー家に関しては、タシユアは他の人間に比べればかなりの情報を持っている。1年程前に、偶然通信網上をウロウロしていたルーフェイア――どうも同室のロアに教わったらしい――を見つけて後を尾けているうち、シュマーの内部に辿りついたのだ。

その後侵入にも成功し、暇を見つけてはもぐりこんでいる。

――既に侵入者がタシユアだということは、ばれてはいるのだが。

ただそれでも何もないところをみると、どうやら分かった上で放置されているようだった。

それはそれで気に入らない。

だが、何か仕返しする気にもならなかった。こちらが何もしいない限り放っておいてくれるというなら、それを最大限に活用するだけだ。

ともかくそんな経緯で、タシユアはシュマーに関する知識は人並み以上だった。

だが意外にも内部ネットでさえ、グレイスやシュマー家自体に関する情報は少ないのが実情だ。

新しい兵器やシステム方式、医療技術等々、軍関係者や科学者が見たら垂涎もののデータは、それこそ山のように転がっている。

それなのに肝心要の「そもそもシュマーとは何で、何をしているのか」と言った情報は、ほとんどなかった。

シュマー内部の者なら誰でも知っているせいなのか、過去からの年表らしきものと付随データ以外は、「いつか戻りしハインを倒すため」との記述が時折見られる程度だ。

更に「グレイスとは何か」となると、情報はほぼ皆無となる。

それこそ「産まれながらにして強大な魔力と戦闘力を備える」

ことと「何か特殊な精霊を念話している」こと、それに「ハインを倒すことができる」との話が知られているだけだ。

つまりはシュマーの人間でさえ、部外者とはいえ傍にいたためにそれなりにグレイス——ようはルーフェイア——について知ってしまっているタシユアと、同程度の知識しか持ち合わせていないようだった。

Episode..42

(結局、誰も知らないと言うことですか)

これも異常と言えば異常だが、事実は覆しようがない。

少し頭の中で、整理してみる。

ルーフェイアが上級傭兵さえも上回るかという戦闘力と、桁外れの魔力を備えているのは、今更言うまでもなかった。

またその彼女が曰くつきの傭兵の家系・シュマー家の次期総領で「グレイス」と呼ばれることも、それ故に戦場で育ったということも、タシユアは知っている。

(ですが……)

それにしても精神的に幼すぎ、また脆すぎるというのが腑に落ちなかった。

あれだけの戦闘力を持ち戦場で人を屠って育った人間が、あれほどに繊細と言うのは――やはり異様としか思えない。

更にそこへ、精霊とのあの異常な関係だ。

「幼い頃から憑依させているから」という理由は、実は成り立っていない。かつてのタシユアの弟妹はみな3歳そこらから同じようにしていたが、あんなふうになった者はいなかった。

「つまりは――グレイスですか」

その言葉が口をつく。

だが結局、それ以上の結論は出なかった。何より情報が少なすぎる。

――ひとつだけ、思い当たることはあるのだが。

この間の夏、海岸での海竜騒ぎの際、ルーフェイアは自分の力について言及している。

自分の中に強大な力を持った「何か」が居り、制御することも捨て去ることも出来ない。

「何か」とは恐らく、グレイスが持つ特殊な精霊なのだろう。そしてルーフェイアは3歳以前からそれと共生を始め、そのまま今に至っているのは確かだ。

——これで精霊を失くしたら、どうなるのか。

憑依させていようがいまいが関係なく存在できる精霊に対し、ルーフェイアはさっきの通り動くことさえ出来なくなる。

つまりは精霊の力を、自身の生命力としても使っているのだろう。これでは、いったいどちらが主なのか……。

謎は深まるばかりだ。

（まあ、今考えても仕方ありませんか）

もう少し情報を揃えなければ、何も分からないだろう。

ふと見ると、点滴の残りがだいぶ少なくなっていた。イマドが寝た後に少しだけ落ち方を早くしておいたのだが、それにしても思いのほか長い間考え込んでいたらしい。

「しかし、暇ですね」

ばたばたと走り回る性格ではないが、じっとしたまま何もしないというのは少々苦痛だ。

ましてや寝る以外にすることもないのだから、尚更だった。

（早く戻ってきませんか？）

なによりも食料が欲しい。

と、気配を捉えた。

シルファだ。

（——おや？）

どうやら食料にありつけそうだと一息ついて、タシユアは気づいた。

気配はひとつだけで、ルーフェイアのものがない。あのヒヨコの少女がどうしたものか、別行動を取ったようだった。

「すまない、遅くなった」

「お帰りなさい」

直後に病室へと姿を現したシルファの後ろには、やはりあの金髪の姿はない。

「シルファ、ルーフェイアはどうしました？」

「それが、イマドに頼まれた飲み物を買ったと——」
「なるほど」

もっともそういう理由でもなければ、ヒヨコを止めたりはしないだろう。

——頼んだ当人は、あの有様だが。

Episode..43

シルファも部屋の様子に気づいたらしく、尋ねてきた。

「ところで、イマドは――？」

「そのベッドで寝ていますよ」

タシユアにつられて視線をやって、見たものにシルファが唾然とする。

「こんなところで……」

「私も呆れました」

どう考えても、こういう行動に出る人間はごく少数派だろう。

「それにしたって……あ、起きていたのか」

「いや、メシの気配がしたんで」

「なんですか、それは」

目を開けて身を起こした後輩に、思わず突っ込む。

「そう言われても、したんですって。

――先輩、あいつ、どこまで行きましたかね？」

後ろ半分は、シルファに向けての言葉だ。

「よく分からないが……たぶん、外まで行ったと思う」

「律儀なヤツだな。なきやないで良かったのに」

主題がないまま、唐突に2人の間で話が進行する。とはいえ内容が内容のため、タシユアにも何の話かはすぐ分かった。

「おや、イマドともあろう方が、ルーフェイアの性格を分かっているのですか」

「また先輩、そうやって後輩をいじめるんですから」

「事実を指摘しただけで、いじめてなどいませんがね」
やけにテンポのいいやりとりに、シルファが苦笑しながら包みを差し出した。

「とりあえず2人とも、食べないか？」

こう言えば一時中断するのを、よく知っている。

「あ、ども♪」

「では、遠慮なく」

だが手を伸ばしかけて――タシユアは食べるのをやめた。

「まったく、よりによって、ですか」

「マジ、何考えてんですかね。」

――あれ、先輩食わないんですか？」

イマドのほうはもう、話に乗りながらすっかりひとつ口に運んでいる。

「この状況で満腹にしたりすれば、いざと言うときに動けませんからね」

「けど、ひとつくらい」

今度も唐突に進行した話に、シルファは付いてこれなかったらしい。

「その、何の話を……してるんだ？」

「すぐに分かります。」

それよりシルファ、ちゃんと武器は手元にありますか？」

「え?!」

同時に、病棟内に悲鳴が響き渡った。

Episode..44

◇Rufair

あたし、なにやってるんだろ……。

イマドに頼まれたものを忘れてしまうなんて、自分で自分が情けなくなる。

ともかくシルファ先輩と別れたあと、急いで下へ行く昇降台に乗って、病院を出た。

それから考え込む。

——どこへ、行こう。

イマドやシルファ先輩みたいに、おいしいお店に心当たりがない。しばらく考えて、結局サンドイッチを買ったスタンドに行くことにした。

病院からスタンドまでは、歩いて5分もない。

「あの……」

「ありゃ、さっきのお嬢ちゃんじゃないか」

お店の人は、あたしを覚えていてくれた。もっともついさっきだし、いちどに5人前も買ったから、覚えてて当然だろう。

「お姉さんはどうしたんだい？」

「えっと、先輩はもう、戻ったんですけど……あたし、飲み物買い忘れて……」

「あれ、お姉さんじゃなかったのか」

どうもこのお兄さん、あたしとシルファ先輩を姉妹と勘違いしていたらしい。

――似てないのに。

落ち着いている先輩と違って、あたしの髪はどうしても目立つ。
あんなふうだったら、いいのに……。

「それで、何がいいのかな？」

「え？ あ、えっと……」

また考え込む。

イマドは「フレッシュジュース」って言ってたけど、どれがいいのか分からなかった。

「あの、すみません、どれがいいんでしょう……？」

「ありゃりゃ、そりゃ困ったな」

「ご、ごめんなさい！」

泣きたくなる。

どうしてあたし、いつもこう……。

けど自分が情けなくてうつむいていたら、このお兄さんが助け舟を出してくれた。

「ほ、ほら、そんな顔しないで。

――えーと、このお勧めなんかどうだい？」

並んでいる写影のひとつを、指差してくれる。

「あの、これ……なんですか？」

色はちよつと濃い目のオレンジだけど、普通のオレンジジュースじゃなさそうだった。

「味見してみるかい？」

「すみません」

コップにほんの少しだけ、飲ませてもらう。

「あ、これ……」
味に覚えがあった。以前南方の戦地にいたときに、食べたことがある。

ただ、名前までは知らなかった。

「美味しいだろ？」

「はい。」

そうしたら——これ、いただけますか？」

「もちろん」

にこにこしながら、お兄さんが濃いオレンジ色の、ちょっと細長くて丸い果物を手にして——あたしに顔を向けた。

「つて、ひとり分でいいのかい？」

「え、えっと……」

また悩む。

イマドからは頼まれたから間違いないけど、先輩たちは……？
買っていつでも買っていなくても何か言われそうで、どうしていいか分からなかった。

「そんなに悩まなくていい。」

「そうだな、全部で何人いるんだい？」

「4人です」

これは間違いない。

「お嬢ちゃんも入れて、だね？」

「はい」

答えを聞いて、このお兄さんがうなずいた。

「だったら、4つ持ってきていいさ。足りないよりは、余るほうが

世話がないからね」

「あ……♪」

納得する。

「じゃあ、すみません、4人分……」

「ほいきた。ちょっとだけ待っててくれるかい」

「はい」

手際よく、お兄さんがジュースを作り始めた。

「持って帰るんだろ？ 今ちゃんと、入れてあげるよ」

「すみません、ありがとうございます」

ふたのついた紙コップを4つ、倒れないようにして袋に入れてくれる。

それを受け取ってお金を払って、あたしは病院のほうへと歩き出した。

ただ行きと違って荷物があるから、ゆっくりだ。

Episode..45

——イマド、嫌だって言わないかな？

ちよっとだけ心配する。

だけどお店で飲ませてもらったのは、おいしかったし……。

でも最後の角を曲がって病院が目に入った瞬間、そんなことを考えていらなくなった。

門のあたりに、人だかりが出来ている。しかもその人たちの中には、パジャマ姿が混じっていた。

普通の人がそんな格好で、外を歩くわけではない。つまりはこの病院に入院していた、患者さんだ。

できるかぎり急いで病院へ戻る。

正門の辺りはもう、たくさんの人でごったがえしていた。その他にも続々と、中から患者さんが——中には車椅子や移動寝台で——外へ出てくる。

「あの、何が……あったんですか？」

ちよっと近くを通りかかった看護師さんに、あたしは尋ねた。

「よく分からないけど、避難指示が出たのよ。」

——あ、ごめんね。呼ばれてるから」

よほど状況が切羽詰まっているのだろう、その看護師さんはたちまち向こうへ行ってしまう。

ともかくこの病院内で何かあったのは、間違いなかった。

——それも、相当のことが。

運び出される患者さんには、一目見て重症と分かる人の姿がある。

でもそれこそ火事か何かでなければ、そんな患者さんを運び出そうとはしないはずだ。

あたしは病院全体が見渡せる場所へ移動した。

周囲は報道関係らしき人たちが詰めかけていたり、何台もの警察車両が止まっていたりして、かなり緊迫した雰囲気だ。

けど、煙が出ている気配は——ない。

しかも考えているうちに、警察が入り口に非常線を張って、一般の人が入らないように規制を始めた。

心配になる。

イマドと先輩たち、無事だろうか……？

少し考えて、今度は病院の職員じゃなくて女性の患者さんに訊いてみることにした。

「あの……」

「あれ、あんた迷子かい？　どこの病棟にいたの？」

——ちよつと、看護師さん看護師さん、この子ちゃんと見てあげておくれよ」

「え、あの、いえ、あたし、そうじゃなくて……」

入院していたのと勘違いされて、慌てて訂正する。

「おや、なんだい。やだね、勘違いしちゃったよ。

それじゃ、お見舞いにでも来たのかい？　けど、この有様だからねえ……」

「あの、それなんですけど、いったい何が……？」

火事でもないのにこの騒ぎだから、見当もつかなかった。

「それがさ、あたしもよく分かんないんだよ。

なにしろ急に看護師さんに、『病院が危険だから避難』って言われてね、ともかく荷物だけ持って……」

「ありゃ、俺は爆破予告って聞いたぞ？」

「僕は発砲事件って聞きましたけど……？？」

噂が飛び交う。

でも全館避難の指示が出ているところを見ると、爆破予告がいちばんありそうだった。

——信じられないけど。

なにしろこのケンディクは、独立の時でさえ激しい戦闘がなかったほど平和な国だ。

海の方こうのロデスティオ大陸は、紛争やテロ事件が絶えないけど、この国でそんな話は——。

そして、気づいた。

「まさか、テロ……？！」

Episode..46

どうやっても信じられないけど、ことこういう事では「信じられないこと」がいちばんよくある。

あたしは病院の建物を見上げた。

もし本当にテロなら、どこかの病棟かフロアが占拠されて閉鎖されたはずだ。

けど現場によくある話で、情報が手に入らない。かといって、ここを離れる気にはならなかった。

何か——嫌な予感がする。

仕方なく目立たないようにしてその辺りに立っていると、しばらくしてどこかの通信社が、取材を始めた。

『えー、現場です。』

ここ、ケンディク西総合病院が、テロリストに占拠されたとの第一報があつてから、20分弱が過ぎました。

現在こちらでは——』

——やっぱり。

どうしてこのケンディクで、こんな話になったのかは分からないけど、嫌な予感は当たっていた。

もう一度建物を見上げる。

——イマドと先輩たち、どうしただろう？

みんな学院生だし、もう外へ出て来てると思うけど……。報道はまだ続いていた。

『犯人グループは、占拠したフロア以外から全員退去するよう命令しており、従わない場合は病院を爆破すると宣言しています。』

そのため現在こちらでは、閉鎖された7階以外のフロアからの避難が続いて――』

「なっ、7階?!」

血の気が引くのがわかった。7階は――みんながいた場所だ。

もう何も考える間もなく、病院の入り口へと向かう。

「こらっ、キミ、入っちゃダメだっ!」

入ろうとしたあたしを、警官が止めた。

「でも、中に、友だちが――!!」

「気持ち分かるが、ダメだ。ここは私たちに任せて、向こうへ行きなさい」

「けどっ!」

どうにも埒があかない。

気が焦る。

中には、イマドが――!

◇ Sylpha

ルーフェイアと別れて病室へ戻ると、ちゃんとタシユアの姿があった。

「すまない、遅くなった」

「お帰りなさい。」

――シルファ、ルーフェイアはどうしました?」

目ざとく気づいて、尋ねてくる。

「それが、イマドに頼まれた飲み物を、買い忘れたと――」

「なるほど」

だがそれで納得したのだろう。それ以上は訊いてこなかった。

それから、気づく。

当のイマドの姿が見えなかった。

「ところで、イマドは――？」

あの後輩が、ルーフェイアを置いてどこかへ行くとは考え難い。
しかし、タシユアの答えは想像以上だった。

「そのベッドで寝ていますよ」

驚いて見ると確かに彼の言うとおり、イマドは気持ちよさそうに
隣のベッドで寝ている。

「こんなところで……」

「私も呆れました」

さすがのタシユアも、完全に呆れ口調だ。

私も、こんな話は聞いたことがない。

Episode..47

「それにしたって……あ、起きていたのか」

不意にこの後輩が目を開けて、また驚く。

——悪いことを、言ったな。

が、イマドの答えも想像外のものだった。

「メシの気配がしたんで」

「なんですか、それは」

タシユアが間髪入れずに突っ込む。

「そう言われても、したんですって。

——先輩、あいつ、どこまで行きましたかね？」

後ろ半分は、私に向けての言葉だ。それが何故だ分かった。

「よく分からないが……たぶん、外まで行ったと思う」

「律儀なヤツだな。なきやないで良かったのに」

「おや、イマドともあろう方が、ルーフェイアの性格を分かっているのですか」

感心するほど見事に、またタシユアが突っ込む隙を見つける。

——もっともルーフェイアと違って、イマドは突っ込まれてもけろりとしているのだが。

「また先輩、そうやって後輩をいじめるんですから」

「事実を指摘しただけで、いじめてなどいませんがね」

妙にテンポよく続く応酬に、ついおかしくなりながら、私は持ってきたものを差し出した。

「とりあえず2人とも、食べないか？」

タシユアとイマドの場合、こういえばまず中断して手が出る。

「あ、ども♪」

「では、遠慮なく」

言って手を伸ばしかけて、不意にタシユアは止めた。

「まったく、よりによって、ですか」

「マジ、何考えてんですかね。」

——あれ、先輩食わないんですか？」

突然タシユアとイマド——彼はもう一つ口に運んでいる——とが、何かの話を始める。

「この状況で満腹にしたりすれば、いざと言うときに動けませんからね」

「けど、ひとつくらい」

2人は分かって話をしているが、私には何のことかさっぱり分らなかった。

「その、何の話を……してるんだ？」

「すぐに分かります。」

それよりシルファ、ちゃんと武器は手元にありますか？」

「え？」

同時に病棟内に悲鳴が響く。

続いて、発砲音。

「なっ……!!」

慌てて悲鳴のしたほうへ駆け出そうとした私を、だがタシユアは止めた。

「待ちなさい、シルファ。今下手に出て行ったら、状況を悪くしか

ねません」

「だがっ！」

「待っんです」

再度、タシユアが引き止める。

「状況をよく見てごらんなさい。

確かに発砲はありましたが、怪我人が出た様子はありません。ですからこれは威嚇です。

ここがどこかわきまえないような頭の悪い連中ですが、刺激しなければ今のところ、これ以上の騒ぎを起こす気はないのでしょう」

「……わかった」

タシユアの言うことが正しい。

納得はしきれないものの、私は彼のベッドの端に腰掛けた。

Episode..48

「それで……どうするんだ？ それより、何が起こったんだ？」

「テログループによる占拠、というのが、いちばん可能性が高いでしょうね。」

銀行ならともかく、病院のしかもこんな高い階で強盗と言うのは、現実的ではありませんし」

「この国でか?!」

ユリアスはともかく平和な国だ。中でもケンディクは、気候も温暖だし、犯罪率も低い。だから観光客も、よほどの場所であれば安心して出歩ける。

その街で、テロなど……。

「世の中絶対ということはありませんからね、どんなことでも起こり得ますよ。」

現に、起こっているわけですし」

「それは、そうだが……でも、何故だ？」

「今の段階では、なんとも言えませんね。犯人グループが何を意図しているのかさえ、分からないわけですから」

それからタシユアが、ナースコールに手をかけた。

「だ、大丈夫なのか？」

「大丈夫なはずです」

彼が即答する。

「ここは病棟です。ナースコールが鳴るのは当然ですし、鳴ったくらいで人質を殺したりはしないでしょう。」

それにこうして最初に前例を作ってしまうば、看護師が病室へ行

くのを妨げることも、犯人連中はできなくなるでしょうね」
「あ……」

この事態だと言うのに、本当にタシユアは冷静だ。
ボタンが押されて、ナースコールの音が響く。
しばらくの間があって、応答があった。

「その……なんでしょう……」
後ろから脅されでもしているのか、答えた看護師の声が少し震えている。

「点滴がもう、終わるのですが」
「あ、はい、わかりました」

どうなるかと気をもんだが、タシユアの言うとおり、じきに看護師が足音と共に病室へと来た。

「ごめんなさいね、遅くなっちゃって」
声からすると、先ほど応答した看護師とは違うようだ。
「いえ。」
それより、何かあったようですが」

彼の問いかけに看護師は答ず、ただ黙って処置をする手を動かすだけだった。

その顔に、何か迷いのようなものが見える。
そんな看護師をを吟味するかのように、タシユアはしばらく見ていたが、一言尋ねた。

「病棟が占拠されたようですね」
一瞬だけ看護師の手が止まったが、答えはない。
——もっとも、それで十分だったが。

タシユアの予想は、間違いなかったというわけだ。
針を抜き終わって片付け始めた看護師に、もう一度タシユアは声をかけた。

「状況を説明していただけてませんか？」

「……………」

やはり看護師は何も言わない。

ただ今度はさっきと違い、少し迷っているように見えた。
それから少しあって、口を開く。

「まあ……なんだかおおむね分かっちゃってるみたいだし、この病室は他に患者さんいないし。

でも一応、婦長に許可だけ取ってくるわ」

「わかりました」

看護師が外した点滴の一式を持って、いったん病室を出て行く。

Episode..49

「大丈夫、なんだろうか……?」

遠ざかる足音を聞きながら、私は何か心配だった。もし犯人たちが口止めしていたら、絶対に説明はしてもらえないはずだ。

だが、タシユアは指摘した。

「大丈夫でしょう。婦長に許可を取るとは言っていましたが、彼女はこの病棟の主任ですから。」

それに看護師が病室で何をするかまで、彼らもチェックはしきれないでしょうからね」

「あ、そうか……」

どこまでも見透かしたかのような冷静さに、舌を巻く。

そして、気が付いた。

「どうして、彼女が……この病棟の主任だと、分かったんだ?」

「名札にそう、書いてありましたが」

「そ、そうだったか?!」

どこを見ていたのかと、自分が少々情けなくなる。

「ええ。」

シルファも緊張するのは分かりますが、イマドの図太さを少々見習った方がいいかもしれませんね。

——いい加減にしてはどうです」

最後の一言は、私ではなくイマドへ向けてだ。

「だいじょぶです。ちゃんと先輩の分、残ってますから」

タシユアの突っ込みに、けろりとイマドが答えた。どうも私たちがいろいろやっている間に、しっかりサンドイッチを食べていたら

しい。

「まったく、少しは状況をわきまえなさい」

「ですけど、腹減って」

言いながらこの後輩は、またひとくち口に運んだ。

——確かに図太い。

学院生と言うことを差し引いても、この状況で食事が出来る人間は少ないはずだ。

というより、ひとりでさっさと食べていたり、さっきのように病院のベッドで寝ていたりということ自体が、かなり珍しいだろう。見かけからは、そんなことをするようには見えないのだが……。そうこうしているうちに、手に別の点滴を持って先ほどの看護師が戻ってきた。

「またですか」

よほど点滴に嫌気が差しているのか、タシユアは半分拒否状態だ。「してあげてもいいんだけどね、これは残念ながらダメーよ」

手ぶらで病室へ行けば怪しまれるからだ、この看護師は言った。

「で、婦長には了解取ったわ。何をどう知りたいの？」

「知りたい内容は、先ほども言いました」

タシユアは「事実を言ったまで」という顔をしているが、看護師のほうはこの答えに気を悪くしたらしい。

「ほんとに点滴する？」

「する必要もない点滴をしようなどと、医療者が言うこととは思えません」

「あなたねえ……」

険悪になりかけた雰囲気、慌てて私は間に入った。

「す、すまない。そういうつもりじゃないんだ」ともかく謝る。

「それでその、何が起こったか、教えてもらいたいんだが……」
「——お見舞いだと思ってた男たちがいきなり銃を出して、脅されたのよ」

どうにか機嫌を直してくれたこの看護師が、少し声をひそめて言った。

「人数はどのくらいです？」

さっきのことなどお構いなしに、タシユアが簡潔に訊く。

そんな彼を、一瞬だけじろりと見てから——それでこたえるようなタシユアではないが——主任看護師は答えた。

「うちのナースステーションへ4人、向こうの病棟に4人以上。

それと向こうとこっちの昇降台の前に1人ずつ、あと廊下にも何人かいるらしいわ」

「最低でも十数人と言うわけか……」

思ったより多い。逆に言えば、それだけ向こうもプロ？ということだ。

Episode..50

「武装は——いえ、外部への連絡手段はどうなっていますか」

さすがに兵装を訊きだすのは無理と思ったのか、タシユアが質問を途中で変える。

「連絡手段？」

院内用の通話石はナースステーションにあるけど、見張られてるから使えないわ」

「魔視鏡はどうです？」

「最初に、止められちゃったわよ」

予想以上に相手に隙がない。

さすがのタシユアも、少し考え込むようなそぶりをみせる。

「——犯人側から、なにか要求はありましたか？」

「これといってないけど……向こうの病棟で、チビちゃんたちをデイルームに集めてるわね」

「デイルーム？」

耳なれない単語が出てきて、思わず聞き返す。

「ああ、ごめんなさいね。各病棟にあるロビーみたいな場所を、そう言うのよ」

「あれか……」

そう説明されれば、心当たりがあった。確かナースステーションから見渡せる窓際に、ソファや魔視鏡が置かれた、そんな場所があったはずだ。

「そこで、見張られているのですね？」

「今のところはね。」

ただ倉庫へ場所を移るって言って、向こうの病棟の看護師が、急いで中の物を運び出してゐるらしいわ」

タシユアの表情が僅かに動く。

「倉庫はどのような構造です？」

「構造って言われても……ナースステーションの隣にある小部屋を、倉庫代わりにしてゐるだけよ」

便利な場所だから、と主任は付け加えた。

「ナースステーションの隣と言うと、窓はありませんか……」

この建物は外から見ると円柱だが、実際にはドーナツ型になっている。

そして外側と、中の吹き抜けに面した窓のある部分が、病室や先ほどのデイルーム。内外の病室の間に中洲のように、ナースステーションや処置室が並ぶ配置だ。

当然中洲にあたる部分は、窓はない。

「その倉庫の出入り口は、幾つありますか？」

「2つあるけど、使えるのはひとつだけよ」

しまう物が多いために、ひとつは柵で塞いってしまったのだと言う。

「見張っている人数は、何人か分かりますか？」

立て続けにタシユアが質問する。

「チビちゃんたちの見張りは、さっき見たときは3人いたわね」

「3人……」

私たちは顔を見合わせた。

「タシユア、これはかなり……まずいんじゃないか？」

「悪知恵だけは一人前ということですか」

「けどマジ、その人数で中へ立てこもられたら、手も足も出ないですよ？」

ひょいと会話に加わってきた、イマドの言うとおりだ。

窓際のデイルームは壁もなく広々としているからどうにでもなるが、窓のない倉庫となると、扉を閉められたら終わりだ。例えば他のテロリストを倒したとしても、中で子供たちが犠牲になってしまう。しかも3人もで見張っていては、扉を破って全員倒す前に、誰かが銃を乱射するだろう。

Episode..51

「立てこもる前に何らかの手を打つ必要はありますね。できれば、中に火種を隠したいところですが」

「だが、どうやってだ？」

この場にルーフェイアがいれば、患者と偽って子供たちのところへ行かせられるだろうが、彼女はあいにく病院の外だ。

「そうですね、シルファが行ってはどうです？」

「ムチャを言うな」

年齢より幼い見かけのルーフェイアならともかく、私の体格では子供たちの中に紛れ込むなど、絶対にムリだ。

「誰も小児としてなどとは、言っていないよ。白衣を借りて着れば済みます」

「――！！」

冗談ではない。

見るとタシユアが、僅かに面白そうな表情を浮かべている。

「俺もそれ、賛成♪」

イマドまでが、喜んで話しに乗ってきた。

「絶対ダメだっ！」

思わず口調が強くなる。

先日のドレスでさえ恥ずかしくてたまらなかったのに、看護師の格好など想像するだけでも嫌だ。

「なんだ、ダメなんですか？」

「それは困りましたねえ」

だがそう言うタシユアの顔は、やはり面白がっている。

——どうしよう。

このままでは、本当に……。

「——ちょっと待ってもらえる？」

私が真剣に悩んでいるところを、だがちょうどいい具合に主任看護師が遮った。

「さっきから話を聞いてると、手を打つとかなんとか、いったい何をするつもりなの？」

その瞳が鋭い。

「言っとくけど、下手にこの部屋から出て何かしないでちょうだいね。」

連中、病室の外へ誰か出たら容赦しないって言ってるから」

私たちは顔を見合わせた。

「そういえばまだ、言っていないませんでしたね。私と彼女は、一応シエラ学院の上級傭兵です。」

それからそちらの彼も学院生——何をしているのです」

イマドのほうへ顔を向けたタシユアが、冷たいさえ通り越した——完全に呆れているのだろう——声で訊く。

見ればイマドが、またベッドへ上がりこもうとしているところだった。

「いや、ヒマだから寝ようかなって」

どうやら、また昼寝でもするつもりらしい。

「いい加減にしたらどうです」

「けど、今することないじゃないですか」

緊迫した状況下でのこのやりとりには、主任看護師もあきれ返ったようだ。

「あなたねえ、入院もしてないのに勝手にベッドを使わないでくれる？」

「んじゃ俺、今晚床で寝るんですか？」

「それは……」

どうやら言い合いは、イマドの勝ちらしい。

「と、ともかく、もう一回よく考えないか？　少しは状況も分かったわけだし……」

「それもそうね。」

——っていけない、あたしここに長居するわけに行かないわ。まだ病棟ごちゃついてるもの。

あとでまた来るわね」

部屋を出かけた看護士の背に、タシユアの言葉がかかる。

「でしたら今度来るまでに、犯人の人数と配置とを確認しておいて頂けますか」

「——患者らしくない患者ね。」

いいわ、分かった。できる範囲で調べとくわ」

それだけ言っていると本当に忙しいのだろう、主任が駆け足で行った。

Episode..52

「やれやれ、病人がいる場所だというのに何を走っているのやら」
「タシユア……」

点滴をしている間よほどヒマだったのか、毒舌が増しているようだ。

「それよりもかく、状況を整理したほうが……」

「整理するほど、話がありませんよ」

あっさりと切り返される。

仕方なく、自分の頭の中で整理を始めた。

今のところ分かっているのは、このフロアがどこかのテログループに占拠されて閉鎖されたこと、向こうの病棟の子供たちが人質にされて一ヶ所に集められていること……。

確かに、整理するほど多くはなかった。それに問題も、はっきりしている。

閉鎖されたのはこのフロア全部だが、犯人たちが『人質』として捉えているのは、小児病等の子供たちだけらしい。

逆に言えばその他の患者は、下手に病室から出ない限り、危害が加えられることはないだろう。

「つまりは、あの子たちをどうやって守るか——か」

「そうなりますね」

だが今のところ、この件については八方塞に近い。

「何かいい方法は……」

「ですから先ほど、言ったではありませんか」

「それはダメだっ！」

またさっきの話を蒸し返されそうになって、つい言葉が強くなる。
——絶対に願い下げだ。

スカートをはくだけで、勇気が要るというのに。

「えー、やっぱダメですか」

イマドが妙にがっかりしている。

「さっきから、言ってるだろう」

「——つまんねえの。寝よ」

結局この後輩が、ベッドへ上がりこんだ。

「イマド、少しは方法を……」

「けど、上級傭兵が2人もいるんですよ？ 俺の出る幕なんてありませんって」

「それは……」

こう言われてしまうと、返しようがない。
困っているとタシユアが口を開いた。

「私は病人ですからね、人数から外していただかないと」

「……タシユア……」

急に疲れてくる。

「まあいいや。俺、寝ますね。長期戦になりそうだし」
イマドが毛布をかぶった。

「まったく、傍若無人もここまでくると立派ですかね」
自分のことは棚に上げて、タシユアがまた毒舌を吐く。

「だが確かに……長期戦に、なりそうだな……」

犯人グループがすぐに行動を起こすとは思えないし、こちらも子供たちが人質にされている以上、手が出せない。

「なるでしょうね。」

——シルファも少し、休んでおいてはどうです？ 何かあるとすれば、夜中でしょうから」

「そうだな……」

ふと窓の外を見ると、もう夕暮れの光が残るだけになっていた。いくら日が伸びてきたとはいえ、まだ夏ではないから、夜が訪れるのは意外に早い。

長い、夜になりそうだった。

Episode: 53

◇Rufair

病院の中へは、どうやっても入れなかった。

——どうしよう。

ここへ戻ってから、だいたい1時間以上。辺りはもう薄暗くなってきた、焦りだけがつのる。

でもなにも出来なくて、あたしはその辺りをうろろするだけだった。

それにそろそろ、ここにいるのも限界だ。事の大きさを知った政府や警察関係者が続々と詰めかけていて、一般市民は締め出されそうな気配になっている。

そつとあたしは場所を移動した。警備が厳しくなってきた、真正面の玄関付近を避けて、報道陣でごった返している辺りへ紛れ込む。この場所が、いちばん情報に近い。

「えー、新しい情報が入りました。

この事件に関して、犯行声明があった模様です」

リポーターの言葉に、思わずそつちへ振り返った。

いったい、どこが……。

「犯人グループは『森の虎』と名乗っており、ロデステイオの収容所に入れられている仲間の即時開放と、そのメンバー及び自分たちの身の安全を要求しているようです。

この『森の虎』というグループはロデステイオ領ワサル地区に多い、同地区の独立を要求しているレジスタンスのなかでも、過激なグループのひとつで——」

報道のおかげで、おおよそのことが分かる。

ワサルは今でこそロデスティオ領だけど、ほんの15年ほど前までは、ちゃんとした独立国だった。それを軍事大国化の道をたどっていたロデスティオが、突然侵攻して併合してしまったのだ。

そういう経緯だから、今でもワサルの人たちはロデスティオを快くは思っていないくて、反政府活動が盛んだ。

当然テロも多くて、いつ行っても警戒が厳しかった。

——だからこそ、このユリアスなんだろうけど。

海向こうのワサルなんかと比べると、この国は格段に平和だ。

確か独立の時も大規模な戦闘はなかったし、今でも観光客が夜、町を歩けるほど治安がいい。

でもそれは逆に、危険に対しての警戒の薄さを産んでいた。そこが狙われたんだろう。

「そこ、下がりなさい!」

もう一段警備が厳しくなったのか、警察官が報道陣を下がらせ始めた。写影機やラや集声機を持った人たちが、しぶしぶ従う。

「お嬢ちゃん、君もお家へ帰りなさい。いいね?」

通りすがりの野次馬と間違われて——否定はできないけど——あたしも外へ出されそうになった。

「あの、あたし……」

「あれ? もしかして入院してたのかい?」

子供が好きな人だったのか、腰を落としてあたしに目線を合わせてくれる。

「いえ、その、友だちが……」

「そうか、お見舞いに来たのか。」

「だけど病院の中は今、すごく危ないんだ。だから今日は帰りなさい」

「でも……」

「帰りたくなかった。」

「確かにここにいて、どうなるわけじゃないけど——でも、出来ることがあるかもしれない。」

「気持ちは分かるけど、ダメだよ。」

「お家はどこだい？ 連絡してお母さんか誰か、呼んであげよう」
「暇なのか、並外れて子供が好きなのか、警察の人が一生懸命相手をしてくれる。」

「えっと、その、連絡って言われても……」

「この場合、学院でいいんだろうか？
困っていると、後ろから声がかかった。」

Episode..54

「グレイス様、どうなさいましたか？」

「え……？」

久しぶりの呼ばれ方に、驚く。あたしをミドルネームの「グレイス」で呼ぶのは、ごく限られた人たちだけだ。

「ドワルディ？」

振り向いた視線の先にいたのは、ケンディクに駐在してくれているロシュマーの筆頭、ドワルディだった。

彼は昔から、総領家の執事のようなことを務めてくれている。

「あ、親御さんですか？　でしたらこの子を――」

「ご迷惑をおかけしたようで申し訳ございません。お嬢様も少々、取り乱していらっしゃるようで。」

――さ、こちらへ」

なんだかまったく違う説明で、ドワルディはあたしを警察の人から引き離した。

「けど、どうしてあたしが、ここにいて……？」

彼には今日ケンディクへ行くなどと、言っていない。だいいち知らせるのは、国外へ出るときや、何かシュマーの設備を使うときだけだ。

「放送の中に、お姿が映っていらっしやいましたので」

「え、あ、やだ……」

そんなつもりはなかったのに、しっかり映されてしまったらしい。

「どうしよう……」

「病院前の一般の方々と一緒に写っていらしただけですから、問題はないかと。」

ですが、何か別のことがおありのご様子ですね」

「うん……」

あたしは起こった事を、手短にドワルデイに話した。

「イマドと先輩たち、7階の病棟にいたから……」

「そういうことでしたか」

彼が納得する。

「それで……何が、どうなってるの？」

「早い話が、人質を取っての立て籠もり事件です」

あっさりとドワルデイが答えた。

「もうご存知かもしれませんが、犯人グループは『森の虎』と名乗る、ワサールのレジスタンスのひとつです。先ほど犯行声明も出ました」

「うん、ついさっき聞いたわ。」

後は何か……分かったこと、ある？」

シュマーの情報網は、学院や政府より早い。詳細がある程度でも、入っていないわけはなかった。

「既にユリアス政府は、ロデステイオ政府と秘密裏に交渉に入っただけです。」

ただ進展の程は、はかばかしくないようでして」

「そう……」

レジスタンスに対しては、常に厳しい態度を取ってきたロデステイオ政府だ。いくら国外で事件を起こされたからといって、そう簡単に折れるとも思えない。

だいいちテロに対しては、一度折れたら終わりだ。

最初は人質を救うための他愛ない譲歩でも、味をしめたテロ組織に次々を事件を起こされて、収拾がつかないほど規模がエスカレートしていく。

人質は全員救出、犯人は死刑——国によってはこれは終身刑——が、対テロの基本的なやり方だった。

「人質は……どのくらい？」

「公式発表では病棟の患者が合計で68名、看護師が31名。それにドクターが若干名です。」

あとは見舞い客が多数、といったところかと」

これにはあたしも呆然とした。

「それじゃ、100人以上じゃない！」

「さようでございます」

これほどの事件は恐らく、この国始まって以来のはずだ。

Episode: 55

「開放の交渉、どうなってるの？」

「こちらはまだ、始まってすらおりません。こういった交渉自体、この国にとっては初めての経験だからでしょう。」

「——だからこそ、犯人グループも狙ったのでしょうが」

「でも、だからって……！」

あの占拠されたフロアには、小児科もあった。だから当たり前だけど、具合の悪い子どもたちがたくさん入院している。

イマドや先輩たちも心配だけど、小さい子がどうなるかが、もっと心配だった。

「お気持ちの程は良く分かります。ですが今のところ、時間待ちかと」

「そう……だね……」

ドワルデイの言うことが正しい。

ただケンディク軍にはこういったテロを想定した特殊部隊はないから、シエラに要請がかかるのは間違いなさそうだった。

ふっと思いついて、訊ねてみる。

「ねえ、シエラへの派遣要請……出たの？」

「派遣要請でございますか？ 少々お待ちを——ええ、もうユリアス政府から内密に要請があり、学院側も派遣を決定したそうです」

「え、もう？」

これには驚く。

まだ事件が明るみに出てから、そう時間は経っていないはずだ。

それなのに、この時点で派遣が決まってるなんて……。

もちろんいろいろ準備なんかもあるから、今すぐ派遣とはならないだろう。けどかなり早い時点で、ここへ上級傭兵の先輩たちが来るのは間違いない。

——誰が、来るんだろう？

これほどの事件となると、あるいは総出かもしれない。

「それにしてもユリアス政府も学院も、案外対応が早いすな」
ドワルディが感心する。

もつともユリアス政府にしてみればシエラしか頼れないだろうし、学院もまさか国内の事件で、派遣をためらうことなんてできなかったんだろう。

ただ逆に言えば、もう政府は突入を覚悟したと言うことだ。

あとは、犯人たちがどう出るかだった。

かといって、そう簡単に人質を解放してくれるとは思えないし……。

考え出すときりがなかった。

確かに中には上級傭兵のタシユア先輩やシルファ先輩がいるから、出来る限りのことはしてくれるだろう。

でも、何もかも当てにするわけにはいかない。それに突入になった時、うまく同調できないかもしれないなかった。

こういう突入と言うのは意外だけど、ただ攻撃してもだめで、事前に綿密な計画を立ててそのとおり実行される。

けど中の先輩たちには、これを知る方法がない。魔視鏡も通話石も、たぶん押さえられてしまっているはずだ。

もちろんタシユア先輩が、ミスをするとは思えないけど……。けど連絡が取れれば、他にも中の様子を知って適切な作戦を立てることも出来る。

——使える装備、ないかな？

シュマーの手持ちのもので、いい方法がないかと考え込む。

「なにか、問題がございますか？」

「うん……中に連絡、できないかなって……」

そう答えると、ドワルディが一瞬だけ怪訝な表情になった。あたしが悩んでることが、意外だったみたいだ。

Episode: 56

「中にいらっしゃるお友達の皆さまに、でございますよね？」
彼が確認してくる。

「うん」
ほかに中に、知り合いはいない。

「でしたら、簡単に連絡できると思いますが」
「え？」

あっさりと言われて、意味がすぐには飲み込めなかった。

「だって、通話石も魔視鏡も……」
ドワルディが少し笑う。

「グレイス様には馴染みが少ないかと思いますが……念話を使う方法がございます。」

確か中にいらっしゃるお友達の一人が、それが可能だったと記憶しておりますが」

「あっ！」

確かにその方法があった。イマドだったらたぶん、手順さえ踏めば連絡が取れるだろう。

ただあたし自身は出来ないから、頭からすっかり抜け落ちていた。

念話を連絡に使うやり方は、シュマー家では古くから使われている。

戦場には混乱がつきものだから、信頼のある通信方法は少ない。
なにしろ今でも伝書鳥や、人が走る伝令がいちばんいいくらいだ。
だけど念話を使う方法なら、相手さえ分かっていたらまず通じる

し、距離も関係なくてタイムラグもなかった。

問題はこれを出来る人が限られることだけど、シュマーに関してはそれもない。始祖メーアがそういう人だったとかで、シュマーではかなりの率で、この能力をもった子供が産まれる。

今では確か……シュマーはほとんど、ロシュマーのほうでも半数は軽く超える人数が、レベルを別にすればこの能力を持っていたはずだ。

それから、気が付く。

「ドワルディ、イマドがそうだって……どうして知ってるの？」

「先日、カレアナ様より連絡がありました」

「――！！」

母さんは、そうやってなんでも……！

「ああ、いえ、グレイス様、そういうことではございません」

あたしの表情に気づいたのか、慌ててドワルディが言った。

「力を持つがゆえの苦労があるはずだから、その時には手助けするようにとの仰せでして」

「え……」

何も言えなくなる。

ドワルディがまた笑った。

「カレアナ様は、本当にお優しい方であらせられますよ」

「――うん」

傍若無人で好き勝手に、平気で周囲を振り回して――でも確かに母さんは実力十分の現総領で、シュマーの誰からも好かれてる。

「いずれにせよ、そういうわけでございますので。」

それよりも中と連絡を取る件ですが、専任の者をこちらへ来させ
ましようか？」

「……………」

訊かれてあたしはためらった。

確かに中と連絡は取りたい。イマドがどうしているか知りたい。

——でも。

彼はこのことを、なるべく知られないようにしていた。

なのに、あたしが外から強引に使ったりしたら……。

「イマド、嫌がるかも……しれない」

嫌われるのが怖かった。

けどそんなあたしへ、ドワルデイが言葉をかける。

Episode..57

「お気持ちは分かりますが——グレイス様、中ではたくさんの民間人や子供が、人質になっております。ここは彼らの生命を守るのが最優先かと。」

それに——」

そこで彼は、一度言葉を切った。

「出来ることをしなかったがために誰かが犠牲になるというのは、ことの後味の悪いものです。」

お友だちもそれは、望まないのではないのでしょうか」

「……………」

確かに一理ある。

あたしが連絡手段を持っていながら使わなくて、それで小さい子たちに何かあったら……イマドはもっと嫌な思いをするだろう。

「——わかった」

何があっても、あの子たちが死ぬよりいい。

「専任の人、呼んで……もらえる？」

「かしこまりました」

ドワルディが一礼する。

「ですがセーフハウスからここまで少々距離がありますので、10分程はご容赦ください」

「あ、うん、大丈夫よ」

距離から考えたら、むしろ短いくらいだ。

それにしても、状況はよくなかった。場所は建物の7階、人質は大多数が病院の入院患者さん。

これじゃたぶん、閃光弾も催涙弾も使えないだろう。

——何か、いい方法は？

あれこれと考え込む。

そしてどのくらい経ったんだろう、声がかかった。

「グレイス様、遅くなりまして申し訳ございません。私めを、お呼びのことでしたが……」

初めて見る女性だった。

年はたぶん、あたしより幾つか上なくらいだろう。ただシユマーの血を引く人間は、早く大人になる傾向があるから、この人ももう少し年上に見える。

長く波打つ髪は綺麗な黒、肌も浅黒くて、南方の血が濃いらしかった。

「えっと……」

名前も分からなくて、困ってドワルディの方を見る。

彼がうなずいて、話を引き取ってくれた。

「先ほど話した専任のひとり、ケイカです」

ケイカと呼ばれた女性が丁寧にあたしに頭を下げて、なんだかいたたまれなくなる。

「あの、そんなに……しないで」

「え？」

あたしを見下ろす彼女の顔に、驚きが浮かんだ。

「その、だから……あたし、その……」
上手く言えなくてまた困っていると、今度は彼女が慌てた表情になった。

「も、申し訳ございません、何かお気に——」

「あの、そうじゃなくて……」

どうにもならなくて困り果てる。

ドワルディがそれを見て、少し笑いながら間に入ってくれた。

「グレイス様は、そんなに恐縮せずとも良いと仰っているのですよ」
「こんな私どもに、そんなお言葉を——！」

説明を聞いた彼女の表情が、もう一度驚きへ変わって、それからまた深く頭を下げる。

Episode 58

「どうぞ、なんなりとお申し付けください。

このケイカ、命もグレイス様に捧げてお仕え申しております故」
「あの、それはいいから……」

だいいち、そこまでしてもらっても……。

そんなやりとりが可笑しかったのか、またドワルディが笑った。

「グレイス様がお優しい方だと、これで分かりましたか？」

「はい」

優しいかどうかはともかく、あたしはどうやら「怖い」と思われていたらしい。

——姉さんなら、分かるけど。

従姉のサリーア姉さんは、シュマーの男性陣さえ震え上がらせる
辣腕家だけど、あたしにはとても真似できない。

ああなら、いいのに……。

姉さんならあたしと違って、シュマー家総領としての實力は十分
だ。

「それでグレイス様、連絡をいつお取りになりますか？」
ため息をついているあたしへ、ドワルディがもとの話を持ちかけ
た。

「えっと……すぐ、できるの？」

彼の視線がちらりと、呼ばれた女性へ向く。

「問題ございません」

彼女がはつきりと答えた。

「そうしたら、やってみて……もらえる？」

「了解しました」

ケイカが目を閉じた。

時間だけが過ぎる。

「ダメ、なの……？」

「いえ、接続はできています。ただ応答が——今、ありました」
「ほんとに?!」

聞きたい。

無事なのかどうか、今どうしているのか——。

「ねえどうなの？ イマド、大丈夫なの？」

「今訊ねますので、少々お待ちいただけますか。」

——無事で、先輩方と一緒にの部屋にいらっしゃるとのことですが」

「そう、なんだ……」

ケイカの答えに、座り込みたくなるほどほっとした。

とりあえずはみんな無事で……。

彼女の視線が宙をさまよって、また何かをイマドに伝えているのが分かる。

その様子に、なぜかちくりと、胸が痛くなった。

あたしはイマドとこんなふうに話せない。

でも、彼女は——。

「グレイス様」

ケイカに呼ばれて、はっと我に返る。

「えっと、なに？」

どうしてあんな気持ちになったのか戸惑いながら、答えた。

「向こうから現状を教えて欲しいとのことですが、どうなさいますか？」

「全部……話してあげて」

いまさら隠しても仕方がないし、何より先輩たちも情報を知りたいだろう。

再びの沈黙。

頃合を見計らって、恐る恐る声をかける。

「あのね、中の細かい様子も……訊ける？」

「かしこまりました」

それほどは長くない無言の時間のあと、彼女があたしに視線を向けた。

「中は今のところ、平穏だそうです」

やり取りにかかる時間が短くなってきているのはたぶん、イマドが少しずつ慣れてきたんだろう。

ケイカは念話でのやり取りは専門だけど、イマドは周囲にそういう人がいなかったと言うから、あんまりやったことがないはずだ。けどそんなことを考えていられたのも、次の言葉を聞くまでだった。

Episode: 59

「ですが隣の病棟の子供たちが、人質にされて倉庫へ集められていると――」

「そんな!」

彼女の言葉を全部聞き終わる前に、あたしは悲鳴にも似た声をあげていた。

「小さい子と、犯人だけなの? 誰か看護師さんとかは、一緒にいないの?!」

また少し沈黙があってから、ケイカが答える。

「誰も他には、いないそうです」

「そんな……」

銃声を聞いたり武器を見せられただけで十分怖いだろうに、ひとりの大人もいないまま、その相手と一緒にだなんて――! もう、居ても立ってもいられなかった。

「あたし、行くわ!」

「どちらへでございますか?」

やけに冷静に、ドワルディが返す。

「だから、中へよ!」

「封鎖されておりますが」

「けど、入るくらいはどうかなるわ。すぐに着替えを持ってきて!」

それでもドワルディは、引き下がらなかった。

「グレイス様、お待ちください」

言って、あたしの前へ立ちはだかるように移動する。

「どうか落ち着かれますように。」

お友だちのこと等がご心配とは存じますが――いつものグレイス様でしたら、もう少し慎重に行動なさるか」と

「え……？」

――あたし、そんなに動転してた？

もう一度よく考えてみる。

対テロ作戦の時の鉄則は……？

「――ごめん。あたし、どうかしてみたい」

「私こそ、出すぎた真似を致しました。どうぞお許しを。」

それにお友だちが危険な目に遭われているのですから、気が逸るのも当然でございます」

「――ありがと」

慰めとは分かって、少し気が軽くなる。

「グレイス様、お取り込み中申し訳ないのですが……」

「あ、ごめん」

こんどはケイカに話しかけられて、あたしはそっちを向いた。

「えっと、何？」

「先方が慣れていないせいか、接続がそろそろ限界です。何か、今のうちに訊いておくことはございますか？」

彼女の言葉に、急いで頭の中をさらう。

けど、犯人の配置なんかはすぐ分かんないだろうし……。

「とりあえず、いいと思う。」

ただイマドが大丈夫なくらいで、次の連絡時間だけ決めてもらえ
ると、いいんだけど……」

「了解です」

言って彼女が珍しく目を閉じた。それだけ接続が難しいんだろう。これで、次で犯人の配置さえ訊ければ、かなり状況は――。

「あっ！」

大事なことに気が付いて、あたしは思わず声を出した。

びっくりしたみたいで、ケイカが目を開ける。

「グレイス様、どうなさいました？」

ドワルディも訊いてきたけど、そっちに答えてる時間はなかった。

「ごめんなさい、ケイカ。」

あのね、急いでイマドに、犯人の配置だけ確かめといてって――」

「今、そのまま伝えました」

さすがに専任でやっているだけあって、早い。

Episode..60

「あちらも了解したとのことですよ。

——今、接続が切れました。次回は1時間8分後になります」
半端なのは、きりのいい時間に合わせたせいだろう。

「わかった。ありがとう」

「いえ……」

でもなぜか、彼女の様子がおかしい。

「あの、ケイカー——？」

また、悪いこと言っちゃったんだろうか。

「ごめんなさい、あたし……」

「ぐ、グレイス様、悪いのは私です。どうかお顔を上げてください」

「え、でも……」

なんだか話が噛み合わない。

悩んでいると、またドワルディが間に入ってくれた。

「ケイカは感激しているですよ」

「え？」

あたし、感激されるほど凄いこと、しただろうか？

首をひねったけど、やっぱり分からなかった。

「まあ、お気になさらずに。

それよりもグレイス様、この後はどうなさいますか？」

訊ねられて、あたしはまた考え込んだ。

「えっと……派遣された先輩たちは、そのうち来るのよね？」

「さようでございます」

だとすれば今できることは、たぶんひとつだ。

「――先輩たちがここへ来るまで、あたし、待つことにする」

「了解しました。」

ではその間に、着替え等をお持ちでしょうか？」

「ありがと。」

それと……予備の精霊、持ってこられる？」

可能なら、イマドに届けるつもりだった。

タシユア先輩やシルファ先輩は自分の精霊を持っているだろうけど、イマドはそうじゃない。けどこういう現場では、精霊があるかないかでは、助かる率が大きく変わるのが普通だった。

「どのような精霊をお持ちでしょうか」

「えっと……」

起こりそうな状況を考えてみる。

ふつうなら威力が高い精霊を選ぶけど――今回は場所が病院だ。ヘタなものを使ったら、丸ごと巻き添えになる。

このあたりを思うと、破壊力に頼る場面は少なそうだ。だとすれば……。

「防御関係に強いのもって、ある？」

物理攻撃と、あとできれば魔法も防げるのが……」

「ございますよ」

「うそ……」

自分の家のことながら、改めて驚いてしまった。

――まさかこのケンディクにまで持ち込めるほど、数があるなんて。

意外だけどういう小回りが利く精霊は、種類が少ない。なのにそれを、こんな遠いケンディクまで持ってきているのだから、実家には間違いなく複数あるはずだ。

「シュマーって、そんなに凄かったんだ……」

「グレイス様がそれを仰られては、少々困りますが。」

いずれにせよ時間をいただけますか？　すぐにこちらへ持ってきてこさせますので」

「うん」

ドワルデイが目配せして、ケイカがうなづく。

僅かな時間彼女の瞳が何も映さなくなつて、今度はケンディクにいるロシュマーの誰かに連絡しているのだと分かった。

それからまた、あたしのほうへ視線が向く。

Episode 61

「申し訳ありません、グレイス様。揃えてここへお持ちするのに、15分ほどかかるそうです」

「大丈夫。時間、あるもの」

何しろ今は、待つしかない。

「恐れ入ります。

それとひとつ、新しい情報が入りました。人質の開放交渉が始まったそうです」

「ほんと?!」

これはいちばん気にかかる情報だ。

「どんな感じなの?」

「食料と引き換えに一部の開放を要求したものの、かなり難航しているようです」

「そう……」

あたしは病院を見上げた。

辺りはもう十分に黄昏れきっていて、建物は魔光器で照らし出されている。

——もどかしかった。

たったこれだけの距離しかないのに、何もできない。

「ほんとに、待つだけだね……」

「そのようですね」

何故だろう? ちゃんと相槌をうつてもらえて、少しだけほっとする。

ただ本当のことを言えば、上手く中と連絡が取れても傭兵隊の先輩たちが来ても、すぐには事態は動かないはずだ。

もちろん最後は突入だろうけど、それがいつ頃になるのか——なんの見当もつかない。

「もしよろしければ、一旦セーフハウスの方へ移動されてはいかがでしょうか。」

まだこの時期、夜は冷えます」

ドワルディがまた、あたしを気遣ってくれる。

でも、それを受け入れられなかった。

「ううん、ここでいい」

何も出来ないとわかっていても、ここにいたい。

「かしこまりました。では、誰かに上着でも持たせましょう」

「——ありがと」

少しだけ自分が微笑むのが分かった。この言葉のほうが、どんな服よりあったかい。

でも、現実は……。

その時、ドワルディの表情が少し変わった。

「どうしたの？」

「学院の傭兵隊が、到着したようですね」

「もう？」

けど辺りを見回しても、それらしい人影は見えない。

「どこに……？」

「病院の敷地内ではありません。少し離れた、大型店の駐車場を利用したようです」

報道や警察、それに野次馬でごった返すこの辺は、避けたんだろ

う。

「えっと、じゃあ……あっち？」

彼に確認しながら急いで移動すると、確かにいくつもの車両が、少し離れたお店の駐車場に停まっていた。

紺を基調にした、何台もの大型車両。緑を基調とする、本校のものじゃない。

本島から海を越えて車両を出すのは大変だから、ケンディク市内にある分校から、借りてるんだろう。

「思った以上に早かったですな」

「うん」

自分の声が、少しだけ声が弾んだ。

「――あたし、行ってくる」

傭兵隊の先輩たちに、いろいろ話さなきゃいけない。

「かしこまりました。この辺りで待機しておりますので、何かありましたら声をかけてください」

「……ありがと」

ドワルディにお礼を言って、あたしは歩き出した。

Episode..62

◇Loa

窓の外に見える景色は、もうぼっちり暗くなった。

——いくらなんでも、抜き打ちすぎだってば。

暗い窓に、声にださずにぼやいてみたり。

学院は成績さえまともなら、傭兵隊には11年生以上は簡単に入る。

けど、上級ってなると話は別。毎年2回くらいある実地試験に、合格しなきゃいけない。

しかもこの試験ってのが、けっこうクセモノだったりする。なんせ大掛かりな派遣を利用して、本番で試験兼ねるってシロモノで、対策も何も立てようがない。

加えて運もあって、自分に向いた任務とか割合簡単なのが当たって、難易度はがた落ちてこともある。

「ロア、どお？」

一緒に派遣されたエレニアが、訊ねてきた。

「どおって言われても、困るんだけど。けどレアカード取る時の方が、やっぱ楽かな？」

「それとこれとは違うでしょ……」

なんか呆れられてるかも。

そんなことを考えてるうちに、班長の先輩が前へ出てきた。

全員で立ちあがって、学院式の敬礼をする。

「状況及び任務の説明を始める。着席」

学院って傭兵学校だけど、この辺はなんとなく正規軍なんだよね。

「本件のクライアントは、ユリアス政府だ。傭兵隊派遣の要請があったのは、およそ1時間半前。国内であることと急を要する状況のため、異例の早さでの派遣が決まった」

——確かに普段は、なかなか派遣しないよね。

ちなみにエレニアが言うには、双方の言い値が折り合わないせいなんだとか。

まあ派遣業務は学院の稼ぎの目玉だから、気持ちは分かるんだけど。

ただちよつと、ふっかけ過ぎの気もするかな……？

「ユリアス政府からの依頼内容は、病院を占拠したテロリストたちを状況次第では速やかに排除し、中に人質として捕らえられている患者及び見舞い客の身柄を確保することだ。

建物の詳細等については、手元の資料を見てほしい」

みんながあらかじめ配られてた資料——この借りた部屋ってば大型魔視鏡、設置されてない——に視線を落とす。

「占拠されているのは、ケンディク西総合病院の7Fだ。犯人はワサールの『森の虎』を名乗るグループ、数名から十数名。病棟の構造については設計図の通り」

やたら簡潔な説明、続くし。

「人質の内訳は病院スタッフが40名程、患者が68名で、うち小児が14名だ。他見舞い客が未確認だが、20〜30名は——」

「……………」

こりゃ大規模だわ。

このケンディクじゃ占拠事件だって珍しいのに、この人数は史上初だろうな。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

エレニアが声をあげた。

「今、小児が人質って言いましたけど……」

「その通りだ。小児科で入院していた0歳から6歳の子供たちが14名、人質の中に含まれている」

この話にはさすがに、室内が静まり返る。

「――八つ裂きにしてやろうかな」

「ロア、説明中の私語はまずいわよ」

「あ」

けど、思いつきりホンネ。

幸い先輩たちもおんなじことを思ったみたいで、お咎めはナシだった。

Episode..63

「現在ユリアス政府から代表者が出て、犯人グループと交渉中との情報だが、難航しているようだ。」

また政府はシェラ学院に、犯人グループの要求を飲む気はないと言って来ている。

この点から、投降がない場合は突入と思って欲しい」

――ま、これは普通だね。

他所じゃどうか知らないけど、学院じゃ「テロリストは皆殺し」が常識だし。

なにしろ一瞬が人質の生死を分けるかも知れないって言うのに、悠長に情けかけてるヒマなんかあるわけがない。

だいいち死にたくなかったら、こんなことしなきゃいいだけだ。

「突入に関しては、院内の詳しい状況が分からないため、まだ細かい具体策は出ていない。だが交渉がしばらく続くと予想されるので、その間に指示があるはずだ。」

また7Fのため、包囲は困難だ。よって非常口及び階段からの突入が、採用される可能性が高い。

各自準備を怠らないように」

「了解」

みんなの声が綺麗に揃った。

それにしたって今回は、やたらいきなり。

なにせ上級傭兵候補生に集合がかかったのが夕方の話で、その場で「これから実地試験を行う」ってんだから。

ともかくここ数年で、これほどいきなり実地試験が決まったのは、

今回が初めてだ。

「エレニアの方が絶対良かったよ。何日か前から実地試験の噂、あったじゃない？」

「そうだけど、仕方ないわよ」

「確かに仕方ないんだけどさ」

やだとか言って参加しなきゃ、上級傭兵になれないんだよね。

「ともかく頑張ってね。私もどうせ任務に行くなら、ロアとのほうがいいもの。」

——あ、着いたみたいよ」

「あゝあ。それじゃ、気合い入れて行こうかな？」
でも、気合い入れる場がなかった。

「上級傭兵のみ情報収集に入る。候補生はこのまま、車内で待機しているように」

確かに作戦行動じゃ、待つのも仕事のうちだけど。

——だけど表にも出られないってのは、けっこうしんどいかも。

そうは言っても、ここで下手に命令違反したら合格どころじゃなくなる。
なにしろ去年の試験、あたしこれで落ちた。

もっともコトがコトだったから、後悔なんてさらさらしてないんだけど……。

「ロア、先に行くわね」

「いいなあ、エレニアは。けど気を付けてよ」

「大丈夫、これでもれっきとした上級傭兵だもの。」

じゃあ、あとで現場でね」

エレニアたちが出てく。

あとに残ったのは、候補生があたしも含めて6名。しかも他は全部男子だから、話相手にもなりやしない。

しばらくはそれでも大人しくしてたけど、こうなるとヒマでヒマでしようがなかった。

——なんか見えないかな？

退屈しのぎに、小さい窓から外を覗いてみる。

外はもうほとんど暗くなってたけど、どこも投光器で照らされてるおかげで、けっこう視界は効いた。

って、あれ……?!

こっちへ向かってくるあのコ、何をどう見たってルーフェイアだ。

Episode..64

船着場の守衛さんからタシユアたち——なんだってあんな根性ひん曲がったヤツに懐いたんだか——とケンディク行っただけは聞いたけど、まさか病院に用があったとは思えないし。

しかもなんか、真剣な表情。

慌てて前のほうに陣取ってる教官（今日は運転手だった）に話しかけた。

「なんだ、お前は。待機と言う命令が出てたはずだぞ」

「そうなんですけど、なんかルーフェイアがこっち来るんですよ」

「ルーフェイア……？」

教官が怪訝そうな顔になる。

でもねえ、あのコ思い出せないなんて。

「ほらあの、8年生の主席で金髪碧眼の美少女！」

「ああ、あの子か」

今度は通じた。

「なんだかあの子ここにいますけど、話があるらしくて。」

寮の部屋がいっしょであの子よく知ってますから、外へ出て相手しちゃだめでしょうか？」

「そういうことなら許可しよう。ただ、手短にするんだ」「了解」

急いで外に出ると、案の定この子が困ったふうに辺りを見回してた。

「ルーフェ、どしたの？」

「——ロア先輩?!」

まさか実地試験だなんて思ってなかったんだろう、思いっきりびっくりした表情。

「あーうんとね、今日ってば実地試験。

それよりなんかあったの？ キミが野次馬してるなんて、ちょっと思えないし。あとさ、タシユアとシルファ先輩どこかな？」

「あの、実は……」

ルーフエに途中まで事情を訊いたとこで、あたしも思いっきりびっくりした。

「あのタシユアが、倒れたっての?!」

「……はい」

こつくりとこの子がうなづく。

——なんだかなあ。

竜が逆立ちして海水浴してるってほうが、よっぽど信じられる。けどルーフエは嘘はつかない。というか、この子つけない。

「まったく、あいつに取り付くなんて、どんな風邪なんだか。

けどどうしてキミだけ、ひとりでいるの？」

「それが……」

この子の話の続きを聞いて、あたしは納得した。

「タイミングよくルーフエだけ、締め出されちゃったんだ」

「そうなんです……」

いつも大人しいルーフエだけど、今日はとりわけ元気がないみたいだ。

まあ、無理ないかなあ……。

自分ならともかく、大好きな彼氏が人質じゃ、いてもたってもいらないだろうし。

「――心配？」

「……はい……」

「だろうねえ」

タシユアなんか放っておいたってどうってことないだろうけど、この子の彼氏は上級傭兵なんかじゃない。

「まあでも、タシユアがいるんだから大丈夫だよ、たぶん」

癪に障るんだけど。

けどあいつ、あの性格やら毒舌やらはともかくとして、実力だけは一級品なんだよね。

ただどっちにしても、ここでずっと立ち話ってわけにはいかない。

Episode 65

「そしたらさ、その話もう一回してもらっていいかな？ みんなのところで」

「あ、はい」

またこっくりうなずいたあと、歩き出したあたしの後ろを、この子がヒヨコみたいにくっついてきた。

——ホント、素直でカワイイよね♪

タシユアに爪の垢でも煎じて、1年くらい飲ませたいかも。

ともかく一旦、待機してたところまで戻る。

「戻りました」

元運転手（教官だけど）に声をかけると、開口一番文句だった。

「遅いぞ。しかも候補生でない者まで連れてきて、どうするつもりだ」

「す、すみませんっ！」

「——ルーフェ、謝らなくていいんだよ」

恐縮しちゃってるこの子を、そう言って安心させる。

それにしたって教官も、関係あるから連れてきたってことくらい、わかんないのかな？

「彼女ですが、事件の直前まであの病院の、例のフロアにいたんだそうです。

それと、タシユアとシルファ先輩の現在の居場所も、この子のおかげで分かりました」

「それは本当か？」

「はい」

この期に及んで嘘言うほど、ボクはひねくれてないってば。

「この子が言うには、いろいろあってタシユア、シルファ先輩、それにこの子の同級生がひとり、一緒に人質にされているそうです」
「――なにをどうやったならそうなるんだ」

教官ってば呆れ顔。

まあ分かるけど。

「あたしに言わないでください。ともかく中に居るのは、間違いないそうですから」

それからまだなんか考え込んでる教官に、ボクはたたみかけた。
「ともかくそう言うわけですから、この子連れて指揮所へ行っていないですよね？」

こゆことは当人に説明してもらうのが、なにより早いわけだし。

「許可しよう。速やかに行って、細かい説明をこの子にさせるように」

「了解です。」

さ、ルーフェ、おいで♪」

あたしの言葉に、ルーフェが本日2度目のヒヨコ。もう可愛いっ
たらない。

そのままこの子をくっつけて、あたしは指揮所へと足を踏み入れた。

瞬間、視線がこっちに突き刺さる。

「……！」

「ああ★」

勢揃いしてる上級生の、鋭い視線にびっくりしたんだろう。ルー
フェったら立ちすくんじゃうし。

慌ててなだめようとしたところへ、でもそれより早く声がかかった。

「こら、お前ら！　こんな美少女を怯えさせるなんぞ、人間のやることじゃないぞ」

――それはちよつと違うような。

けどこの先輩、いい性格してるからなあ。

「いやいや、悪かったなあ。ちよつとみんな気が立ってるもんだから。」

それでルーフェイア、何の用だい？」

「あたしの名前、ご存知なんですか……？？」

いくら同じ学校とはいえ、最上級生にいきなり名前呼ばれて、ルーフェが面食らった表情になった。

――けどこの先輩、こうなんだよね。

次の言葉はもちろん予想通り。

「このウラグ、女の子の名前と顔は忘れたことはないぞ」
周囲がいつせいにため息をつく。

Episode 66

「あ、こら、指揮官の特技にその態度はなんだ」

「話が違うでしょ。だいいちそんなの、威張るほどのことじゃないわ」

奥のほうから今度は、女子の先輩が出てきた。

短めにカットしてあるストレートの髪は、ブラウンの中にブロンドっぽいメッシュ？が混じった不思議な色。瞳の色はグレイ。

今の女子筆頭の、イオニア先輩だ。

けどこの先輩ときたら、その容姿なんかを遥かに上回る、圧倒的な存在感がある。

で、開いた唇からの一言は、めっちゃ強力だった。

「もっとも、それしか自慢するものがないなんて、可哀想だけど」
後ろのルーフェが、目をまんまるくして驚くのが分かったり。

——まあねえ。

この先輩の板につきまくったタカビーは、きっと学院イチだろうし。

でもこっちのウラグ先輩も、負けちゃいない。

「何を言うんだ。これ以上任務で役に立つ特技は、他にないぞ」

「馬鹿ね、相手が男だったらどうするの？」

「ヤローなんか見た日によ、目が腐る」

「あなただって男じゃない」

「自分は見ないから、いいんだ」
漫才始まるし。

「なるほど、だから死なずに済んでるわけね。

まあいいわ。ともかく向こうに行っててくれない？ この子の相手があなたじゃ、あんまりにも可哀想なもの」

「何を言うんだ、女の子の相手なら、俺の右に出るやつは——」

「だからよ。」

ちよっと誰か、この馬鹿を向こうへ連れてって頂戴」

指揮官じゃなさそうなのに、どうもここを仕切ってるのイオニア先輩らしい。すぐ他の上級傭兵の先輩が来て、ウラグ先輩のこと連行？ してった。

「この人でなし！ 俺を美少女から引き離すような性悪なことばつかしてると、そのうち——うぎゃっ★」

途中で言葉が途切れたのは、分厚いファイルがウラグ先輩の後頭部に命中したせい。

「まったく、うるさいったらありやしない」

投げたのはもちろん、イオニア先輩だ。

「なんであんな馬鹿が、上級傭兵筆頭なのかしらね。こっちの品位まで疑われて困るっらないわ。」

——それで、あなた何の用？」

先輩の、振り向きながら髪をかき上げるしぐさが、妙にサマになってる。

「ここへ候補生が入っちゃいけないこと、まさか知らないなんて言わないわよね？ まあ減点されたいっていうんなら、相談に乗ってもいいんだけど」

「許可は取りました。」

実はこの子——ルーフェイアが、少し情報を持ってきたもんですから」

「そうなの？」

先輩があたしの後ろを覗き込む。

ルーフェが制服の裾を掴んで、また縮こまった。

「ふうん、近くで見ても可愛いわね。

——ほら、いらっしやい。怖くないから」

「先輩、それじゃネコですってば……」

何を間違えたんだかこの先輩、子ネコ呼び寄せるみたいに、少しかがんで手招きしてる。

「ほら、おいでおいで。うーん、エサがないとダメかしらね」

「……………」

何かが激しく間違ってる。

けどこのままじゃ、この子も怖がって動きそうにないし。

「ルーフェ、大丈夫だよ。別に食べられたりしないから」

そう言っただけで、ようやく安心したんだろう。あたしの後ろから、ルーフェがちよこつと姿を見せた。

Episode: 67

「あの……」

おずおずと前へ出てくる。

「――やっぱり、可愛いから食べてみようか」

「ダメですっ!!」

先輩ときたら、とんでもない言い出すし。

――もつとも当のルーフエは、なんのことだか分かってないんだけど。

きよんとした表情で、首を傾げてるだけだ。

「かつわいゝ♪ ほら、捕まえたっ」

「きゃ……」

ただなにしろこの子だから、逃げ出すわけでもなくて、そのまま抱かれてるし。

「いい子ねえ。」

さ、お姉さんにお話、聞かせてもらえるかしら」

「あ、はい」

傍目から見るとけっこう危険な気がするけど、ルーフエは知り合いのお姉さんに抱っこされた程度の認識らしい。

――それだって、かなりアブナイんだけど。
けど、嬉しそうなのは確かだ。

「えっと、その……」

「うんうん、それで？」

ちゃんと通じるように、話してるし。

「それで、タシユア先輩が倒れて、病院へ行って……」

「あのタシユアが？　ふうん、あいつ人形じゃなかったのね」
さすがこの先輩、とんでもないこと言う。

「まあいいわ、それで？」

「それで、あたしが外へ行ってる間に……事件になったんですけど……」

ここまでは聞いている。

けど次の言葉は、あたしをも驚かせることだった。

「そのあと、どうにか中と連絡取って――」

「ちょっと待ってルーフエ、今なんて言ったの？」

この子がうつむく。どうも、突っ込んだのは訊かれないことらしい。

「……まあいいや。」

どうやってかはともかく、中と連絡は取れるわけね？」

「――はい」

安心したふうにルーフエがうなずく。

あたしもそれ以上は突っ込まなかった。だいいちどうせシユマー絡みだろうから、突っ込んだらもう2度と、情報提供してくれない可能性だってある。

一応確認のためにイオニア先輩に視線を向けると、無言でうなずいた。

――話わかるじゃない。

情報が真実で正確なら、出所は伏せといってもらえそうだ。

「中の様子、どうだったか分かる？」

「えっと……」

ルーフェが少し考える顔になった。どう報告しようかまとめてるんだろう。

「犯人の数は、まだ確認できてません。でも5名以上は間違いなさそうで、病棟の廊下で銃を持って見張ってるそうです」

さすが学年首席＋戦場育ちなだけあって、報告が簡潔。

「そう。」

――そうしたら、人質の状況は？」

「威嚇射撃はあったものの、現在死傷者はありません。看護士さんとお医者さんはナースステーション、患者さんはほとんどが病室に軟禁状態。」

ただ、子供が……」

この子が少し言いよどんだ。良くない情報らしい。

Episode..68

「子供が、どうしたの？」

「小児だけは全員、7-B病棟ナースステーション隣の倉庫に集められて、常時3人に見張られているそうです」

「――連中、やってくれるじゃない」

同感。

病室に閉じ込められてるだけっていうなら、セオリーどおり突入ってテが使える。

けど状況がこれじゃ、下手に突っ込んだらチビちゃんたちが全滅しちゃうだろう。

「ナースステーション横って言うところ――この場所よね。入り口は一つ、窓はなし。」

ふん、舐めたことするわ」

イオニア先輩が、建物内の見取り図を見ながら考え込む。そこへ何か報告書を持って、別の先輩が入ってきた。

「先輩、どうかしましたか？」

「あ、うん、新しい情報をこの子が持ってきたの。」

――上級傭兵を全員、ここへ集めて頂戴。突入方法を再検討する必要が出たわ」

「了解です」

上級傭兵の先輩がひとり出て行って、じきに部屋が騒がしくなった。

「イオニア、お前なにやってんだよ？」

「馬鹿ね、状況が変わったに決まってるでしょ。おかげで作戦変更

だわ」

「俺は聞いてないぞ」

「あたりまえでしょ。まだ話してないもの」

どうもこの先輩2人、相当相性いいらしい。

そうこうしてるうちに続々と上級傭兵が――総出だったらしい――ここへ入ってくる。

中には当然、エレニアの顔もあった。

「ロア？ それにルーフェイアじゃない。どうしてこんな場所に2人でいるの？」

「ちよつといろいろあったりして。

まあホントのと言え、この子が情報持って来たからなんだけどね」

ちよこつとだけ説明する。

「情報って？」

「もう、説明あると思う」

言い終わるかどうかに、イオニア先輩が口を開いた。

「遅いわね。呼んだら2分以内に揃いなさいよ。

――まあいいわ。全員ここへ座って。

新しい情報が入ったの。けど、いいものじゃないわ」

揃ったメンバーを平然と見渡してから、先輩が切り出す。

「とある筋から、中の様子が分かったわ。説明するからよく聞きなさいよね。

まず犯人だけ――」

さすが女子の上級傭兵の筆頭と言われるだけあって、イオニア先輩の説明ときたらルーフェ以上に簡潔。

「――状況は以上。当然だけど、迂闊に突入できないことは分かるわね？」

これから方法を検討するから、各自再度命令があるまでは待機。何かいい方法が思い浮かんだら、その都度ここへ知らせなさい。

じゃあ、解散していいわ」

一旦離れてたエレニアが、また傍へ来た。

「とんでもないことになったわね……」

「ホント、敵ながら大したもんかも、この悪知恵」

こうなるとこっそりひとりづつ片付けてくくらいしか、やりようないだろう。

だいいちそれだって、かなり分は悪い。

「子供たちを見張ってる人間に気づかれずに――上手く出来るかしら」

「どうだろ」

ちよつとでも不穏な動きとか物音があれば、即座に中で皆殺しにされかねないだろうし。

Episode 69

「同時に上手く、中を殺れれば言うことナシなんだけどね」

「そんなこと出来れば、苦勞しないわよ」

2人でため息をつく。

「ともかくあたし、待機場所へ戻るわ」

「あ、うん、頑張って」

エレニアも出て行く。

「さ、ルーフエ、あたしたちもどっか……場所移ろうか？」
まさかずっと指揮所にいるわけには、いかないだろうし。
けど、この子は動かなかった。

「ルーフエ、どしたの？」

「あの、あたし……」

普段はどっか夢げなこの子が、海色の瞳に強い光を見せる。

「あたしが、行きます」

「え？」

言ってる意味が分かんなくて、思わず聞き返した。

「行くって、どこへ？」

「あたしが、潜入します。あたしだったら——小児科の入院って言っても、通るはずですから」

「——あっ！」

確かにちっちゃいこの子なら、あたしたちと違って、簡単に子供たちに紛れ込めるだろう。

それに実力だってルーフェは、そこらの傭兵隊を遥かに上回る。
でも……。

「でも、どうやって？ あのとおり、外からはそう簡単に入れないよ」

だからこそ、突入なわけだし。
けどルーフェが、しっかりした声で言った。

「屋上から懸垂降下なら、入れます」

「屋上から？」

一瞬、言葉に詰まる。

「たしかにそれ、常套手段だけど……でもあそこ、ほかに高い建物ないよ？」

そばにもっと高い建物があれば、そこから懸垂降下はよくやる。
けどあの病院、あの地区でいちばん高い。だから下から登るのはアリでも、降りるのはできなかった。

でもルーフェは、あたしの想像なんか超えてた。

「巨鳥を使えば、出来ます」

強い瞳に、はっきりした声。

——勝算がある。

表情が、そう告げてる。

「わかった。聞かせてもらえるかな」

ヘタすればここの誰よりも、前線慣れしてるこの子だ。聞いて損はないはず。

ルーフェが話し始める。

「えっと、まず巨鳥はこういう状況なら、ケンディク基地からすぐ、

借りられると思います」

「あー、たしかに」

巨鳥はいまでも空の主役。

たしかに陸は、炎石を利用した魔動機関で動く車両が、走竜に取って代わった。

けど空を飛ぶ乗り物は、まだ出来てない。ってのも浮遊石自体はメジャーなんだけど、じつはかなりデリケートで、他の魔力石と一緒に使うとちゃんと浮力が出ない。だから軽量化に使うのがせいぜいで、大きな乗り物を浮かせるまでには至ってなかった。

そんなわけで今でも、軍はどこでも巨鳥部隊を備えてる。

「でもさ、借りたとしてどうすんの？ 巨鳥ってば、1人乗せて飛ぶのが限界だよ」

この案が検討されなかったのは、これがいちばんの原因だ。

巨鳥には必ず、騎手が要る。けど屋上へ飛び降りちゃったら、騎手ナシになった巨鳥が、好き勝手にどっかへ飛び去っちゃうわけだからといって屋上にあんなものを、降ろして待機させとくわけにもいかない。

Episode: 70

「ルーフエはたしかにちっちゃくて軽いけど、それでもたぶん、騎手と2人じゃバランス崩すんじゃないかなあ」

そこへ、ルーフエの明快な答え。

「キエーグのベルトを使えば、出来ます」

「――！」

この子の言うとおりであった。

浮遊石の嵌まったキエーグのベルトは、人を浮かせるだけの力がある。危ないからやたらと浮かないように制限かかっているけど、それさえ外せばどこでも使えるはずだ。

それにこれなら、すぐに用意できる。この町のキエーグ場を片っ端から当たれば、十分な数が揃うはずだ。

「たしかにそれなら、行けるかも……。全員つけてれば、1羽で最低でも、3〜4人は運べるだろうし」

ものすごいアイディアに舌を巻く。さすが戦場育ちの学年主席だ。けど、手放しじゃ賛成できなかった。

「でもねルーフエ、危ないよ？　いつ何されるか、わかんないんだよ？」

「あの子たちは、もっと危ないんです！」

この子にしては珍しい、強い口調。

本気だ。

この子は――本気だ。

「分かった。だけど、まず先輩たちに相談してから。いいね？」
「はい」

このへんは素直だから、あっさり納得してくれる。

それからあたしは、ルーフエを連れてイオニア先輩の所へ行った。

——もっともいる場所がまだ指揮所だから、行くつては言わないかも。

「あらなによ、まだこんなところにいたの？ そんなに不合格になりたい？」

「先輩……」

気を取り直して、大事なことを言う。

「この子が、方法を考えついたんです」

「方法？ 役に立たない方法だったら、承知しないわよ」

「すみません……」

先輩の毒舌に、なんにも言わないうちからルーフエが謝っちゃうし。

「今謝ったって、しょうがないのよ。さっさと聞かせてもらえないかしら」

「ごめんなさい！」

すっかり萎縮しちゃってる。

「先輩、ダメですよ。この子すっかり、怯えちゃってるじゃないですか」

「あらそうね。あたしとしたことが、忘れてたわ。

——さ、子ネコちゃん、お姉さんに教えて頂戴」

「センパイ……」

それはアブないって。
だいいちルーフェ、後ず去っちゃって言えるような情況じゃないし。

「この子が、潜入するって言うんです。自分なら小児科の入院って偽って、紛れ込めるんじゃないかって」

「潜入？　どうやって？　病院はあのとおりなのよ」
あたしと同じ疑問を、この先輩も返してくる。

「えっと、その、えっと……」
どうもルーフェ、先輩に気圧されたらしくて、上手く言葉が出てこない。

「怖くないって言ってるのに、なんでおびえるかしらね。
——じゃあ、これでどお？」
さっきと同じように、イオニア先輩がルーフェを捕まえる。

「いい子ね。さ、お話聞かせてちょうだいね」
「……♪」

だからそれ、すごくアブない光景だつてば。
けどルーフェはこれがいいみたいで、先輩の腕の中でうれしそうにしながら、話し始める。

Episode..71

「なるほどね……検討の余地はあるわね。

ちよつとウラグ、来てもらえる？」

詳細を聞いた先輩が、ここの指揮官たぶんのウラグ先輩を呼んだ。

「なんだ、誰か可愛い子でも——おお、いるじゃないか♪」

「——馬鹿」

この非常時にこの先輩たち、なに考えてんだか。

まあ緊張しまくって失敗することと思えば、このほうが数段マシなんだろうけど……。

「どうせその頭、ロクなこと入ってないんだから、黙ってたほうが身のためよ。

それで話は変わるけど、この子——ルーフェイア、だっけ？ と
もかくこの子が、ひとつアイデアを持って来たのよ」

聞いた瞬間、ウラグ先輩が間髪入れずに答えた。

「採用！ 美少女はいつも正しい」

「——捨ててやろうかしら」

それ以前の問題のような……。

けどウラグ先輩も、ほんとこたえない。

「俺は真実を述べただけだぞ。

それでルーフェイア、どんな案なんだい？」

「その……」

ルーフェアがまた言いよどんだ。大人しいこの子、どうもこゆ場は
苦手にしてる。

「遠慮なんかしないでいいんだぞ。美少女の言うことは正しいんだから」

「は、はあ……」

面と向かって言われて、思いっきりきよんとしてるし。

けど気さくな態度がよかったんだろう、今度はちゃんと自分で話し始めた。

「あの、小さい子たちが、人質になってる話なんですけど……」

「うんうん」

でも話を聞いているうちに、この女の子好きな先輩の表情が変わる。

「それはダメだ！」

「——あなたさっき、採用って言ってなかった？」

イオニア先輩がすかさず突っ込んだ。けどウラグ先輩も負けてない。

「それとこれとは別だな。だいいち、美少女を危険な目に遭わせるなんて、出来るわけじゃないじゃないか」

「あなたの馬鹿、死んでも治らなそうね」

辛辣な言葉が飛ぶけど、間違ってるなとこがすごい。

だけど今回引き下がらなかったのは、いつも大人しいルーフエだった。

「あたしが行って紛れ込めば——小さい子を見張っている犯人への攻撃が、突入と同時に出来ます。」

そうなれば、リスクも最小限で済むはずです」

「それは確かにそうだが……どうやって紛れ込むつもりなんだ」

確かにルーフエの学年じゃ、こういった突入時の対応なんか勉強

していない。

けどそれはあくまでも、『普通の生徒』の場合だ。

「屋上へいったん上がって、それから懸垂降下でどこかの病室へ入ります。」

あとは着替えて『午後に入院したあと隠れていた』と言えば、疑われないと思うんです」

もう何度も頭の中で、シミュレートしてたんだろう。この子が言った案は、実現可能な範囲だった。

それをあごに片手を当てて——なんか妙に優雅——検討しながら、イオニア先輩が質問を浴びせる。

「でも、入ったからってそれじゃ済まないわよ。突入と同時に攻撃って言うけど、あなた本当に出来るの？」

それに相手は、3人いるって言ってたじゃない」

「それは……」

下を向いたルーフェが、次の瞬間動いた。

Episode..72

「ヴェゼ・ジーヴルっ！」

瞬間、部屋一面に氷の破片が吹き荒れる。

「ちょっと、あなた何てこと——」

イオニア先輩の言葉が、途中で止まった。

首筋にぴたりと当てられた、ルーフェイアの太刀。

「あ、足が動かん。さすが美少女だ」

ウラグ先輩、また意味不明のこと言ってるし。

「えっと、あの、すみません。いま溶かします」

太刀を収めたルーフェイアがぱたぱた走り回って、凍りつかせた足を溶かして回った。

「あの、凍傷とか……平気です、よね？」

自分でやっというて、泣きそうなのがカワイイ。

「ああ、ウラグなら気にしないでいいわよ。むしろそのまま、凍らせといて頂戴」

「む、よく分かってるな。美少女にやられるなら俺は本望だ。わが人生に悔いなし！」

「——馬鹿」

ウラグ先輩の頭をまたファイルで殴ってから、イオニア先輩が向き直った。

「ルーフェイア、あなたの实力は分かったわ。作戦への参加を許可する。」

以後、連絡があるまで待機なさい」

「はい」

うれしいはずなのに悲しそうな、複雑な表情でルーフェがうなずく。

その頭を、イオニア先輩が撫でた。

「ただの学年首席にしとくには、ちょっと惜しいわね。やっぱり食べようか」

「ダメですってば！」

思わず全力で否定。

この先輩じゃ、本気でやりかねないし。

「あら、本気にしたの？」

遊んでたいとこだけど、そうも行かないわよ。すぐ詳細を、検討にかからないと」

この先輩の相手するの、マジで疲れるかも。そこへ、別の先輩が飛び込んできた。

「騒々しいわね。何だって言うのよ」

「向こうが、期限を切ってきたそうですっ！」

「――！！」

指揮所内に緊張が走る。

「向こうが指定したのは、何時？」

「2300、今から3時間32分後です！」

どうやら犯人たちは、長期戦は望まないらしい。

「まったく、せっかちなのは嫌われるのに。けどこれじゃ、さっきの話を急がないとダメね。」

ルーフェイア、正式に決まったら連絡するから、それまでロアと一緒に待機してなさい。いいわね？」

有無を言わさぬ口調に、けどこの子、うつむきながらも従わなかった。

「その、すみません、もし時間があるなら……中と連絡取ったり、したいんですけど……」

「——いいわ、許可する。その代わり、連絡は密にしてもらうよ」
「はい」

状況が状況だから、妥当なセンで許可が出た。

「良かったね、ルーフェ。さ、早く行っといで」
この子をうながす。

ついてきたい気もするけど、どうせシュマー絡みの話だろうから、部外者は立ち入り禁止だろう。
なのにこの子、行こうとしなかった。

「——ロア先輩」
訴えるような表情。

「なに？」
「先輩に、していただきたいことがあるんですけど……いっしょに、来ていただけますか？」

「あ、うん。いいよ」
なんか意図があるんだろうし。

けどこの事件、ルーフェのおかげで案外早く片付くかもしれない。
——やっぱりシュマー、なのかな。

いざ戦闘となると、かけ離れた才能を見せるこの子に少し圧倒されながら、あたしは後について行った。

Episode: 73

◇ I m a d

——やってくれるよな。

ベッドの上に座り込んで、俺は考え込んだ。

場所は当然病院の中。しかも、患者でもねえのに出れなくなってるってんだから笑える。

もっとも犯人連中の気持ちは、わかんなくもなかった。

俺だってどうせやるなら、平和ボケしまくったこのケンディクのほうがいい。

向こうのベッドはいつのまにか選手交代で、シルファ先輩が寝てた。入院したはずのタシユア先輩ときたら、隣の椅子で本読んでる。ホント、どこが病人なんだかな……。

そこまでふらふら考えが流れてから、俺はもっかい元へと戻した。

ルーフェイアのやつ、やってくれる。

今この場所は、テロリストに占拠されちまってる。当然、外との連絡手段なんざない。

なのにタイミングよく締め出されちまったあいつ、シュマーの念話出来る連中使うっつー、凄まじい手段に出やがった。

なにせ人がいい気持ちで昼寝してたってのに、さっきはそれで起こされたし。

——けど普通、考えつかねえよな。

念話自体は案外知られてる。何より通話石が、それをベースに作られてる。ただいまはもう、そういうのが出来るヤツは、ほとんど居なかった。

原因は分かってない。通話石なんかが発達したせいで、そういうのを伸ばす必要がなくなったから、退化したっては言われてる。

ってもゼロってわけじゃなくて……たまに俺みたいのは出る。ついでに言うとお袋もそうだったから、間違いなく俺のは血筋ってヤツだ。

もつともルーフェイアのやつが言うには、なんかヴァサーナじゃ研究してる科学者がいるつつし、親兄弟とは無関係にそゆのが産まれることもあるらしい。

まあ世界中捜せば、それなり数はいるんだろう。

けどやっぱ、あいつの実家？となると別格だ。

なにしろシュマー家ときたら、4000年も続いてる血統書つきの家系だから、半端じゃない。しかも聞いた話じゃ、それぞれが内部か、さもないと戦場で相手を見つけて来るってんだから、品種改良もいとこだ。

ともかくそのせいなのかなんなのか、あの家にはこの手の能力を持った連中がごろごろしてて、通話石が出来る前から連絡に使ってたんだって言う。

だからとっさに、俺となら連絡が取れるって気づいたんだろう。

——けどなあ。

なんも知らない人間が思うほど、これは便利じゃない。

特に俺はこんな接続慣れてねえ——相手もナシに慣れたらコワイ——から、やると意外に消耗する。

ついでに1回の時間も俺じゃまだ限られてて、効率よく話を進めないで時間切れだ。

結局さっきもそれでやられて、次の時間だけ決めて終わりになってるわけだし。

にしても、閉じ込められてんのに「犯人の配置調べろ」ってんだから、やっぱ言うこたシュマーだ。

それにルーフェイアのやつじゃ、俺から訊いたコトは、絶対派遣されてくる先輩たちに話してるだろう。

つまり俺が伝えそこなったら、作戦が全部狂う。

——んな責任、押し付けられても。

俺はけっこーこゆのは気にしないタチだけど、こうなるとちっとは怖いもんがあった。

とりあえず最初に、人数を数えてみる。

確かあの出たり入ったりしてる主任看護師が最後に言ってた話じゃ、チビらのところに3人、廊下に4人、昇降台前にそれぞれ1人づつ、あと両方のナースステーションにそれぞれ3人以上いたはずだ。

——って、15人超えるってか？

一ヶ所でテロやらかした人数としちゃ、けっこう多い。

Episode 74

装備は見てねえから、なんとも言えなかった。ただ発射音が連続してたから、短銃じゃなくて、最新式の連射銃ってところだろう。

魔法を駆使するシエラの傭兵隊は別として、普通の人間に取っちゃ銃ってのは、手軽で最強クラスの武器だ。正規兵と違って魔法障壁なんて、ふつうの人は張っちゃいねえから、これで十分用が足りる。

俺ら人質の配置のほうは、考えるまでもなかった。向こうの病棟にいたチビたちが倉庫、あとはみんな、それぞれの病室に押し込められてるだけだ。

けど一応、俺は確認することにした。人質のほうはともかく、犯人連中の武器とかなるとさすがに不安だ。

「――タシユア先輩」

「なんです」

寮の部屋と変わんねえ調子で本読んでたこの先輩が、顔を上げる。

「あの連中の武器って、連射銃だけですかね？」

「なんとも言えませんね。主力の武器がそれなのは間違いありませんが、他に持っていないとは言いきれません。

手榴弾あたりは持っているとは仮定したほうが、無難でしょう」

「ですよね……」

もっともこれじゃ、分かってないのと大差ない。

あと分かっているのは――？

ひとつひとつ今までのことを思い出して、俺は気が付いた。

「先輩、連中もしかして、2時間ごとに見張り交代してます？」

「ええ」

——さすが。

けどそれを黙ってるあたりが、この先輩なんだよな……。

「えっと、毎時ちょうどでしたよね？」

「そうです。」

もともと正確に言えば、3分程前に交代要員がナースステーションから割り当ての場所へ出て、0分で交代ですがね」

「あ、なるほど……」

よく見てる。

でもこれが分かりや、突入ががぜん楽になるってやつだ。

「当たり前ですけど、突入するんだったらその時間狙ったほうが、いいですよね？」

「当然です」

ごちゃごちゃ質問するのが、さすがに気になったんだろう。この先輩が「何をを企んでるのか」って顔でこっち見たけど、俺は説明しなかった。

だいたい、説明するとなったら大ゴトだ。

それから少し待つ。

（先ほどの、ケイカですが……）

案の定外から、さっきの女の人と話しかけてきた。

（今、よろしいですか？）

（だいじょうぶです）

——誰なんだろうな？

答えながら、少しだけ悩む。

いちおう自己紹介？は貰ってるけど、面と向かって顔つき合わせたワケじゃねえから、なんかピンとこなかった。

もっともこゆこと出来るシュマーの人間で俺が知ってんのは、ルーフェイアのお袋ひとりだけだから、分かるほうがおかしい。

んなこと考えてるうちに、向こうから予想通りのコトを訊かれた。

（先ほどお願いしていた件を、知りたいのですが）

（えーと）

人数やら武器やら見張りの交代やら、整理しといたことをまとめて送る。

このやり方のいいところは、こゆ面倒な話も簡単に終わるってところだろう。微妙な位置やらなんかが、言葉以上にきっちり伝わる。

けど向こうは、これじゃ満足しなかった。

Episode: 75

(今、よろしいですか?)

(だいじょぶです)

——誰なんだろうな?

答えながら、少しだけ悩む。

いちおう自己紹介?は貰ってるけど、面と向かって顔つき合わせたワケじゃねえから、なんかピンとこなかった。

もっともこゆこと出来るシュマーの人間で俺が知ってんのは、ルーフェイアのお袋ひとりだけだから、分かるほうがおかしい。

んなこと考えてるうちに、向こうから予想通りのコトを訊かれた。

(先ほどお願いしていた件を、知りたいのですが)

(えーと)

人数やら武器やら見張りの交代やら、整理しといたことをまとめて送る。

このやり方のいいところは、こゆ面倒な話も簡単に終わるってところだろう。微妙な位置やらなんかが、言葉以上にきっちり伝わる。

けど向こうは、これでも満足しなかった。

(見張りの交代等、犯人グループの詳細については承知しました。

それで申し訳ありませんが、各病室の様子を詳しく伝えていただけませんか?)

(病室の……?)

質問の意味が、イマイチ分かんねえ。

だいいち建物内の見取り図は、向こうこそ持つてゐるはずだ。

（どこで誰が何してるか、ってんですか？）

（いえ、『どこが空いているか』が知りたいのですが）

（はあ？）

よけい意味が不明だ。

向こうも通じてないのがわかったんだろう、補足の説明が来る。

（突入に先だって、グレイス様が潜入して小児の人質に紛れ込むそうです。ですから、そのために潜入する部屋を選ぶ情報が、欲しいのですが）

「なっ、マジかよ！」

「何を騒いでいるのです。ここは病室ですよ」

「――あ」

驚きついでに、思わず声に出しちまったらしい。

「えーと、後で説明するんで、ちょっと待っててもらえませんか？」

「別に、説明していただく必要などありません」

「………」

――ま、いつか。

どうせすぐに、イヤでも説明しなきゃなんねえワケだし。

とりあえず、やりかけの話のほうにケリをつける。

（その話、俺じゃちょっとわかんないんで……誰か看護士さんに訊いてみますから）

さっきから出入りしてるあの主任なら、そゆのに詳しいだろう。

（で、あいつどうやって来るつもりなんです？）

これが訊いとかねえと、いい場所も見つけようがない。

（巨鳥で屋上へ降りたあと、そちらの病室のどれかへ懸垂降下のことです）

（え？ マジですか？）

思わず訊き返す。

そりゃ巨鳥なら高いとこまで行けっけど、降りるってなると別問題だ。あれってば図体デカイけど、1人乗せんのが限界だったりする。しかも騎手居なくなると、服従魔法が効かなくなるから、大好きな高山へ逃げちまうし。

けどまあ、ルーフェイアくらいなら、ギリギリ一緒に乗れる……
かしんねえけど。

（ええ。巨鳥を使って、シエラの上級傭兵も屋上へ展開します。グレイス様がキエーグの浮遊ベルトを使って、数人をまとめて運ぶ方法を、思いつかれましたので）

——そう来るか。

あいつのやることときたら、ハンパなさすぎる。

Episode..76

（グレイス様の潜入と屋上からの展開、この2つを踏まえて、部屋を教えてください）

言ってることは間違っちゃないけど、かなりムチャクチャだ。

っても、断る理由はないわけで。

（そしたら、それが出来そうな部屋ってセンで探しますから、時間もらえませんか？）

（了解しました。では……20分後にもう一度、こちらから連絡します。）

それから、犯人側が期限を切ったことはご存知ですか？

「マジですか?!」

「先ほどからひとりで、何を言っているのです」

慣れないせいか、ついまたうっかり、口にしたらしい。

「えーと、こっちのことなんで」

「……………」

一瞬だけ鋭い眼差しを見せてから、この先輩はまた本に視線を戻した。

——こっちも大したもんだよな。

ルーフェイアとは正反対、人のことは構わないのが徹底しまくってる。

とは言えこれで見るとこは見てたりするから、無関心がイコールじゃないのが怖いとこだ。今俺がやってることも、知らん顔してバレバレって可能性もあるし。

とりあえず俺は意識を戻した。いちばん大事なことを訊く。

（期限って、いつ……なんです？）

俺が慣れてないから、そろそろ接続がヤバくなってきてた。

（2300です。

では、また後ほど連絡しますの）

限界なのが分かったんだろう、向こうもあっさり話を打ち切る。期限って話に時間が気になって時計を見ると、夜の8時になろうかってとこだった。

「――3時間ちよいか」

なんとなく俺はつぶやいた。途中で2回昼寝したのが効いて、けっこう時間が過ぎてる。

「なにが3時間なのです」

また先輩が、俺に鋭い視線を向けた。

「えーと」

どう説明すっかな。

だいいち話自体も、混み入っちゃってるし……。

「ん……」

どう言おうか悩んでるうちに、今度はシルファ先輩まで目を覚ます。

「目が覚めましたか」

「……？」

けどまだ身体は起きるとこまでいってないらしくて、やたら眠そうだ。

――こゆ雰囲気、ルーフェイアに似てるよな。

もっともあいつの場合、誰かれ関係ナシにこういう無防備だから、かなりコワかったりもする。

ヘンなオヤジにくつついてかねえように、よく言っという方がいいか……？

俺がンなこと考えてると、シルファ先輩が身を起こした。

「何か……あったのか？」

「これと言って進展はありません。イマドがひとりで話をしていただけです」

「――ひとりで？」

黒髪の先輩が、怪訝そうな顔になる。

「ひとりで話をして……面白いのか？」

「いくら俺だって、ンなことしませんって。相手がたまたま見えなかっただけです」

「十分妙だと思いますがね」

これはさすがに返す言葉がない。

とは言え状況からして、言っとかないとヤバいだろう。

かといって、説明しないわけにもいかないっつーのが……。

Episode: 77

「――先輩、ヘンなこと言っているんです？」

「何ですか？ 相手が見えずに話をするのですか？」

この先輩がどっか呆れたふうに戻した。

「まあぶっちゃけた話、そうなんですけど」

この程度しか、俺も言いようがない。

――で、どう説明すりゃいいんだ？

ルーフェイア絡みの連中だと、こゆの知ってるから早ええんだけど。

結局俺は、単純な方法を取った。

「信じてもらえないの分かりますけど、マジで外の連中と話してたんですよ。」

俺、生まれつきこゆこと出来るんで」

「そうですか」

あっさりした答えが来る。

こゆのもなんだか、複雑だよな……。

でもこないだのスラムでも、おんなじような話になったから、世の中こんなモンかもしれない。

ただシルファ先輩は、そこまで簡単には納得しなかった。

「その、要するに、何の話なんだ……？」

前言撤回、話が見えてなかったらしい。

「えーと、どっから話しましょう？」

「どこからと言われても……どこから、なんだ？」

「さあ……？」

つつーか、ほとんど話していない気がするんだよな。

「まったく。自分のことくらい、きちんと把握してはどうです」

「できたら苦労しないですよ」

この先輩は状況分析とか得意そうだけど、こんなの専門書もないだろうし。

それでも俺は、話し始めた。

「念話の話、知ってます？」

「聞いたことはあるな……。遠いところの人と考えが通じたり、読めたりするんだったか？」

言いながらシルファ先輩が、ちらりとタシユア先輩へ視線を移す。

「私も聞いたことはありますね。ヴァサーナではそれを研究している、暇な科学者もいましたよ」

この先輩にかかっちゃ、稀代の天才とやらもただの暇人扱いだ。

「んで俺、それできるんですよ」

「――！」

黒髪の先輩が、俺から僅かに身を引いた。

「まさか、読めて……？！」

「やろうと思えば、できるんでしょうけど。」

けどんな面倒なこと、普段はしませんって。だいいち常時他人と接続なんかしてたら、こっちがどうかなりますよ」

これが諸刃の剣なことくらい、俺だって重々承知だ。
シルファ先輩もほっとした表情になる。

「そうなのか……」

「ルーフェイアとは、常にしているようですがね」

「あ——そうかも」

言われてみると、思い当たるフシは山ほどあった。

ただこっちはほとんど無意識にやってるから、気になってねえけど。

「けど、よく分かりますね？」

「普段を見ていれば、十分わかります」

——やっぱこの先輩、怖ええや。

普通だったら知らないような話知っていたり、こんなとこまで気がついてたり。

「ともかく俺そゆのが出来るんですけど、ルーフェイアの知り合いにも、同類がいたらしくて。

で、ルーフェイアがそいつ使って、連絡してきたんです」

「そんな方法が……」

「俺もんな使い方、最近まで知らなかったんですけどね」

というか、普通は思いつくほど仲間いねえし。

Episode: 78

「だが、そうだとすると……外と常に連絡が、取れるんじゃないか？」

「あ、すいません、それダメです」

期待を込めたシルファ先輩には悪りいけど、そう答えるしかなかった。

「でも、取っていたんじゃない？……？」

「俺慣れてねえから、受信がやっとなんです。だから送信は、かなりキビしいですね」

「だいたい、あゆ細かい作業はキライだし。」

「——そうなのか」

先輩少し残念そうだけど、これはしゃあねえだろう。
タシユア先輩が後を引き取る。

「まあ、やむを得ない場合に限るのが賢明でしょうね。」

「だいいちこれがなければ、事が運ばないというわけでもありませんし」

——正論。

面白味もねえけど。

もっともここでンなこと言うと、「そんなものはあっても意味がありません」とか、言うんだろうけどな。

「ともかく、どうにもならないってんなら俺もやります。ただそれ以外は、向こうから来るほかは、なるべくパスってことで。」

「んで、肝心の話のほうなんですけど」

「前置きが長すぎます」

またすかさず突っ込んでくるし。
けどこれにかかずらってっと、ストレス溜まるだけだから無視した。

「向こうが期限切ったそうですよ」

「本当か?!」

シルファ先輩が声を上げる。

タシユア先輩も、僅かに表情が変わった。

「考える頭もない割に、人並みのことをしますこと。
期限は——2300ですか」

「ええ」

さっき俺がうっかり言ったのから、時間が分かったらしい。

「イマド、外に見張りの交代の件は伝えましたか？」

「そっくりそのまま、言っとききました」

これ言わなかったら、バカっっーしかない。

「そうですか。」

この情報を伝えたとなると——この後の交代は2000と2200ですから、2159に突入ですかね」

言いながらタシユア先輩の表情が、また一瞬変わった。

なんっーか、ネコがネズミを捕まえたみたいな……。

ともかく、凶悪なことを考えてるのは間違いないだろう。

「——ほぼ、一網打尽にできますかね」

先輩、なんかいい方法を思いついたらしい。ただ珍しく「ほぼ」がついてるから、カンペキじゃねえんだろう。

理由はひとつ、あのガキンちよたちだ。

同じことをシルファ先輩も思ったらしかった。

「だがタシユア、子供たちは——大丈夫なのか？」
心配そうに訊いてる。

「——それなんですけど」
シルファ先輩の後に俺は口を挟んだ。

「ルーフェイアのやつが、ここ来るってんですよ。んで、ガキンち
よの中に紛れ込むって言ってますけど」

「ルーフェイアが？　大丈夫なのか？」

先輩が、また少し心配そうな表情になる。

Episode..79

「まああいつ、ケタ狂ってますから」

「それはそうだが……」

シルファ先輩、否定しねえし。

けどあいつは実地で鍛えてっから、実際問題上級傭兵顔負けだ。

「まったく、何にでも首を突っ込みたがりますこと。」

ですが彼女がやるというなら、恐らく大丈夫でしょう」

タシユア先輩、毒舌冴えまくってるし。

ただ相手の力量はちゃんと認めるあたりは、この先輩は公平だ。

「潜入の方法は訊いていますか？」

「懸垂降下でこの階のどっかの病室に、潜り込むって言っていましたっけ」

「……ほう」

先輩が面白がるみてえな声を出す。

「懸垂降下と言うからには、ここの屋上へ上がるのでしょうか……どうするつもりやら」

「巨鳥、使うって言ってましたよ。ついでに上級隊も、屋上に展開させるらしいです」

先輩2人の表情が変わる。

「まったく、贅沢な作戦を取りますこと」

「たしかに屋上へ上がるには効果的だが……何羽要るんだ？」

言い分はもっともだ。巨鳥で屋上に展開とか言ったら、ふつうは十何羽が逃げて無駄になっちゃうし。

けど、今回は違うわけで。

「ルーフェイアのヤツ、キエーグのベルト使って、一度に何人も運ばせる気らしいですけど」

「……………」

シルファ先輩はもちろんさすがのタシユア先輩も、こん時だけはなんとも言わなかった。

「言われてみれば、それで出来るな……………」

「検証もしないでやるあたり、どうかとは思いますがね」

前言撤回、やっぱ言うだけ言うし。でもこの先輩相手じゃ、言い返すだけムダってヤツだ。

「ともかくそゆ話なんで、看護師さん呼んでいいですか？

あいつ、どの病室が空いてるか訊いてから、入るトコ決めたいって言うてるんで」

「そういうのを、行き当たりばったりと言うのですがね」

ナースコール押してる最中まで、先輩の毒舌ときたらまだ止まらねえし。

まあ要するに、自力で情報取って決めろってんだろう。

——この状況で出来るかどうか、知らねえけど。

だいいちルーフェイアのやつにしてみりゃ、どゆ手段使ってでも万全を期したいはずだ。

「だが、これで……………かなり楽に、なるんじゃないか？」

「なるでしょうね」

面と向かって聞いたら、ルーフェイアのやつが大喜びしそうな台詞で、タシユア先輩がシルファ先輩に答えた。

「後はナースステーションに残っている犯人ですが——」

「今度は何の用？」

タシユア先輩の言葉にかぶさるようにして、さっきの主任看護士が部屋へ入ってきた。いつのまにか俺らの相手は、この人に決定しちゃったらしい。

「犯人たちがが期限を切りました」

「……どういうこと？」

業界が違うせいで、伝わってねえし。

「失礼、言葉が足りなかったようですね。

犯人グループが今日の23時を最終期限と決め、それを過ぎたら人質を殺していくと通告したのです」

「えっ——」

とたんにこの人、部屋を飛び出そうとした。

Episode..80

「た、大変だわっ!」

「落ち着いてください。まだ話は終わっていません」

タシユア先輩の有無を言わせない口調に、主任がため息をついて向き直る。

「手短にして。早く報告しないといけないから」

「全て聞き終えてからのほうが、いいと思いますがね」

「あなたねえ……」

けど先輩の毒舌で、この人もいつものペースが戻ったらしい。

——意外なところで、ヘンな効用あるんだな。

なんか感心しちまったり。

主任が落ち着いたのを見て、タシユア先輩が口を開いた。

「ご存知かどうか分かりませんが、既に外にはシエラの傭兵隊が展開しています。ですからこの後、場合によっては彼らによる突入があると思います」

「と——?!」

「静かに」

思わず声を上げそうになった主任を、タシユア先輩が制す。

「あ、ごめん。」

でも、そんなことしたら患者さんが——」

「心配ありません。」

突入の目的は、私たち人質の安全確保と、犯人グループの拘束が目的です。ですから病室から出ないよう徹底しておけば、被害を蒙らずに済みます」

「そうなの？」

まだ半信半疑らしいけど、ここは信じてもらうしかねえだろう。

「病室から出なければ、安全は保障します」

「――わかった。患者さんにそう伝えるわ。」

でもあたしたちは、どこにいればいいわけ？」

今度は主任の言ってる意味が通じなくて、タシユア先輩が説明を求めた。

「だから……あたしたちは普段、ナースステーションの隅に犯人と一緒にいて、呼ばれた時なんか病室へ行くだけなのよね。」

でも一緒にいたりしたら、危ないわけでしょ？」

「確かにそうですね」

先輩が少し考え込む。

「――職員の控え室かなにかは、ありませんか？」

「狭いけど、ナースステーションの隣にあるわ」

「では何か口実を設けて、できる限り全員そこにいるようにしてください。」

それで、ほぼ安全が確保されるはずです」

主任がほっとした表情になった。

まあ誰だって、犯人の巻き添え食らってケガするのはゴメンだろう。

「さすがに全員はムリだろうけど……なるべくみんなで、引っ込めるようにしてみるわ」

「そうしてください。」

もっとも、必ず突入すると決まったわけではありませんがね」

「なんだ、そうならそうと言ってよ。まったくびっくりさせるんだ

から」

最後の言葉に、主任、気が抜けたらしい。

——ウソだけだな。

素人連中が「突入」なんて聞くと、ビビって素振りが変わる。そこから犯人連中にバレるの避けるのに、先輩はこう言ったただけだ。

「私は最初から、必ず突入するなどとは言っていません。『可能性がある』とだけ、言っただけです。がね」

しかもタシユア先輩、突っ込むし。

けどもう、主任は怒るのもめんどくさくなったらしかった。

「まったくもう。」

——ともかく分かったわ。婦長に伝えて、できる限りのことはする」

「お願いします。それから、空いている病室を教えてくださいますか？」

「空き部屋？ そりゃあるけど……どうして？」

いきなり飛んだ話の内容に、主任ついてこれなかったらしい。

Episode..81

「子供たちの安全を確保するために、ひとり事前に窓から潜入します。ですがまさか、入院患者がいる部屋からは入れませんので」主任がますます、困惑した表情になった。

「ちょっと待ってよ。あたしたちもあなたたちも入れないのに、どうやってチビちゃんたちの所まで行くの？」

その人が来ても、ムダだと思うんだけど……」

「来るのは12歳の少女ですから」

「じゅ——」

「静かに。見張りに聞こえかねません」

また主任を、タシユア先輩が黙らせた。

「年齢こそ12ですが、彼女はシエラの上級傭兵並みか、それ以上の実力の持ち主です。入れる部屋さえ分かれば、あとは自力で全てやってのけます」

これ、目の前で言ってやりゃいいのに。

主任がまたため息をついた。

「ほんと、学院ってのは凄いとこね。」

部屋は——まず3号室、それに7号と8号、あと12号室が空いてるわよ」

さすが主任なだけあって、即答だ。

「その4つとなると、3号室しかありませんかね」
こっちも即決する。

「どうして？」

「他は全て外に向いていますが、3号室は中庭に面しています」
「――？」

まだよく分かんねえらしい主任に、今度はシルファ先輩が追加の説明をした。

「犯人の注意は、だいたい外側へ向く。だから中庭のほうは、比較的見つかりにくいんだ」

「あ、なるほど……」

やっとこの人が納得する。

「見つからないようにしないと、意味がないわけよね」

「そういうことです」

さらにタシユア先輩が指示を出した。

「もしできるようでしたら、3号室の窓を開けてカーテンだけにしておいてください。そのほうが潜入の際に、リスクが減ります」

「いいわ。」

それで、その子が来たらどうすればいいの？」

少し先輩が考え込む。どうもありそうな状況を、シミュレーションしてるらしい。

「そうですね――騒ぎが起こった場合にのみ、危険のない範囲で様子を見に行ってください。」

それともうひとつ、騒動が収まったあとに部屋の片付けをお願いします」

主任が無然とした。

「それは、言われなくてもやるわよ」

プロ意識とやらが、傷ついたんだろな。

――もっともこの先輩、んなの意に介さねえ性格だけど。

今も平気？で説明続けてるし。

「そうではありません。

彼女が潜入の際に、何かを持ってくる可能性があります。ですからその後部屋へ行って、もし見つければ確保しておいて頂きたいのです」

主任が首をかしげる。

「――なんかよく分からないけど、それも分かったわ。

それでもう話はない？ あんまり一つの病室に、長居するわけにはいかないのよ」

時計を気にしながら、この人が訊いてきた。

Episode..82

「ええ、今のところはもうありません。

それから潜入の件ですが、他言無用に願います」

「わかった。婦長だけにするわ」

「そうしてください」

その言葉にうなずいて、主任が部屋を出てく。

「――それにしても、ルーフェイアも思い切ったことをするな」

「まあ、あいつですから」

シルファ先輩の言葉に、俺は答えた。

ルーフェイアのやつは確かに大人しくて繊細だけど、反面とんでもないことを平気でやらかすことがある。

ただ、そうなる条件はひとつだ。

――それがいいとこなだけだな。

タシユア先輩辺りからすると「甘い」ってことになるんだろうけど、俺はあいつのそゆところは嫌いじゃなかった。むしろ感心してる。

世話はやけるし常識知らずの泣き虫だけど、ルーフェイアのやつは優しいことにかけては、右に出るやつはない。

それで人が助けられるってんなら――あいつは間違いなく、自分の命さえ差し出すだろう。

もともと俺としちゃ、それは願い下げだったりする。

それからひよいと時計をみると、今度の連絡時間の5分前だった。

「――タシユア先輩、なんか外に言うことあります？」

いちおう訊いてみる。

「そうですね、第一段階のナースステーション内の確保は、私たちがやると伝えておいて頂けますか」

「言っちゃっていいんですか？」

さすがに訊き返す。

そりゃ、3人して最初からやる気なのは確かだけど……。

「彼らに一番近いのは、中にいる私たちですから当然でしょう。

あとでシルファとイマドは、口実を設けて向こうの病棟に移ってください。そうすれば、両方のナースステーションを同時に攻めることができます」

さっき「一網打尽」ってたのは、どうもこのことらしい。しかも最後に残ったチビらの話も、ルーフェイアのやつがくるってんで片が付いたから、マジでひとまとめに終わらせられるだろう。

――しかしなあ。

テロリストの連中も運が悪いつつーか。

成功させたいからケンディクで起こしたんだろけど、よりによって中にこんな先輩抱えちゃうんざ、死にに來たようなもんだ。

もつとも死にたくなきゃやらなきゃいいわけで、その辺から絶対間違ってる。

実言う俺自身、あの連中にはけっこームカついてた。

「ワサル開放」は、一応分かる。んで変えるためになんかしようつつーのも、分かんなくない。

けど連中、ワサル以外の人間は、虫けらと同じ扱いだ。その想いがさっきから、ガンガン俺には伝わってくる。

正しいのはワサル、悪いのはロデスティオ、ついでにそれを知らんふりしてる他の国の連中も、同じ悪人って考え方だ。

——冗談じゃねえっての。

ンな理屈で、こっちの命を秤にかけられる筋合いなんざ、あるわけない。

ましてや病気のチビ連中人質にして、場合によっちゃ見せしめに殺してみようなんつー話、100歩どころか1万歩譲ったって許容範囲外だ。

まあそのツケは、当人で払う羽目になるだろうけどな……。

Episode 83

◇Rufair

あたしたちは病院から少し離れた林の中の、ちょっと開けた場所に移動していた。

周囲にはあたしの他に、上級傭兵や候補生の先輩たちが大勢いる。でもみんなほとんど無言だから、人数からするとすごく静かだった。

あとは、たまに巨鳥が翼を動かす音。

巨鳥はぜんぶで、4羽居る。どれもここからそう遠くない、ユリアス軍のケンディク基地から、騎手ごと借りてきたものだ。こんな貸し出しは前例がないって話だったけど、なにしろ事情が事情だから、異例の速さで許可が出たんだっていう。

「あと10分を切ったぞ。各自最終チェックをしろ」
低い声で、命令が出る。

あたしももういちど、装備の確認に入った。

——大丈夫。

全部ポーチなんかは閉まっているし、そうじゃないものは背中だ。降下に使う金具とロープも問題ない。

装備はかなり軽装だった。いつものキットが入ったポーチに武器、あとは布で包んで背中に括りつけた着替えくらいだ。だいいち患者さんになるというのに、そんなにいろいろ持ってはいけない。

周囲の先輩たちは、突入用の装備だ。ただこれもロデステイオ軍なんかに比べると、遥かに軽装だった。

なにしろシエラ学院の上級傭兵は、精霊の支援で高度な魔法を駆

使用する。だから削っても大丈夫な装備が多かった。

例えば各国の正規軍がよく持っていた防弾装備なんかは、防御魔法で代用が効く。

それに主要武器は銃系じゃなくて刀剣類——正規軍を相手にした時、銃弾は魔法でほとんど弾かれる——だし、手榴弾の代わりに魔法で済むから、弾薬類も特殊なもの以外はほとんど持たない。

おかげでシエラの上級傭兵隊は世界でも稀な、軽装備の特殊部隊だった。

「ベルトの浮遊石の発動は、打ち合わせどおり5分前だ。いいな」
また確認の声が飛ぶ。

あたしは自分だけ屋上へ行くつもりだったけど、先輩たちが立てた作戦は違った。キエーグのベルトを使えば、いっぺんに4人は運べるからと、上級隊を屋上へ展開させるっていう。

あとはひたすら待機、時間になったところで懸垂降下して、非常ドアなんかと併せて一気に突入だ。

でもこれなら、かなり攻撃に幅が出る。そしてそれは、作戦の成功につながるはずだ。

ネックのひとつだったナースステーションの掃討も、同時刻にタシユア先輩たちが動くという話が来て解決した。

そしてもうひとつのネックは——あたしが受け持つ。

「ルーフェイア、今いいかしら？」

「あ、はい」

イオニア先輩が話しかけてきた。

先輩、屋上部隊を指揮して、中を掃討することになってる。

「ほんとうはこういうことは、事前に各人でやっておくべきことだけれど……あなたまだ小さいものね。」

いまのうちにもう一度、手順を確認するわよ」

「はい」

あたしはうなずいた。手順自体は何度も読んで頭に叩き込んであるけど、ここで確認するのは悪くない。

「2040に、表の投光器がいったん切れるわ。」

私たちはその2分前に飛び立って、暗くなるのに合わせて屋上へ。

あなたはさらに、懸垂降下で潜入。OK？」

「了解です」

Episode..84

時間は少ない。

ミスもできない。

もっともロープを用意して降下体勢に入ってしまったえば、見えるのは病室からだけだ。そこから先は投光器が点いていてもいなくても、見つかる確率は変わらない。だからどうにか間に合うだろう。

それにもう金具とロープは、できる限り接続した状態にしてある。

「OK、じゃあこれを」

「はい」

出された装具——巨鳥の鞍に繋げてある——を身体にかけて、しっかりと締める。急な旋回なんかはないだろうけど、ぜったい落ちるわけにいかない。

先輩がどんな表情をしているかは、あたしからは見えなかった。

「掴まったわね？ そうしたら、目をつぶって」

「分かりました」

投光器がない状態での屋上は、そうとう暗くなるはずだ。そこへ明るい場所に慣れた目で飛び込んだら、まともに動けなくなる。

しっかりと目を閉じてから、顔を腕と機体に押し付けた。これも、見つからないようにするためだ。

あたしの肌は白いから、夜はとくに目立つ。けど潜入して「患者だ」と言うためには、顔を汚してしまうことができない。だからこうして隠すしか、方法がなかった。

ただ服やグローブはもともと暗緑色だし、鳥の身体も黒いし、髪はフードの下に入れ込んでしまったから心配ない。

「――5分前だ」

誰かが告げる声――たぶんウラグ先輩――がした。
巨鳥が一斉に、翼を広げる。

「ここから垂直に上昇、病院屋上の高さまで合わせてから水平飛行に移るわ。潜入する病室はこの真っ直ぐ前方だから、進路もこのまま真っ直ぐ。」

ただ病室自体はここから見て、中庭の向こう側。だから降りたら、真後ろから降下よ。いいわね？」

「はい」

目を閉じたまま答える。打ち合わせ済みのことだけど、確認は多いほどいい。

そして息詰まるような時間の後。

「――お嬢さんたち、行くよ」

巨鳥の騎手さん（？）が声をかけてきて、身体が下へ押し付けられるような感覚が来た。

けど目を閉じているから、周りがどうなっているかは分からない。

「大丈夫かい？」

心配してくれたんだろう、騎手さんがまた声をかけてくれる。

「はい、大丈夫です」

「OK。そろそろ水平飛行に移る」

同時に下へ押し付けられる感覚がなくなって、風が前から来た。病院までは、あと少しのはずだ。

と、耳を突き刺すような爆発音が響いた。

駐車場に待機しているグループが、予定通りに欺瞞行動を開始したんだろう。

これでたぶん報道関係者も野次馬も、そっちへ気を取られて病院は見ない。そこへ更に、投光機の消えた暗闇が重なる手筈だ。

案の定、少ししたところでまた声がかかる。

「投光器が消えた。目を開けて」

「はい」

言われたとおりにする。投光器が消えてしまえば、目を開けても問題ない。

もう屋上は目前だった。

巨鳥がギリギリのところまで柵を越える。

——あの窓なんだ。

中庭の向こう側、ちょうど正面にひとつ、明かりの点いていない窓があった。

その位置を頭に叩きこむ。

Episode 85

「鳥を降下させる。降りる用意を」

「了解」

巨体が中庭も越えて、少し高度を下げる。

瞬間、あたしは金具を外して屋上へ飛び降りた。そしてすぐに、懸垂降下の準備に入る。

先輩がどうしたかは、見る暇はなかった。ともかく作業を早く済ませないといけない。

あらかじめ用意しておいた金具を柵に噛ませて、その先に繋がるロープをなるべく真っ直ぐ下へ投げる。同時に柵を乗り越えて、降下用の金具とロープも繋いだ。

1回だけロープを引いて、外れないか確かめる。

――よし。

確信のある手ごたえが来て、あたしは即座に降下に入った。降りるのは2階分だから、すぐだ。

目的の高さで昇降用の金具を操作して止まって、侵入に使う窓を確かめる。

――よかった、開いてる。

可能なら開けておいてくれるという話だったけど、上手く時間が取れたらしい。

もちろん開いてない時のために、ガラスを切る道具なんかは持っている。でも使わなくて済むほうが、ぜったい良かった。

そっと窓に取り付いて、降下用の金具をロープから外す。その間

にちらっと見た部屋の中は真っ暗で、ドアの外にも人の気配はない。少しほっとしながら、音を立てないようにしてすべり込んだ。次いでドアから死角になる位置に移動、気配を殺して——もっともこれはいつもだけど——周囲を覗う。

病院の中は少しざわついていた。外の爆発音と投光器が消えたのとで、さすがに犯人グループが警戒してゐるらしい。けどそれも、待つうちに引いていった。

「爆薬を暴発させるなんざ、シエラの傭兵隊も大したことないよな」。そんな声が、かすかに聞こえてくる。

——いいかな？

そつと背中の中を布包みを降ろして、ほどいた。バックパックにできなかったのは、この方が隠す手間がないからだ。

中身を全部出して、布を丁寧に畳む。それに用意しておいた精霊とメモを挟んで、枕元の台の上に置いた。

上手くいけば、看護師さんが見つけてイマドたちに届けてくれるだろう。それにこれだけなら、万が一犯人たちが見つけても、使い道も意味も分からない。

それから、あたしは着替えに入った。

まず暗緑色の、フード付きの上着とスパッツを脱ぐ。あとは上に、持ってきた丈が長めの長袖Tシャツとガウンを羽織るだけだ。

下は暗緑色の下に黒のスパッツを重ね着しておいたし、履いてきたのも室内履きに似せた靴だから、代える必要はない。

脱いだものも畳んで、これはマットとベッドの隙間に押し込む。押し込んだのは足元のほうだから、掛け布団が邪魔になって簡単には見つからないはずだ。

太刀は……いろいろ考えたけど、そのまま持っていることにした。
あとは上手くごまかせることを、祈るしかない。

ともかくこれで、偽装？は完了だった。

気配を殺したまま、また部屋の外を覗う。

誰にも気づかれた様子はない。これなら予定通りに行けるはずだ。

ひとつだけ、大きめに息をする。そして思い切ってサイドテーブルを蹴飛ばした。

室内はもちろん、廊下にまで大きく物音が響く。

「今のはなんだっ！」

怒鳴り声がして、足音が近づいてくる。

——撃たないでくれると、いいんだけど。

防御魔法を唱えながら、そんなことを思った。撃たれてケガをするわけじゃないけど、やっぱりあんまり気持ちはよくない。

けど意外にも、次に上がった声は女の人のものだった。

Episode..86

「待って！ 病室はあたしが行くわ」

続いて少しやり取りがあつて、結局女の人の足音も一緒にこつちへと来る。

もし部隊の突入――こんなにのんびりした突入なんてない――だった時に、この方が被害を受けなくて済むという話になったらいい。足音が病室の前で止まる。

「誰なの？」

穏やかな声がして、魔光灯が点いた。
一瞬の間。

「――なんでえ、ガキかよ」

女の人は当たり前だけに看護師さんで、その後ろにいた犯人らしい男性のうちのひとりが、あたしを見て呆れた顔をする。

「どうしたの、こんなところで」

看護師さんのこの言葉にピンと来た。この人はきっと、窓を開けておいてくれた人だ。

だとすれば細かい話も知ってて、口裏を合わせてもらえるだろう。

「その……あたし、隠れて……」

なるべく怖がっているようにして、答える。

「隠れてって、ここにずっと独りでいたの？ 可哀想に」

思った通り、話を知ってたみたいだ。あたしの傍へ来て、抱いて頭を撫でてくれる。

「病室はどこかな？」

――あ、もしかして夕方、検査入院する予定だった子なの？」

「あ、はい……」

上手く作ってくれた話に乗る。

「待て。親はどこだ」

犯人のもうひとりが、鋭く訊ねた。

――見破られないといいんだけど。

内心そんなことを思いながら、あたしは用意していた答えを口にする。

下を向いたまま、なるべく怯えたふうに。

「その、あとから荷物……持ってくるって……」

「あらら。それであなただけ、ひとりになっちゃったのね」

看護師さんが、あたしの話を上手く補足してくれた。

「さ、ともかくこっちへいらっしゃい。部屋、確かめてあげるから」

「それはダメだ」

いっしょに病室を出ようとしたところで、鋭く止められる。

「ガキは全員、こっちで預かる」

「でも！」

「黙れ。死にたいのか？」

犯人がこっちへ銃を向けた。

「言うとおりにしないなら、今ここでガキと一緒に殺してやる。」

――さあ、どうする」

看護師さんが、すまなそうにあたしから離れた。

「ごめんね……」

この人、本当に度胸がある。この状況で、訓練も受けていないのにこんな演技ができるなんて、そうとうの精神力だ。

ただあたしは、下を向いたまま答えなかった。なるべく怖がってするようにしなくちゃいけないのに、答えたらかえって怪しまれるだろう。

「来い、こっちだ」

乱暴に腕を引っ張られて、思わず顔をしかめる。

「ちょっと、なんてことするの！ 相手は子供なのよ、せめてそつとやりなさい！」

「うるさい」

看護師さんの言葉に犯人はそう言ったけど、腕は放してもらえた。ただ代わりに、背中に銃を突き付けられる。

Episode..87

「さっさと歩——待て、その骨董品は置いていくんだ」

「いやっ！」

太刀を取り上げられそうになって、あたしは騒いだ。

「これはダメっ、兄さんの形見——」

「ちよっと、そのくらい持たせてやりなさいよ」

看護士さんも事情が分かっているから、上手く加勢してくれる。

「こんな華奢な子なのよ、なにか出来るわけないでしょう？ それにそんな大事なものの取り上げたら、きつとずっと泣いてるわよ」

「……」

犯人たちが沈黙した。子供に泣かれるのは、嫌いなんだろう。

「——それは特別に持たせておいてやる。さあ、さっさと歩け」

追い立てられるようにして、廊下を歩く。

タシユア先輩たちの病室は、静かなままだった。あたしが潜入する話行ってるはずだけど、状況が状況だから、知らん顔をしてるんだろう。

——イマド、サンドイッチ食べたかな？

ふと、そんなことを思う。ジュースは届けそこなったけど、サンドイッチはシルファ先輩が持っていたから、手に渡ってるはずだ。こんな状態じゃ夕食だって出てないだろうし、いつも「お腹が空いた」ってイマドは言ってるから、食べなきゃ持たないだろう。

あの量で、足りてるといいんだけど……。

「なんだ、その子供は」

途中通ったナースステーション——先輩が入院したほうじゃなくて隣——で、他のメンバーに呼び止められた。

「向こうの病室に、隠れてたようです」

どうやらこの話している相手が、グループのリーダーらしい。ちらりとこっちへ向けた視線はひどく無機質で、あたしのこともその辺の物と同じにしか見ていないみたいだった。

「ほう、よく今まで隠れていたもんだな。ところで、その太刀はなんだ」

あたりまえだけど、ここでも見咎められる。

「それが、兄貴の形見だとか言って、放そうとしないんで」

リーダーらしい人が、いきなり太刀を掴んだ。

「だめっ、やめて！」

「うるさい」

突き飛ばされて、取り上げられる。

けどすぐにリーダーは、太刀を放り出した。

「なんだ、抜けないのか。」

まあそうだな。こんなモンを子どもに、そのまま持たせるワケないか」

そんな言葉を聞きながら、慌てて拾い上げる。飛行の際に危険がないように、太刀が簡単には抜けないようにしておいたのを、勘違いしたらしい。

「まあ仮に抜けたとしても、使えないだろうしな。他の子供と一緒にしておけ」

「分かりました」

小柄なのが幸い、また上手く誤解してもらえたみたいだ。

あたしとしては、これはこれで複雑なだけど……。

それからほんのちよつとまた歩いて、ナースステーションの隣にある扉の前で、立ち止まるように言われた。

「動くんじゃないぞ。」

——俺だ。隠れてたガキを見つけた」

「まだいやがったんですか」

声と一緒にドアが開いて、中へ押し込まれる。中にはイマドからの情報どおり、3人の見張り。

それと……。

Episode..88

◇Tasha Side

唐突に爆発音が響いた。

シルファがはっとしたように顔を上げる。

「今のは――！」

「普通なら突入のための陽動でしょうが――時間が早いですしね。恐らく、上級傭兵がどこかに待機するのでしょう」

何か行動を起こす際には、相手の注意を逸らすのが常套手段だ。案の定、いくら経たないうちに次の行動があった。

「来ましたか。割合まともな人間が作戦を立てたようですね」

外の投光器が消えたのだろう、外が暗くなっている。

だが偶然全ての投光器が消えることは、まずありえない。つまりこれも――故意だ。

「このやり方、イオニア先輩か……？」

シルファがとある女性上級傭兵の名前を挙げた。確かにタシユアの知る限りでも、彼女は緻密な戦術を立ててくる方だ。

――とんでもない性格だが。

「いまのうちに、どこかへ潜入するんだろうが……やはり、屋上か」
「そこと、非常口の外とでしうね」

言いながら耳を澄ます。

開けておいた窓――イマドは嫌がったが――から微かに、羽音が聞こえた。どうやら巨鳥が何羽か、屋上へと到達しつつあるらしい。

そこで待機して、時間になったら懸垂降下、という作戦なのは間違いなかった。

（――編隊で来ては、隠密とは言い難いのですがね）
とは言え巨鳥で運べる人数は限られているし、かといって少数で往復しては、やはり見つかり易くなる。最善とは言えないが、おおむね次善の策だ。

「――速え」

何故か壁のほうへ視線を向けていたイマドが、感嘆の声を漏らす。
「ルーフェイアなのか？」

シルファの問いに後輩がうなずいた。

「もうあいつ、病室に潜り込みましたよ」

どこをどう見てそうなるのかは分からないが、嘘ではなさそうだった。ともかくこの後輩は、ルーフェイアのことならよく把握している。

「おかしな見つかり方を、しないといいいのですがね」

「まああの子なら、大丈夫だろう」

珍しくシルファが言い切った。彼女も以前任務を共にして、あの少女の実力は知っている。

（さて、どう出ますことやら）

そのまましばらく待っていると、いきなり大きな物音が響いた。

「意外に、豪快なことをするな……」

「イザやるとなると、あいつっこムチャしますって」

「確かにそうだが、それにしても、もう少し……」

廊下では当然のことだが、不審者を咎めるテロリストの声が上がる。

っている。

「誰だっ！」

だが驚いたことにそれを、別の声が遮った。

「待って！ 病室はあたしが行くわ」

例の主任看護師だ。

その後しばらくやり取りがあって、ルーフェイアはどうやら思惑通りに連れていかれたようだった。

太刀の方も、なんとか持っていけたらしい。

（しかし、無計画といえますか）

この状況で堂々と太刀を持っていくというのだから、ある意味たいしたものだ。

その一方あの少女は、他人が自分をどう見ているか意外によく把握している。普通はあの華奢な身体で猛然と太刀を振るうなど、想像も出来ない。

Episode..89

（人を見かけで判断すると、ロクなことにならないのですがね）
そのツケは後ほど、犯人たち自身が支払う羽目になるだろう。

その後もしばらく、病棟内はざわついていた。どうも中へ入ったルーフェイアが、またひと騒動起こしているようだ。
じき、看護師の動きが激しくなる。

「今度は、何が……始まったんだ？」

「なんか、ミルクつつってるみたいですよ？」

同じ言葉をタシユアの耳も捉えていた。他にも切れ切れに聞こえる単語を合わせると、「子供たちにミルクと食べ物」と言うことらしい。

「連中、チビらの面倒、見る気になったんですかね？」

「テロリストの態度が変わったと言うよりは、ルーフェイアの要求が通ったのでしょう。」

ここまで来て、彼らが態度を変えらると思えませんか」

他人のこととなると向こう見ずなルーフェイアだ。中へ入った途端に自分の身のことなど忘れて、要求を出したに違いない。

そのうち例の主任看護師が、この部屋へも来た。

「ごめんね、食べる物持ってる？」

タシユアがうなづく。

「一応、あります。」

——この話は、ルーフェイアの要求ですか？」

「え？」

訊かれた主任が怪訝そうな表情になった。この辺りのことは、さすがに知らないらしい。

そもそも犯人側も、こういうことはあまり告げないだろう。

「いえ、こちらのことです。それよりこの件に関して、犯人はなんと言ってきたいますか」

「『赤ちゃんにミルクをよこせ』って言ってきたんだけど、他の子もいるでしょう？ だから入院患者さんから、お見舞いのお菓子とかを集めてるのよ。」

一緒に渡しちゃえば、まさかダメだとは言わないだろうし」
「なるほど……」

こういった患者に関することは、とっさでも頭が回るようだ。

（さすがに、看護のプロということですか）

ともかくこれで、子供たちも飢えた状態から開放される。

「それで悪いんだけど、食べる物、どこ？」

「その台の上の、紙袋がそうです」

言いながらのタシユアの視線を受けて、シルファがその紙袋を看護士に手渡した。

「ありがと、助かるわ。これだけあれば、何人分かになるだろうし」主任が中身を見ながら、安心したように言う。

その彼女へ、タシユアはまた質問した。

「ところで子供たちには、何か飲み物も渡すのですか」

「赤ちゃんの粉ミルクがあるから、それを牛乳代わりにあげるって言ってたわ」

答えて、視線を落として僅かに考え込む。

（――使えますかね）

カウンターテロでよく使われる方法が、ここでも実行できそうだった。

主任へ視線を向けなおす。

「睡眠薬は、病棟にありますね？」

彼女の表情が、やや陰しくなった。

「確かにストックはあるけど……あげないわよ。だいいち、ドクタ―の許可が要るんだから」

「欲しいなどと、私は一言も言っていないませんが」

毎度のタシユアの毒舌に、主任がため息をつきながら訊ねる。

Episode: 90

「それじゃ、何に使うの？ 売りさばくなんてことは、言わないでちょうだいね」

「勝手な憶測で物事を判断すると、場合によっては命にかかわるミスを犯しかねませんよ」

「あなたねえ……」

険悪になり始めた雰囲気、シルファが慌てて間に入った。

「その、そういう意味じゃ、ないんだ」

「じゃあ、どういう意味？」

刺々しい口調に、シルファが思わずくちごもる。

だがタシユアが言うより早く、それまでやりとりを眺めているだけだった後輩が、するりと会話へ紛れ込んだ。

「テロリストに食事持っていく時って、よくクスリ入れるんですよ」

「そうなの？」

「学院の教科書、そう書いてますよ」

後輩の答えに、今度はシルファが怪訝な顔になる。

「イマドの学年の教科書に……載っていたか？」

「あ、上級傭兵の先輩の教科書です」

「――違反じゃないか」

シルファの言うとおり上級傭兵の習う内容は、候補生までにしか公開されない。

「まあ、これは聞かなかったってことで♪」
いつもながらこの後輩は、いい加減だ。

（誰かは、見当が付きませんがね）

もっともその気になって過去のテロ事件を調べれば、この方法が何度も使われていることはすぐに分かる。

（教える側だと言う割には、いつもながら無意味なことを）

学院にしてみれば外——特にテロリスト——に知られないための規制だと言うが、調べることが可能な以上、ほとんど規制の意味はない。

主任のほうは既に、どの薬品を使うか思案しているようだった。

「あれはちよつとキツすぎるだろうし……こっちは時間がかかるし。まさか導入剤じゃダメだろうしねえ。」

あ、でも、ちよつと待ってよ」

何を思ったのか、不意に彼女が言葉を投げた。

「何か？」

「食べ物持ってってあげるの、犯人じゃなくてチビちゃんたちよ？それに眠剤混ぜても、意味ないと思うんだけど」

こういう事件は初めてにもかかわらず、意外に鋭い。看護をするなかで培われた、観察眼なのだろうか。

ともかくタシユアは答えた。

「犯人のほうは、上手くいけばで構いません。確実に飲ませなくてはならないのは、むしろ子供たちの方です」

「え——」

「騒がないように。犯人たちに聞こえます」

制してから、もう少し細かく説明する。

「突入となれば、少々手荒なやり方を取らざるをえません。これに

関しては上級傭兵はもちろん、人質の子供たちと一緒にいるルーフエィアも、同じです。

ですが大人と違って、子供は容易にパニックに陥ります。そうなれば、しなくて済む怪我をする子が出るでしょう」

ましてやあの倉庫は狭い。万一子供たちが暴れでもすれば、いくらルーフエィアでも犯人に近づけない恐れさえある。

「気は進まないでしょうが、誰か責任者に話をして、ミルクに睡眠薬を混ぜてください」

「――わかった、話してみるわ」
「どうやら主任が納得した。」

Episode..91

「そうするとあの子を除いて……入院してる子14人と大人3人だから、17人分でいいのね？」

「いえ、全部で18人分お願いします」

「え？」

主任の混乱したような表情を無視して、タシユアは説明を続けた。

「グラスのデザインを変えて、3つに大人用の薬を。子供たちの分は1つだけデザイン違いを用意して、それにだけ薬を入れないようにしてください。」

「——可能ですか？」

「それは出来るけど……でもほら、金髪のあの子が間違えて飲んだら大変よ。」

一つ少ないほうが、いいと思うんだけど」

もっともな質問を、主任が問う。

だが相手はルーフェイアだ。

「ヘタに数が合わないと、かえって犯人の不審を招きます。それにグラスのデザインを分ければ、彼女はすぐ気が付くでしょう」

なによりシユマーの総領家だ。うっかり飲んだとしても効かないだろう。

「——可愛いのに、凄い子ね」

普通の人ならば大抵が抱く感想を、この主任も漏らした。確かにルーフェイアは、外見だけなら華奢で儚げな少女だ。

——もっとも学院生は、そういう者が多いが。

タシユアやシルファ、イマド、また他の学院生も皆、ひと目で「戦闘要員」と分かることは、まずない。

「いずれにせよ、その方向で話を進めて下さい。

何か問題が生じた場合は、連絡して頂ければ出来る範囲で対処します」

「わかった、そうするわ」

主任が身を翻し、後ろ向きに手を振って病室を出て行きかける。その背へタシユアは訊いた。

「何か忘れてはいませんか？」

「あ、忘れてたわ」

答えながら彼女が、なにやら畳んだ布を差し出す。

「はいこれ。例の部屋の床頭台に、置いてあったわ」

出されたのは、どう見てもただの布だ。ただ、中に何かが挟まっているようだった。

「これで全てですね？」

「他には見当たらなかったわ。まあ、見つけれなかったのかもしれないけど」

「そうですか」

包み？を受け取って、無造作に開く。

「だ、大丈夫？ 爆発なんて……しないわよね」

「大丈夫です」

仮にもルーフェイアだ。素人が触るだろう物を、危険なまま置くはずがない。

果たして中から出てきたのは、爆発などありえない物だった。それどころか一見すると、ただの透き通った石とは思えない。

「何、これ？」

初めて目にしたのだろう。主任が首をかしげる。

「精霊です」

答えて、彼女が目丸くした。

「へえ、これが……」

確かに一般の人間が精霊を目にする機会は、少ない。

タシユアはクリスタル塊に似た状態の精霊を、手にとってかざしてみた。

（珍しいものようですが……）

炎属性なら赤、土属性なら薄茶といったように、この状態になった精霊は、その属性の色をうつすらと帯びる。

だがこの精霊が帯びている色は、なんとも言いがたい色だった。緑がかった紫、とでも言うのだろうか？　ともかく同じ紫でも、シルファの澄んだ瞳の色と違い、かなり毒々しい雰囲気仕上がりしている。

Episode: 92

「精霊って、嫌な色してるのね」

「他のはこんな色、してないですよ。」

「——にしても確かに、すげえ色だな」

主任はもちろん、精霊を見るのは初めてではないはずのイマドも、同じような感想を漏らす。

「毒がありそうだな……」

「あるでしょうね」

聞いた瞬間シルファの伸ばしかけていた手が、熱いものに触れたかのように僅かに引っ込められた。

イマドのほうも妙に逃げ腰だ。

「先輩、それ、放したほうがいいんじゃない……」

「冗談のつもりですか？ それにしては少々、出来がよくありませんね」

イマドがどういう意味で言ったかは分かっているが、隙を見逃すタシユアではない。

「それに精霊については、もう学院で教わっているはずですが」

「だって俺、まだ候補生でもないんですよ」

精霊の使用が認められているのは、傭兵隊か候補生だけだと言いたいらしい。

「そんなことを言っているようでは、永遠に候補生にはなれないでしょうね」

「ひでえ……」

延々と続きそうなやり取りに口を挟んだのは、シルファだった。

「この精霊……イマドに、だろう？」

「そうでしょうね」

タシユアもシルファも上級傭兵なので、当然自分の精霊を持っている。それにルーフェイアが必死に渡そうという相手は、ひとりしかいない。

——当人は自分で分かっているが。

どこへ落としてきたのか、あの少女はそういう感情が見事に欠落している。

だがルーフェイアが予測どおり動いてくれたおかげで、立てていた作戦がそのまま実行できそうだった。

「主任、頼みたいことがあるのですが」

もう何度目かの頼みごとに、主任の表情が引き締まる。

「なに？」

「この2人——シルファとイマドを、向こうの病棟へ移して頂けませんか」

シルファとイマドの表情は、変わらなかった。

「向こうの病棟ねえ……」

主任があごに手を当てて考え込む。

「部屋は空いていたはずですよ。出来ないと言うことは、ないはずですよ」

「そうだけど、向こうは向こうの管轄なもの。訊いてみないことには、なんとも言えないわ」

思った以上に病棟間の自治権？は、独立しているらしい。

——それを気にするタシユアではないが。

「では、作戦が失敗して子供たちに何かあった場合は、そちらで責任を取ってください」

「あのねえ……」

タシユアの毒舌に、主任が何度目かのため息をついた。

「あたしに言わないでよ。ともかく向こうの婦長に、相談はするから。」

あとはその答え次第、それでいい？」

「まあ、いいでしょう」

移動できない場合は多少攻撃範囲が減るが、その時はまた別の方法を取るだけのことだ。

「そしたら、訊いてくるわ。」

——あ、これもらってくわね♪」

最後に一言言い添えて、食料を手に主任が出て行った。

Episode: 93

「――食いのだけは、忘れねえの」
イマドが残念そうにつぶやく。

「子供たちに渡るんです。少しは我慢するんですね」

「そりゃそうですけど……」

先ほども食べていたというのに、またおなかが空いているらしい。

「これ片付いたら、なんか作っかな？」

早くも事後のことを考えている。

「買ったほうが、早くないか？」

「それ以前に、調理室が閉まっているでしょうね。」

――これは渡しておきます」

タシユアはルーフェイアからの精霊を、後輩に差し出した。

「これ使ったら、毒食らいそうだな……」

手渡された精霊を眺めながら、イマドがひとりごちた。頭で分かっている、毒々しい色合いには抵抗があるらしい。

「嫌なら、やめてはどうですか？」

もっともそれを後で聞いたら、ルーフェイアが泣くのでしょうかね」

後輩がため息をつく。

「先輩、少しは気が晴れました？」

「何故私が、気晴らしをしなくてはならないのです」

「……………」

面倒になったのか諦めたのか、結局イマドは無言で精霊を憑依させた。

「おそらく、毒に対して耐性があるはずです。

あなたに判断がつくかどうか分かりませんが、とにかく確認だけはするように」

「毒と炎ですね、コイツ。見た目のわりに、なんか大人しいや」

答えを聞く限りこの後輩は、きちんと精霊を扱っているようだ。

（意外、といいますか）

ふつうは自分のものであっても、扱えるようになるまでにそれなりの訓練が要る。なのに他人のものを、それを訓練もなしに扱えるあたり、天賦の才があるのかもしれない。

精霊の他には包みの中は、メモが1枚入っているだけだった。

（2159、3・7・8・12／R、E—EX……なるほど）

傍目にはただの数字と文字の羅列だろうが、タシユアにはきちんと意味が通じる。

気づいたシルファも、メモを覗いた。

「予想通りだな」

「ええ」

彼女も上級傭兵だ。説明するまでもない。

——イマドには、説明が要るかもしれないが。

だがこの後輩も、要領はいい。既に作戦自体は、話の中から把握している。

あとは実際に動く段階で、どれほどミスをせずに済ませられるかだった。

(まあ、問題はないでしょうが)

立てた作戦どおりに動ければ、まず間違いなく制圧できる。
なによりシルファの正上級傭兵としての力量はかなりのものだし、
イマドのほうも曲がりなりにも学年次席だ。

またルーフエイアも、ミスをするとは思えない。

絶対とはさすがに言い切れない——そもそも何事も、『絶対』な
どありえない——が、十中八九まで大丈夫と言えそうだ。

タシユアが視線を向けると、シルファとイマドもうなずいた。

「2人とも分かっているとは思いますが——ここでもう一度、作戦
の詳細を確認します。いいですね？」

2人がまたうなずく。

それに応えて、タシユアは説明を始めた。

——万にひとつも、間違いのないように。

Episode: 94

◇Rufair

「――俺だ。隠れてたガキを見つけた」

「まだいやがったんですか」

声と一緒にドアが開く。

怯えたいくつもの瞳が、あたしの方へ向いた。

――ひどい！

予想外の状態に、一瞬呆然とする。

中は、予想外の状態だった。

確かに犯人は、イマドからの情報どおり3人だけだ。

でも、問題はそんなことじゃない。

「その辺に座れ」

あたしを引き取った？ 犯人がそう言ったけど、無視した。

太刀置いてガウンを脱いで、やるべきことに取りかかる。

「ほら、お洋服脱いで！」

いちばん近くにいた子の洋服を、まず脱がせた。

犯人たちは人質にとっただけで、この子たちの面倒は一切見なかったらしい。

恐怖でまだ泣いている子、もう泣き疲れてうずくまっているだけの子、転がされたままの赤ちゃん……。

それにどの子も、下着を汚してしまっていた。トイレにさえ行かせてもらえなかったんだろう。

ともかくひとりづつ汚れたものを脱がせて、棚にあったタオルで

身体を拭いていく。

「お前、何をしている！」

「綺麗にしてるの！」

思わず言い返した。

「何もするな、黙って座っている！」

「いやよ！」

犯人のひとりがあたしに銃口を向けたけど、どうということはない。この子たちをこのままになんてできないし、だいたい安全装置をかけたまま――間違って人質の子供を撃たないためだろう――の銃を向けられても、何も怖くない。そのまま数秒睨みあう。

「――No. 5、構わん」

睨みあいの最中に、横から声が割って入った。

「こいつに世話をさせてやれ。そのほうがこっちも楽だ」

「――わかりました」

銃口が下げられる。

代わってさっき命令した人が、あたしのほうへ来た。

「ガキどもの世話はさせてやる。だが、ここから出ようとしたりはするな」

うなずいてだけ応えようと、またその人は入り口近くへ戻った。でもこれで、この子たちを少しでもマシにしてあげられるだろう。

「おねえちゃん……」

「大丈夫、大丈夫よ。ほら、あなたもお洋服脱ごうね」

幸いここが倉庫なせい、壁際の棚にはいろいろなものがあつた。赤ちゃんのおむつもあるし、シーツや毛布も積み上げられている。

「ごめんね、お洋服ないから、これを着てて」

床に毛布を敷いてシーツや何かで身体をくるんであげると、この子たちの表情が少し和らいだ。

赤ちゃんたちも毛布をたくさん敷いて、その上にちゃんと寝かせる。

ただ嬉しいことに、どの子も暴行された様子はなかった。服が汚れたまま放置されていたほかは、あざや傷跡は見当たらない。

念のために、訊いてみる。

「痛いこと、されなかった？」

「うん」

どの子も同じ答えだ。

怖い目にあつて怯えてはいるけど、どうにかそれだけで済んでいい。

Episode: 95

「――おねえちゃん」

女の子がひとり、傍に寄ってきた。

「大丈夫よ」

頭を撫でてなだめる。

「静かにしようね。そうすれば後で、ちゃんと看護師さんが迎えに来てくれるから」

「うん」

それからこの中では大きい子たちに、3歳から6歳くらいの子たちを、ひとりづつ割り当てた。

子供ばかりの学院で、よく使われる方法だ。

「ちゃんとおてて繋いで、しっかり抱っこしてあげて。大きいからできるよね？」

「わかった！」

それまで怯えるばかりだった子が、たちまち顔に決意をみなぎらせる。

幼い子たちにも、繰り返し言い聞かせた。

「静かにしてれば、お部屋に帰れるから」

「ふいなちゃんの、ベッド？」

「そう。フィナちゃんのベッド、今看護師さんがお掃除してるの。だからここで、静かに待ってようね」

「きれいきれい、まってる」

そんな話に納得して、喋れるくらいの子たちも静かになる。

あとは赤ちゃん2人と、やっと歩けるくらいの子が2人だけど、

これはもうどうしようもなかった。
なにより、もっと差し迫ったことがある。

「そのうるさい赤ん坊も、どうにかしろ」

「そんなの、ムチャよ!」

夕食の時間なんてとつくに過ぎている。なのにこの子たちは放つて置かれて、何も食べていないはずだ。

「ミルクがなくちゃ、泣きやまないわ」

話ができる子は、どうにか事態を飲み込んで黙っているけど、赤ちゃんにがまんさせるなんてできるわけではない。

「お願い、看護師さんに言って!」

「ダメだ」

「じゃあ、あたしが行くわっ!」

構わず扉に向かった。

「ダメだと言ってるだろう!」

「痛っ——」

すごい力で腕を掴まれる。

「放して!」

ふりほどこうとしたけど、容易にはできそうになかった。

「お願い、放して! あたし、看護師さんに——」

「No. 8、止めろ」

ふと、腕を掴む力が緩む。

腕にあざがついていそうだった。

「まったく、とんでもないお嬢ちゃんだな。大人しそうな顔してる
つてのに」

――褒められてるんだろうか？

ここのリーダー（全体のリーダーはまた別だ）の言葉に考え込んだけど、結局あたしは応えなかった。

その間にリーダーは、他の男の人に命令する。

Episode: 96

「ガキどもを黙らせるのには、お嬢ちゃんの言った方法しかないのは確かだ。

お前、行って看護師どもにどうにかさせろ」

「了解」

ひとりが出て行きかけた。

その背へ、またリーダーが言葉をかける。

「だが、この中へは入れるな。部屋の外まで持ってこさせるんだ」

「わかりました」

今度こそ男の人が出て行った。

——よかった。

さすがにほっとする。

これで……この子たちに、何か食べさせてあげられるだろう。

あたしは傍にいた赤ちゃんを抱き上げた。

「待っててね。あとちょっとで、ミルクあげるから」

赤ちゃんを抱くのは、慣れていた。

大勢が暮らすシュマーの本拠地は保育施設もあって、たくさんの子供がそこで暮らしている。

ただ、もともと限られた血縁を中心とするシュマーは、人手が不足気味だ。そのうえどうしても軍事が優先になるから、あたしはそこへ帰るといつも、保育所なんかで手伝いをしていた。

そういえばあの子たち、どうしてるだろう……。

メインファクトリー・END——シュマーの本拠地はこう呼ばれ

ている――の子たちの顔が、脳裏に浮かぶ。

最後に帰ったのは、この間の夏だ。

それからもう、1年近く。全員が無事とは思えなかった。

シュマーの一族は子供の死亡率が高い。それも戦死ではなくて、病死してしまうケースが多かった。

一族が持つ強靱な体質が、一方で適合しきれなかった子たちを、死なせてしまうのだ。

もちろん今も必死に治療法が研究されている。でも原因も症状もさまざまで、決定的なものはない。

――早く、方法が見つかるといいのに。
発症したが最後かなりの確率で死ぬという点では、この子たちよりも重症だろう。

そんなことをいろいろ考えながら、人質になっている子たちの相手を続ける。

と、ドアが開いた。

その向こうのに見えたワゴンに、子供たちの瞳が輝く。

「おかしだ〜っ！」

「だめっ、静かにっ！」

とっさに制止した。

ただでさえ犯人たちはイラついているはずなのに、騒いだりしたらよけい刺激してしまう。

「今、ちゃんと分けてあげるから、待つて」

ワゴンの上には哺乳瓶のほかに、コップに入ったミルク、ビスケットやキャンディーなんかがたくさん載っていた。一緒にあるサンドイッチに見覚えがあるから、きつと看護師さんが患者さんから集

めてきたんだろう。

ともかく赤ちゃんに哺乳瓶を渡して、それから食べ物を他の子に分ける。さらにコップのミルクを配ろうとして――あたしは気づいた。

数が合わない。

Episode: 97

哺乳瓶の数は4つ、コップの数は14。けどここにいるの子供は、あたしを含めて15人だ。しかも哺乳瓶を使う子を除くと、11人分で足りる。

だとすれば、残る3つは――。

全部のコップをざっと見て、あたしは確信を持った。微妙に違うコップのデザインは3種類、ひとつだけのと3つお揃い、あとの残る10個は同じだ。

もう、意味は明らかだった。

まず揃っているほうを子供たちに配る。

「おねえちゃん、これ、もっと！」

「ごめんね、そのお菓子はもうないの。こっちでいい？ それから、ちゃんとミルクも飲もうね」

「うん」

よっぽどおなか为空いてたんだろう。みんな必死なくらいに食べて、飲んでいる。

全員にミルクを配り終えてから、あたしもひとつ手に取った。もちろん、ひとつしかないデザインのものだ。

そして、なるべくさりげなく、犯人たちに声をかける。

「あの……ミルク、飲みませんか？ 余ってて……」

「うん？」

犯人たちの視線がこっちへ向いた。

――上手くやらないと。

ヘタなそぶりを見せたら気づかれて、すべてが水の泡になる。

「余った？　なんでだ」

「すみません。でも、余って……」

たぶん看護師さんが……多く作ったんだと、思うんですけど……」
よく分からないけど困っている、そんな感じが出るように言う。
犯人たちが顔を見合わせた。

「その、置いておいても、悪くなっちゃいそうで……」

あたしが言葉を続けると、もう一度犯人たちが互いに視線を交わした。

「まだ暑くもないのに、悪くなるか？」

「ここは暖房入ってるからな。そのうち酸っぱくなるだろ」

「じゃあ、飲んじまうか」

3人がそれぞれ、コップに手を伸ばす。

「でもよ、NO1から絶対飲み食いするなって、言われてるぜ？」

「そうだな……」

犯人たちが躊躇った。

——ダメかも。

でもそれを見届ける間もなく、子供たちがまた話しかけてきた。

「おねえちゃん、ねむい……」

「おなかいっぱいだし、もう夜だもんね。

——ほら、ここに寝て」

目をこすっている子を寝かせて、毛布をかけてあげる。

「あたしもねむい……」

「うん、いいよ。おやすみ」

子供たちが、次々と丸くなった。

「まったく、ガキは呑気だな」

「でも、ようやく静かになったぜ」

そんな言葉を聞きながら、あたしも最後に膝に顔をうずめる。
時間まで、あと1時間弱……。

Episode: 98

◇ Sylpha

「移る準備、出来たわよ」

例の主任看護婦が、部屋に入ってくるなりそう言った。

「そうですか。二人とも、準備はいいですね？」

タシユアに言われて、私もイマドも無言でうなづく。

「シルファ、これを。イマドは自分の武器があるようですが？」

自分のショートソードを差し出しながら、タシユアが問いかけた。

「あ、はい、俺バッグの中に持ってます」

帰省先からまっすぐここへ来たのが、幸いしたらしい。

まあバッグの中に武器というのは、物騒といえば物騒なのだが：

…。

ともかく手早く荷物をまとめて、立ち上がる。

「部屋は、どこを？」

「あ、待って。そのまえにこれ、持ってきてみたんだけど」

主任が言って差し出したものに、私は絶句した。

「その、これは……」

「制服よ？」

後ろで男子2人が、こらえきれず笑い出したのが分かる。

「患者さんに化けるのもいいけど、このほうが融通が利かない？
そっちの彼も大柄だから、白衣着れば助手に見えと思うし」

返答に窮する。

少しでも作戦が成功するようと、主任なりに考えてのことなの

は分かる。そしてこれが、合理的なことも分かる。分かるのだが……。

「シルファ、せっかくの好意を無駄にするのは、よくありませんよ」
明らかに面白がっている調子で、タシユアが後ろから声をかける。

「そうですよ、先輩。白衣着てりゃ俺ら、堂々と院内動けますし」
イマドの言うことは一見正論だが、こちらも要するに面白がっているだけだ。

必死に私は、理由を探して反論した。

「その、でも、きっと汚すし……返せないと、思う」

「あら、いいのよそんなこと」
主任がにこにこ返す。

「これ、あたしのなのよね。背格好ほら、割と似てるでしょ？
それにこれ、新しく買い足したからそろそろ使うのやめようかな、
って思ってたヤツなの。だから、いくら汚してもだいじょうぶ」
どうも墓穴を掘ったらしく、主任の力説を招いてしまう。

「なにより、これに患者さんたちの命がかかってるんだもの。白衣
の一枚や二枚、ちっとも惜しくないわよ」

崇高な精神に燃えてしまった主任に、さらにタシユアが燃料を注いだ。

「こういう場合の損失は保障対象ですから、病院か学院に言えばなんとかなるはずです。ですからもう一枚、新しいのが手に入るかと」
「あらそうなの？　なら思う存分、使ってもらわなきゃ！」
クールな人かと思っていたが、この主任、意外に熱血な部分があったらしい。

「ほら、そのあなたも、こっちの白衣着てみて」

「ほーい」

イマドが渡された白衣――こちらは医師が着るような羽織るタイプリーに、さっさと手を通した。

「うん、思ったとおりね。これなら職員に見えるわ」

「そうですか？」

なんだか徐々に、逃げ道をふさがれていく気がする。

Episode: 99

「先輩、早くしないと間に合わなくなります?」

「でも……」

逃げ場が見つからなかった。

「……もしかしてこれ、臭ってる?」

「いや、そうじゃないんだ!」

最後の最後で、また墓穴を掘った気がする。

「ならいいけど。」

ともかくサイズのことがあるから、着てみて。合わなかったら、また考えなきゃだし」

「……………」

それ以上拒否できず、私は白衣を受け取った。

「向こうに……行っててくれ」

「そりゃもちろん」

イマドを空いていたベッドから追い出し、カーテンを閉め、服を脱いで白衣に袖を通す。

「どお? あ、似合うじゃない」

カーテンの隙間から覗き込んだ主任が、満足そうな声をあげた。

「いい感じ。でも、髪はまとめなきゃね」

彼女が言いながら、いきなりカーテンを全開にする。

「ちょ、ちょっと、待つ、急に……」

「何慌ててるの? もう着替えちゃってるんだから、別にいいでしょ」

主任はそう言うが、恥ずかしくてたまらない。ただでさえスカートの類は嫌なのに、事もあるうに看護師の格好だ。

見るとタシユアが、これ以上はないと言うほど、面白そうな表情だった。

何か腹が立って、手元の枕を投げつける。

「突入の演習ですか？　まあそれにしては、ずいぶんと的を外しています」

分かっているくせに、そんなことを言う。

「でもマジ、似合ってますよ、先輩」

「え？」

イマドの言葉は、嘘ではなさそうだった。口の上手い後輩だが、今はなんとなく、本当にそう思っているように見える。

「おかしく、ないか？」

「ええ、ぜんぜん。病院の人だっても、たぶん誰も疑わないですよ」
「そうか」

我ながら単純だが、少しほっとする。ここの職員と同じに見えるなら、そんなにおかしくはないのかもしれない。

主任が心配そうに、声をかけてきた。

「ウエストとか、きつくない？」

「ウエストより、胸が……」

腰周りはいいのだが、胸周りがぎりぎりだ。

「――なんか、ちょっと悔しいわね」

「え？」

主任が何か不満そうだったが、理由は分からなかった。

「まあいいわ、ちゃんと着られてるし。

じゃ、そろそろ行く？」

「ああ」

まとめてあった荷物を、もう一度持ち直す。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

どこかへちよつと出かける、タシユアのそんな感じの見送りを背に、病室をあとにした。

Episode..100

見張りの居る廊下を無言で歩き、隣の病棟の、ナースステーション近くの病室へ案内される。

「いちおう、頼んでここを確保したんだけど……どうかしら？ 職員
員の控え室のほうがいい？」

問われて私は考え込んだ。

距離的なことを考えれば、ナースステーションに隣接しているという、控え室のほうがいいだろう。

だがたしか、そこは大勢の職員が避難しているはずだ。だとするとかえって、いろいろやりづらい可能性もある。

「そこは……いま何人くらい、いるんです？」

「そうねえ、あたしの病棟じゃないから分からないけど……たぶん10人以上じゃないかしら。」

うちのほうじゃ若い助手の先生、座れないって愚痴ってたっけ」
「どうやら、かなり狭いようだ。」

「そこって、外見えます？」

イマドが横から、妙な質問をする。

「外？ 見えるわけないでしょ。外が見えるのは病室だけ。ナースステーションも控え室も、仮に窓があったって、見えるのは廊下だけよ」

何を当たり前のことを、そんな調子で主任が答えた。じっさいここは、そういった施設は病室に挟まれて中州のようになっていから、窓がないのは見れば分かる話だ。

けれどイマドの思惑は違ったようで、さらに問いかけてきた。

「ンじゃなくて、その控え室から、ナースステーションって見えま
す？」

「え？ ああ、そういう意味だったの？ 見えないわね。ドアに窓
なんてないし、危ないから閉めちゃってるし」

「そうですか……」

やり取りを聞いて、ここの方が良さそうだと思う。

ここは病室だから、ドアを開けておける。そうすれば程近いナ
ースステーションの内部は、いつでも確認可能だ。

「えっと、それで、移る？」

「いえ、ここで」

控え室からドアを開けて出るのも、ここから職員の格好で突入す
るのも、大差はないだろう。

だとするなら、様子が事前に分かるほうがいい。

「分かった。」

そうしたら……もうこのあと、病棟違うから来られないと思うけ
ど、気をつけて」

「――すみません、ありがとうございます」

主任が背を向けたまま、手だけひらひらと振って、部屋を出て行
った。

それを見送って、時間を確認する。

「あと、少しだな……」

「そうですね」

部屋の位置はちょうどナースステーションの目の前で、位置によ
っては開けたままのドアから、犯人たちの様子が良く見えた。

ただ同時にこれは、私たちの様子も向こうから丸見えということだから、迂闊な話や動きは出来ない。

「俺、白衣脱いで患者のフリしましょっか？」

「すまない、そうしてくれるか？」

小声で言ってきた後輩に、頼む。

私も着替えればいいのだろうが、この緊迫した状況で、何度も着替えているわけにはいかない。

白衣を脱いで私服になった後輩が、ベッドの上に上がりこみ、「患者とそれを看ている看護師」の構図にする。

Episode..101

部屋はもともとは、子供たちが入院していたようだった。

2人部屋で、空いていたらしいベッドが1つ。残りの1つには、おもちゃやぬいぐるみが乗っかっている。

——大丈夫だろうか。

本当ならこのベッドで毛布にくるまって眠っているはずなのに、その子たちは犯人の手元だ。

その恐怖と心細さを思うと、いてもたってもいられなかった。

「——だいじょぶですって。あいつがきっちり、面倒見えますから」
「え？」

唐突なイマドの言葉に訊き返す。

だが説明してもらう前に、意味に気が付いた。

「それなら、いいんだが」

もつともイマドの言うとおり、心配はないのかもしれない。あれでルーフェイアは、小さい子の面倒を見るのは上手だ。

それからふと、不安になる。

「——読んだのか？」

「あ、すいません。気に障ったんなら謝ります。

けど俺、その辺の人の会話が聞こえる感じで、漠然と聞こえちゃうことあって……」

「いや、いい」

わざとやったのでなければ、私も追及するつもりはなかった。

聞こうとしなくても、聞こえてしまうことがある。それと同じレベルなのだろう。

それに今回は彼のこの能力？に、だいぶ助けられている。もし早い時点で外と連絡が取れていなければ、人質の子供たちは、かなり危険な状態に追い込まれたはずだ。

またちらりと、時計に目をやる。

早くその時間になって欲しいのか、それともっと時間が欲しいのか、自分でも分からなかった。

ともかく今のうちに、髪を結い上げる。

「ここの病棟の人と、顔を繋いだほうがいいな……」

長丁場にならないことは分かっているが、まったく面識がないのも問題だ。

「呼びます？」

「ああ」

私の答えに、後輩が呼び鈴を押した

「どうしました？」

ベッドに据え付けられた、院内用の通話石から、応答がある。

「すみません、誰か応援を」

「……え？ あ、8号室ね、分かりました」

少しして、中年の看護師が入ってきた。ここの責任者のようだ。

「お呼びして、すみません。私たちが出て行くより……問題がなさそうな、気がしたので」

「大丈夫、分かっていますよ」

芯が強そうな物言い。だが見かけは小柄で少し太めで、子供たちに好かれそうな人だった。

私が何か言うより早く、この人が再び口を開く。

「子ども達、どうなってます？」

「いえ、それは……」

間違はなく今いちばん心配な事なのだが、私も正確に答えることは出来ない。

それでも分かる範囲で、特にルーフエイアのことを教えると、この人がほっとした表情になった。

「さすがにシエラの方は、すごいですねえ。あんな小さい子まで、犯人と対等に渡り合うんですから。」

おかげであの子たちに、食べ物が渡せて良かったですよ」
「あ、はい……」

同じ学院生でも、ルーフエイアは間違はなく例外なのだが、それを説明しても分からないだろう。

Episode..102

「それですみません、病棟の様子を……教えて、いただけませんか？」

だいたいのことは例の主任から聞いているが、あくまでも間接情報だ。ここの担当から直接聞くのに、勝るものはない。

「病棟の様子……でしたらいつそ、私と一緒に回りますか？」

「え、できるんですか？」

驚いて聞き返すと、この人がニコニコと笑って言った。

「だいじょうぶですよ。私ね、騒ぎになってから何度も、病棟の見回りしますから。」

だってほら、患者さんが心配でしょう？」

患者思いといえばそれまでだが、この状況下で見回りが出来る精神力に舌を巻く。

「そうしたら……お願い、できますか？」

「はいはい、喜んで。じゃあ行きましょうか」

連れられて、病室が出る。

この人はもう慣れているらしく、犯人に会釈しながら、手早く病棟を回っていった。

その後ろから歩きながら、敵の配置を確認する。

——言っていた、とおりだな。

向こうの病棟の主任から聞いてはいたが、ほぼそのままだ。

廊下に4人、昇降台前にそれぞれ1人ずつ。加えて両方のナース

ステーションに、3人づつと、子供たちを見張っている3人。これに交代要員も加えると、そうとうな数になるはずさ。考えながら歩くうち、気づけば元の場所に戻ってきていた。

「じゃああなた、悪いけどあの患者さん、いつ急変するか分からないから頼みますね。」

なにしろ、持病のある方だそうだから」

「え？」

戸惑う私に、この士長がいたずらっぽくウインクする。瞬間気がついて、私は言葉を返した。

「すみません、何かあったら……応援を呼びます。」

みなさんは、控え室の中で」

「ええ」

もう一度微笑んで、士長は病室を出て行った。

「俺、もしかして重病人ってヤツですか？」

「そうらしいな。おとなしく寝てたほうが、いいんじゃないか？」
さっきタシユアにいろいろ言われたのが、どこかで引っかかっていたらしい。後輩につい、そんなキツイことを言う。

「んじゃ俺寝ますんで、あとお願いします」

「いや、それは違うだろう……」

自分でも少々情けないのだが、思わずそんな否定の言葉になってしまった。しかもそれ以上、反論の言葉が見当たらない。

こんな格好をするハメになったり、後輩に言い負かされてしまったり、なんだか今回は散々だ。

疲れてため息をつきながら、イマドに言う

「――カーテンを、閉めてくれないか？」

「へ？ いいですけど」

イマドにカーテンを閉めてもらったところで、タシユアから借りた短剣を手にした。

鞘を外す。

「先輩、まだちよい早いんじゃない……」

「いや、そうじゃない」

ベッドの傍らへ降りて、借りた白衣を見た。

「先輩？」

イマドが怪訝な顔をする。

それには答えず、私は短剣を裾に当てた。

一気に切り裂く。

Episode..103

「せ、先輩！」

「こうしないと……動けない」

借りたものにこんなことをするのは気が引けるが、そのままでは間違いなく、動きが制限されてしまう。

それでもなんとなく気落ちしながら、私はベッドに腰掛けた。

——後で、謝らないと。

状況が状況だし、あとで新しいものを返せるのは分かっているが、他人の物にこんなことをするのはやはり楽しくない。

その私へ、おそろおそろといった調子でイマドが声をかけた。

「あのー」

「——なんだ」

自分の声が、少し尖っているのを感じる。

「いや、その……なんつか、えーと……」

後輩の言葉は、妙に齒切れが悪かった。

「はつきり言ってくれないか」

「『はつきり』つつわれても……」

まだ言おうとしない彼に、少々呆れる。

——これから、突入があるというのに。

だが、すぐに思い直した。

イマドは確かに学院生だが、上級傭兵どころか候補生でさえない。

当然、こういった場合の訓練など、受けているわけもなかった。
なのに『落ち着け』というほうが、ムリというものだろう。

「問題があるなら、今のうちに言ってくれ。些細なことが――命取りになる」

「――やっぱ、いいです」

「？」

今ひとつ、意味が飲み込めなかった。

「何かあってからでは、遅いぞ」

「けど、言ったらよけい命取りになりそうなんで」

尚更分らない。

私がなおも訊き出そうとすると、イマドはいやに慌てて言い繕った。

「その、終わったら言いますって。たいしたことじゃないんで」

「そうなのか？ それなら、いいんだが……」

何か引つかかる。だがそれ以上聞いても後輩は答えようとせず、些細なことだと言い張った。

――まあ、いいか。

そこまで言うのなら、あとでいいことなのだろう。

なんとなく息を吐いて、視線を落とす。

と、何かの音がして、慌てて私は顔を上げた。

「な、何をしているんだ！」

「何って……写影ですよ？」

目の前で後輩が、写影機を構えている。

「ダメだっ！　こんな、こんな格好……」

慌てて隠したが、イマドは気にしなかった。

「いいじゃないですか。めったに着るもんじゃないし」

「だからだっ！」

あまりにも無神経すぎる。

だいいち私がこの制服を着るのを、嫌がっていたのは見ていたはずだ。

「でも、この写真見たら、タシユア先輩喜ぶますよ？」

「……え？」

思いもしなかったことを言われて、一瞬思考停止する。

その間にまた、後輩が1枚撮った。

「てか先輩、カノジヨの写真もらって、喜ばない男とかいませんって」

「そ、そうなのか？」

考えたこともなかった。

私はこんな格好はイヤで仕方がないが……タシユアは喜ぶのだろうか？

Episode..104

「これでよし、っと」

もう2枚ほど撮って気が済んだのか、イマドが写影機をバッグにしまった。

「あとで先輩にも、ちゃんと渡しますから」

「いや、いい……」

撮られるだけでもイヤなのに、持つなど考えたくもない。

「そです？」

っと、あと少して時間ですね」

「——そうだな」

彼の言葉どおり、時計の針はもう、まもなくといったところを差していた。

「準備は、いいのか？」

「だいじょぶです」

私ももう一度、タシユアの短剣を手にとって確かめる。

——いける。

揺るぎない自信が、自分のうちにある。

「予定通り、私が先に行く。後から来て、フォローしてくれ」
「了解」

時を待つ。

時計の針が、一秒づつ時を刻んだ。
残り時間がほとんど無くなる。

「行くぞ」

短剣をタオルで隠して持ち、立ち上がった。

イマドも死角になる壁際に張り付き、今まで隠していた持参の長剣――旅行バッグに巧妙に隠してあった――を、鞘から抜く。

私がまず部屋から出て、ナースステーションの前まで行った。まっすぐ中まで入って、犯人たちのほうへ行く。

「なんだお前、ここはダメだと言ったろう」

「用があるんだ」

言って構わず近づく。

「止まれ！ 死にたいのか！」

銃口が向けられるが、私はさらに一步出た。

予期しなかった異変に、その辺に座っていた犯人たちも、立ち上がってこっちへ来る。

「その控え室へ行け！」

「用があると言っただろう」

取り合おうとしない私に、犯人たちが浮き足立つ。

「言うことをきかないと――！」

男の言葉の最後が、爆発音にかき消された。外で待機していた上級傭兵が、非常口を爆破したのだろう。

それと同時に、幾つものガラスが割れる音もフロアに響く。

「な、なんだ？」

犯人たちがうろたえて、どこから音が聞こえたのかと首を巡らした。

大きな隙が出来る。

瞬間私は動いた。

一気に手近な相手の間合いに踏み込みながら、腹部の急所へ蹴りを叩きこむ。

「――?!」

「――!!」

別の男たちが、何故か嬉しそう?な表情で私を見ているのに気づいたが、考える暇はなかった。

Episode..105

最初の蹴りで思わず身体を折り曲げた相手の背に、容赦なく短剣を突き立てる。

なにしろ自分や、他の人質の命がかかっているのだ。わざわざ手加減して、リスクを増やすわけにはいかない。

イマドもいつの間にかナースステーションへ紛れ込んで、ひとりを切り伏せていた。

――やるな。

あのルーフエアの相手が、勤まるだけのことはある。

廊下のほうも上級傭兵が制圧し始めたらしい。怒鳴り声や叫びに混ざって上がる、クリアの報告を耳にしながら、私はまだ残る犯人へと動いた。

相手が慌てて、持っていた連射銃を構える。

「先輩、そのまま前っ！」

同時に聞こえたイマドの声――声だったのだろうか――に、ためらわずに突っ込んだ。

まさか真っ直ぐ来るとは思っていなかったのだろう。銃を構えた男の顔に、驚愕の表情がのぼる。

その男の手元で、銃が暴発した。

――イマドか？

どうやったのかは、まったく分からなかった。銃に仕込まれている炎石は、何重にも暴発しないように防御がかかっているのだ。しかも呪文の詠唱も、全く聞いていない。

だがともかく、敵は銃を取り落とした。こうなってしまうばもう、撃たれる心配はほとんどない。

突っ込んだ勢いを殺さぬまま懐へ飛び込み、棒立ちになっている敵の咽喉へ真横に剣を振るった。

悲鳴より早く、血しぶきが上がる。

「これで、全部か？」

私の何気ない言葉に、イマドが答えた。

「いえ、もひとり奥の部屋に。」

――今、燻り出しますんで」

「え？」

疑問はすぐに氷解した。

ナースステーションから続く小部屋、扉の向こうで絶叫が上がり、炎に包まれた男が飛び出してくる。

「イマドっ！」

「下手に部屋に突っ込むより、いいですって。」

だいいちこいつ今まで、何度もこうやって女子供まで殺してますからね。少しは同じ目に遭わせてやんねえと」

「そうなのか……」

かといって、このままにしておくわけにもいかない。例え死にかけた相手でも、時間を与えれば何をするか分からないのだ。

「――借りるぞ」

私はイマドから長剣を受け取った。
とどめを刺すために振り上げる。

と、嫌な予感が私を捕らえた。次いで幾つものことが、立て続けに起こる。

この男の焼けた手が懐へと伸び、私の長剣が振り下ろされ、何かが犯人の手からこぼれ落ち――。

「やべえっ！」

「――シルファっ！」

「いけない、その石っ――！！！」

イマドの、タシユアの、それに倉庫から出てきたらしいルーフェイアの声が重なる。

床に落ちかけた石が何故か宙に留まり、淡緑色の光を放ち始めた。

Episode..106

◇Tasha Side

シルファとイマドが出て行った病室で、タシユアは軽く身体をほぐしていた。妙な経緯でずっと寝ていたために、いまひとつ身体の切れない。

（——なんともないのですがねえ）

たかが熱を出したただけだというのに、シルファは騒ぎすぎだ。とは言え点滴が功を奏したのだろう、その熱も今は下がっていた。念のために、身体の動きを点検する。

（問題なさそうですね）

完全とはいえないが、まずまずだった。少なくとも3人程度を相手にするには、なんの心配もない。

（この騒ぎが片付いたら、帰りますか）

熱が下がった以上、医者としてすることはないはずだ。それにこのどさくさなら、学院へ戻ってしまってもどうということはないだろう。

——それにしても。

いくら熱があったとはいえ、倒れるなど論外だ。しかもシルファだけならまだともかく、後輩たちまでいる前で倒れているのだから、我ながら呆れるしかない。

以後こんな真似はするまいと——それでもシルファは気づくだろうが——思いながら、タシユアはもう少し身体を慣らした。時間が過ぎる。

（そろそろいいですかね？）

まだわずかに間があるが、タシユアは動き始めた。病室を出て、ナースステーションのほうへと歩いていく。

途中、誰も彼を見咎めなかった。

（まったく、何のための見張りやら）

もったもこれは犯人がどうこうと言うより、タシユアが上手と言うべきだろう。

なにしろかつて戦場にいた頃は、敵の鼻先をかすめて移動しては背後に回るようなことをやっていたのだ。この程度の見張りの目を躲すなど、造作もない。

そのまま真っ直ぐナースステーションへ向かい、構わずタシユアは中へ入っていった。

もう見張りの交代が出たあとのため、犯人とおぼしき男たちは3人だけ。他に病院スタッフもステーション内にいたが、あまりにも何気なく入ってきた彼に、誰も反応しきれない。

タシユアは音も気配もなく、たまたま2人並んでいた犯人たちへ、やや後方から近づいた。

至近距離まで来て、ようやく相手が反応する。

「お、おま——?!」

皆まで言わせず、容赦のない手刀の一撃が敵の首に見舞われた。鈍い音が響く。

「おや、これしきで折れましたか？

テロリストなどと大層なことを言う割には、ずいぶんとヤワです
こと」

平然とうそぶく様子に、残る犯人たちがパニックに陥った。

「き、貴様——」

「あなたにそんな呼ばれ方をする筋合いは、ありませんね」

言い終えた時には既に、抜き手が相手の両眼に入った後だ。

更に犯人が慌てて顔面を押さえようとしたところを、空いている手で無造作に腕を掴み、折る。

再び鈍い音がして、肩が碎けた。

「さて、残るはひとりですか」

喚きながら暴れる敵を、粗大ゴミのように放り出す。

そして尚も悠然と振り返るタシユアに、最後の犯人が後ずさった。

Episode..107

「あ、わ……」

「おやおや、最近のテロリストは人の言葉も喋れないようですね」
冷たい死神の笑みが、彼の顔にのぼる。

「――最後のゴミも、片付けておきますか」

「うわぁっ！」

たまらず男が叫び、ようやく銃をタシユアに向けて構えた。
必死に照準を合わせている。

――だが。

「どこを見ているのです？」

「！！」

既にタシユアの姿はそこにはなく、間近で銃身を掴んでいた。

「物事は手早く片付けないと、命取りですよ」

言いながら、手加減なしの蹴りをテロリストの腹部へ叩き込む。

身体の急な動きに着いていけなかったのだらう、引き金にかける
れていた指がちぎれ、男は後方へと吹っ飛んだ。

ちょうど後ろにあった機器類に突っ込んで、動かなくなる。

「すみませんね。少々具合が悪くて、力の加減が効かないものです
から」

もっとも言われた相手は聞くどころではない。手ごたえからして、
内臓の1つや2つは破裂したはずだ。

「……張り合いがありませんね」

あっさりと倒されてしまったテロリストたちを見ながら、タシュアがつぶやく。彼にかかつては、テロでの突入も暇つぶしか憂さ晴らし程度だ。

その時になってようやく病棟内に爆発音が響いた。予定通り上級傭兵が突入を開始したようだ。

少し奥のほうでは、病院のスタッフが蒼白になっていた。容赦のないタシュアのやり方に度肝を抜かれたらしい。

（――まあ、仕方ありませんか）

向こうは助けるのが仕事だ。いくら必要性を説明したところで、こういった行為は受け入れられないだろう。

「誰か、ロープをお願いします」

声をかけられてやっと、スタッフが我に返ったらしい。どこからか出された紐が、おそろおそろといった調子で差し出された。

「ありがとうございます」

「い、いえ……」

ずいぶんな怯えようだ。

（別に無関係な人間に、何かしたりしないのですがねえ）

とはいえこれも、今言ったところで理解はしないだろう。

そんなことを考えながら、テロリストたちを縛り上げる。

「上級傭兵が来たら、引き渡してください。それとできれば、麻酔漬けにでもしておくように。」

――隠し持った武器で何をするか、分かりませんからね」

スタッフたちを脅しておいて、タシュアはナースステーションを出た。

廊下を抜けてもうひとつの病棟へと向かう。

「——おやおや」

シルファが制圧しているはずのナースステーションは、思った以上の惨事になっていた。リーダーらしき男が火だるまになっている。

「イマドっ！」

彼女が鋭い声を出しているところを見ると、やったのはイマドの方らしい。

だがこの後輩も、見た目より遥かに食わせ物だ。

Episode..108

「下手に部屋に突っ込むより、いいですって。

だいいちこいつ今まで、何度もこうやって女子供まで殺してますからね。少しは同じ目に遭わせてやんねえと」

「そうなのか……」

平然と言い放たれて、シルファが納得？してしまった。

（ですが、危ないですねえ）

院内は基本的に、火気厳禁のはずだ。

尚もどうするのかと見ていると、シルファがイマドから長剣を受け取った。

「――借りるぞ」

早いうちにとどめを刺そうというのだろう。以前の教訓を、きちんと彼女は覚えている。

刃が振り上げられた。

（――?!）

瞬間、何か嫌なものを感じる。

懐へと動いたテロリストの手の内に――。

「シルファっ！」

「やべえっ！」

「いけない、その石――!!」

タシユアと後輩2人の声上がり、ほぼ同時に長剣が振り下ろされた。

だが、遅い。

男の手からこぼれ落ちた石が、淡緑色の光を放ち始める。

「早くここから離れなさい、呪石です！」

「なにっ?!」

呪石は要するに、呪文そのものを込めた魔力石だ。作るのは難しいが、放つと周囲の魔力を取り込んで呪文を発動させるため、威力の桁が違う。

シルファたちもすぐに事態を把握し、動いた。

「ルス・バレーっ！」

「エターナル・ブレスっ！」

手早く二人が呪文を唱え、防御体制を整える。

その間にイマドが前へ出、魔法を放つかのように手を突き出した。
(これは……?)

それまで明るさを増す一方だった石からの光が、不安定に明滅している。

「早く、今のうち……！」

力技をかけながらやっと言った、という後輩の様子に、タシユアは状況を悟った。

稀に呪文詠唱という媒介なしで、直接魔力を扱える人間がいる。
イマドもそのひとりなのだろう。

——食い止められるとは思えないが。

一度解き放たれた呪文は、そう簡単に押さえこめはしない。
だがこのおかげで、発動までの時間が引き延ばされていた。
即座に手もちの暗黒魔法を唱える。

「無念の声が響く闇の底にて、其は黄泉の回廊を迷わん。開け、黒き審判の門――」

空間に亀裂を作り、対象を異次元へと飛ばす魔法だ。これで石自体をこの世界から放り出してしまえば、たとえ呪石でも被害はない。

が、上手く空間が切り裂けなかった。

発動寸前の呪石のエネルギーが、邪魔をしているらしい。

（――させるものですか）

再度唱えなおす。

テロリストの放った石ごときに屈するなど、タシユアのプライドが許さなかった。

ほんの一呼吸にも満たない間に、もう一度石を捉え――。

「ダメだっ、もうもたねえっ!!」

それまでどうにか押さえこんでいたイマドが、悲鳴をあげた。にわかに淡緑色の光が強くなる。

（間に合いますか――?）

その時、不意にルーフェイアが動いた。

Episode..109

◇Rufair

ひざに顔をうずめていたあたしは、そっと視線を上げた。
周囲を覗う。

小さい子たちは、睡眠薬のせいでみんな眠っていた。これなら派手に動いても、この子たちにとんでもないものを見せないで済むだろう。

時計の針は、もう11時の2分ほど前を差している。

そっと手を動かして、太刀の柄にかけた。

息詰まる時間。

確かなのは、ここにいる見張りを倒さなければ、この子たちの命が危ないということだけだ。

3人とも結局ミルクは飲まなかったから、全力で行くしかない。

犯人たちに気づかれないよう、じりじりと体勢を変えた。

ほんの僅かのはずなのに、とても長い間待って……。

――爆発音。

「なんだ？ 誰か見て――」

その時にはもう、あたしは魔法を唱え終わっていた。

「――ホズ・ブリンドっ！」

闇を呼ぶ呪文に、3人が視界を奪われる。

「な……?!」

見張りがパニックを起こした時にはもう、あたしは抜刀して立ち

上がりかけていた。
ためらうことなく刃を振り下ろし、次いで鳩尾へ切っ先を突き入
れる。

――まず、ひとり。

絶叫が上がり、リーダー格の見張りが倒れた。

「誰だ、誰がやられたっ?！」

「ちきしょう、明かりを――っ!!！」

太刀を引き抜きながら振り向いて、先に遠いほうの見張りを薙ぎ
払う。相手の両腕が払われ、腹部が裂けた。

さらに返す刃を振り下ろして、残った見張りを首あたりから袈裟
切りにする。

最後にひとりづつ、念のために心臓を突いて――それで終わりだ
った。

泣きたくなる。

――なんで、こんなことばかり上手いんだろう?

3人の大人を倒すのに、僅かこれだけなんて……。

それからあたしは首を振った。

今は……まだ終わってない。

もう一度部屋を振り返って、危険がないことを確かめる。

――大丈夫。

見張りは全員絶命している。ここは後は、看護師さんたちに任せ
るだけだ。

あたしはそっと扉を開けて、倉庫を出た。すぐ隣のナースステ―

ションへと向かう。

フロアでは次々とクリアの声が上がっていて、上級傭兵の先輩たちが順調に制圧しているのが分かった。

その中、急いでナースステーションに入り込む。

最初に目に入っただのは、シルファ先輩だった。何故かイマドの長剣を振り上げている。

しかもどういうわけか、相手にしているテロリスト——リーダー——だったはずだ——には炎がまとわりついていた。

——イマド、かな？

なんとなく思う。

彼は普段はそんなふうに見えないけど、戦闘となると容赦がない。その時、頭の中で警鐘がなった。

何か、大変なことが——。

Episode 110

シルファ先輩が剣を振り下ろし、テロリストのリーダーの手から零れ落ちた石が、淡緑色の光を放ち始める。

「やべえっ！」

「――シルファっ！」

あたしもほぼ同時に、思わず叫んでいた。

「いけない、その石っ――！！！」

一瞬の間を置いて、タシユア先輩が言葉を継ぐ。

「早くここから離れなさい、呪石です！」

「なにっ！」

シルファ先輩が急いで魔法を唱え始める。

あたしも急いで魔法を発動させた。

「ルス・バレーっ！」

「エターナル・ブレスっ！」

石の気配から、発動するのは最上位魔法みたいだけど、これならかなり減衰させられる。

その間にイマドが前へ出て、魔法を放つかのように手を前へ突き出した。

「早く、今のうち……！」

淡緑色の光が不安定に明滅を始める。

――こんなこと、できるなんて！

詠唱なしで魔力そのものを扱える人がいる話は、聞いたことがあった。というか、サリーア姉さんがそうだと言われている。けど、まさかイマドが……。

「無念の声が響く闇の底にて、其は黄泉の回廊を迷わん。開け、黒き審判の門——」

タシユア先輩はそんなことに構わず、切り札の暗黒魔法を唱え始めた。確か異次元への穴を開けて、対象を送り込んでしまう呪文だ。でも……時間がかかっている。相手が発動しかけの石だからなんだろう。

——これじゃ、間に合わない。

何故か、そのことがはつきりと分かった。

何か、何か方法は……？

（——力が、要るのか？）

突然誰かが話しかけてきた。違う。

「誰か」じゃなくて、あたしがよく知っている相手だ。

（要るわ！）

心の中で叫び返す。

話しかけてきたのは生身の人間ではなくて、産まれる前からあたしと一緒にいる、あの「精霊」だ。

（力が要るの！ どうすればいいのっ?!）

（私と替わればいい）

（——わかった）

彼女の明け渡しの要請に、あたしはためらわなかった。

ここで彼女に全てを渡したら、二度と戻ってこれないかもしれない。そのくらい危険なことだと言うのは、なんとなく分かった。

——でも。

あたしや先輩たちは魔法があるから、呪石が発動しても防げる。だけど看護師さんやあの子たちは——このままじゃ助からない。

（お願い、早くっ！）

（——心配ない）

精霊のはずの彼女が請け合う。

直後、額の増幅器がぱちぱちと音を立ててオーバーロードし、あたしの意識は途切れた。

Episode..111

◇I mad

それまで静まり返ってたフロアに、いきなり爆発音が響いた。部屋を飛び出す。

シルファ先輩が手近な野郎に蹴りを叩きこんでるのが、目に入っ

た。

「あ、すげえ」

思わず言葉が出る。

ズボンならともかく、豪快に切り裂いたあの制服で蹴り入れてんだから、どうなったかは推して知るべしってやつだ。

しかも当の先輩、まるっきり分かつちやいねえし。

連中がやたら嬉しそうだったのに、一瞬怪訝そうな顔をしただけで、あとは普通どおり動いてる。

ただ腹立つことに、いちばんいいポジションにいたのは犯人連中のひとりだった。

――ってあいつ、ここがどこだか忘れてやがるし。

今の蹴りをいちばんいい場所で見物？してたせいで、このヤロー思いつきり隙だらけだ。

俺はさっさと近寄って、背中から切り倒してやった。当然致命傷だ。

っつーか、これで倒せねえようじゃ学院生辞めるっきゃない。その間にシルファ先輩も、蹴りいれたヤツに短剣突きたててあっさり1人倒す。

次いで間髪入れず、残るヤローへ先輩が動いた。

さすがに、さっきの「いい場面」から立ち直ったんだろう。そいつがまともな表情になった。

とっさにフォローで魔法を唱えようとする。

けど、いいものを見つけて止めた。俺にとっちゃこのほうが早ええし、確実だし、なにせ簡単だ。

「先輩、そのまま前っ！」

俺の声（違ったか？）に、先輩がそのまま突っ込む。

ヤローのほうは真っ直ぐ来るとは思ってたなかったせいで、馬鹿みたいに口開けて動きが止まる。

「一生止まってるっての」

――行け。

相手の懷で、小さいけど炎がはぜた。

思いもしなかった暴発に、ヤローが銃を取り落とす。こうなっちまえばもう、撃とうたって撃てない。

先輩のほうはそのまま真っ直ぐ懷へ飛び込んで、真横に短剣を振るった。

「お見事♪」

綺麗に咽喉をかつさばかれて、悲鳴より早く血しぶきが上がる。

「これで、全部か？」

先輩が何気ない言葉に、俺は答えた。

「いえ、もひとり奥の部屋に」

リーダーのヤローが潜んでるのが、おもいっきり丸見えだ。

「――今、煙り出しますんで」
魔法にしようかとも思ったけど、結局さっきと同類のやり口で行く。

絶叫が上がった。

「イマドっ！」

テロリストが火だるまで出てきた光景に、さすがにシルファ先輩が鋭い声を出す。

「下手に部屋に突っ込むより、いいですって」

これでケガでもした日にゃ、目もあてらんねえだろうし。

「だいいちこいつ今まで、何度もこうやって女子供まで殺してますからね。少しは同じ目に遭わせてやんねえと」

つつーか、それでもこのヤロー、まだお釣りが来るはずだ。

「そうなのか……」

幸いシルファ先輩も納得する。

それから、俺の長剣のほうへ手を出してきた。

Episode..112

「――借りるぞ」

俺も黙って差し出す。燃えてるヤツにとどめ刺すにや、やつぱ長剣のほうがいい。

先輩が剣を振り上げる。

――って待てっ！

こいつが、懷から出そうとしてるの……！！

容赦なく先輩がとどめを刺したにもかかわらず、石が淡緑色に輝き始めた。

俺とどっから来たタシユア先輩、それに倉庫から出てきたルーフェイアの言葉が重なる。

「やべえっ！」

「――シルファっ！」

「いけない、その石っ――！！」

ルーフェイアのヤツが言うとおりに、こんなもんが発動しちまったら良くてフロア全体、悪けりゃ病院自体が吹っ飛ぶはずだ。

「早くここから離れなさい、呪石です！」

「なにっ?!」

まずルーフェイアのやつが、続いてシルファ先輩が、手早く魔法を唱えた。

「ルス・バレーっ！」

「エターナル・ブレスっ！」

その間に俺は前へ出る。

——出来るか？

いや、ムリでもやるしかねえ。

石の魔力に俺を合わせて、強引に押さえこんだ。

淡緑色の光が不安定に明滅し始める。

どういうわけか俺は、生まれつきオプシヨン？が幾つかついてた。
例の念話能力もそうだ。

なかでもいちばん重宝してるのが、魔力を外からコントロール——
まあある程度だけだけど——するやつだった。

っても相手がこれだけデカイ魔法じゃ、瀬戸際でほんのちよつと
食い止めんのが精一杯だ。

なにをどう考えたって、そう長くはもたねえだろう。

「早く、今のうち……！」

タシユア先輩がなんだか聞いたことのねえ魔法を唱え始めた。

「無念の声が響く闇の底にて、其は黄泉の回廊を迷わん。開け、黒
き審判の門——」

けど、なかなか発動しない。もともと手間取る魔法なのか、それ
とも相手が発動しかけのせいなのか……。

俺のほうの体力と魔力が、凄え勢いで削られてく。

立ってるだけで、ほとんど目いっぱいだ。

「ダメだっ、もう持たねえっ……！」

そんな時だった。

——ルーフフェア？

いきなりこいつが、俺と石との間へ飛び出す。

「な——?!」

ルーフェイアのやつが動いたことより、一瞬見せた表情に俺は凍りついた。

——あいつじゃねえ。

見かけはそのまま、でも完全に中身は別モン……。

不意にその姿が、石と一緒に消えた。同時に俺もいきなり、かかっていた圧力から開放される。

「ルーフェイアっ!!」

膝をつきそうになりながら、必死にあいつの気配を探った。

どこにいる? どこへ行った……。

「——上かつ!」

遥か高みにあいつを見つけろ。

倒れそうだったのも忘れて、俺はナースステーション飛び出して、階段を駆け上がった。

Episode..113

◇Loa

あ、派手に始めたなあ……。

野次馬よろしく病院のほうを眺めてたあたしの耳に、爆発音が届いた。

けどまあ、こゆ時の突入は派手にやるのがセオリーだから、当然と言えば当然。むしろ閃光弾が使えない分、大人しい部類にはいるかもしれない。

ちなみに今回、ボクの出番は派手さに欠けた。ルーフエが潜入したあと、上級傭兵とシューマー間の連絡役をしてただけだ。

——ま、いいんだけど。

言われたことはちゃんとこなしてるんだから、これで落ちたら採点システムがおかしい。

でもそんなことより、あの子のほうが心配だった。

「ルーフエ、どしたかな？」

「心配ありません、グレイス様ですから」
執事だかなんだかみたいなおじさんが、きっぱり断言する。

「でもさ、世の中万が一ってことも……」

「グレイス様に、それはあり得ませんので」
やけに自信たっぷりだ。

まあ確かにあの子のことだから、そう簡単にはかすり傷も追わないだろうけど……。

だけど世の中ってば、何があるか分からない。

ただ突入なんて、始まっちゃえば短時間で終わる。と言うか、それ以上かけてるようじゃ話しにもならない。

そんなことを思いながら突入の行く末をしばらく見物してた時、突然光が閃いた。

「なに、あれ……？」

閃いたなんてもんじゃない。

なんの前触れもなしに上空に現れた光球が、辺りを真昼のように照らした。

くつきりと地面に影が落ちる。

「私は初めてですね、ああいうものを目にするのは」

「普通そうだと思うけど」

正体を見極めようと、手を翳しながら仰ぎ見る。

——え？

目を細めながら見たのは、ちよつとやそつとじゃ信じられないモノだった。

だってどう見てもあの空にいるの——人だ。

「人、のようですが」

おじさんが冷静に指摘する。

「ですけど、あれは人じゃありませんわ……」

連絡役のシュマーのお姉ちゃんが、呆然とつぶやいた。

「んじゃ何？ 人のカッコした人外？」

「それは……」

お姉ちゃんが口籠もる。

だけどゆっくり降りてくる「それ」は、何度見ても人で……。

「シルファ先輩かな？」

確か先輩去年の海竜騒ぎで、こんな技を披露？してくれてたはずだ。

でもまだ、何かが腑に落ちない。

そこへ、恐ろしい言葉が放たれた。

「恐らく、グレイス様かと」

「えっ——?!」

けど、けど、人があんなになっちゃったら……。

背筋が寒くなる。

でもこの場所からは——本当は何が起こっているのか、知りようもなかった。

Episode..114

◇A11

イマドは2段おきに階段を駆け上がった。少し遅れてシルファとタシユア——これは単なる気まぐれだろう——も、上がってくる。

途中途中の踊り場に設けられた窓から、時ならぬ真昼の光が差し込んでいた。ルーフェイアと入れ替わったかの精霊が、呪石に対処しているらしい。

そのまま3人は機械室や資料室の並ぶ最上階を通り過ぎ、屋上へ続く扉の前に立った。

「——開けとけよっ！」

がっちりとかギがかけられた扉に悪態をつきながら、イマドはキツトからピッキング（鍵開け）用のツールを取り出す。

彼が鍵穴にツールを差し込んでいじると、ものの30秒ほどで鍵はあっさりと降伏した。

かちりという音と共にシリンダーが回り、次いで扉が開く。

「ルーフェイアっ!!」

屋上へと飛び出してイマド叫んだが、答えはなかった。だが依然、煌々たる光は差している。

「どう、なったんだ……?」

「私に訊かれても困ります。まあ呪石の件が片付いたのは、間違いないでしょうが」

そんな会話を交わすうち、徐々に光が薄れ始めた。

「——ほう」

虚空を見ていたタシユアが、面白がるような声をあげる。

シルファも驚きの表情になった。
ゆつくりと、少女の形をした白光が降りてくるのだ。

「あれは、私と同じ……？」

シルファの唇から言葉が漏れた。自分が似たようなことをするだけに、直感的に感じ取ったのだろう。

生まれ持った資質も絡んではくるが、精霊と所有者との相性が飛びぬけていい場合、通常の念話を遥かに超えて憑依状態に持つていくことが出来る。

シルファも所有の精霊ヴァルクュリアとはこれが可能で、いざと言う場合の奥の手になっていた。

「微妙に違うようではありますがね」

タシユアが横から言葉を添える。

イマドはその間無言だった。

ただ真っ直ぐに、舞い降りてくる「それ」へ視線を向けている。

やがてそれは、床から身体半分ほどの高さでぴたりと静止した。
ルーフェイアであったはずの身体から、光が舞い上がり零れ落ち、揺らめく。

「乗っ取られた……というところですか」

シルファが憑依状態となった場合も身体は淡く光を放つが、目の前の「それ」は、光が少女の姿を取っているという有様だ。

だが「それ」は答えず、辺りに沈黙が降りる。

深い碧に輝く瞳が3人を一瞥した。

不意に言葉が放たれる。

「――相変わらず、か」

同じ声でありながら、その響きはルーフェイアのものとは似ても似つかなかった。あの少女は繊細で儚げだが――この存在の口調は傲然たる響きを持っている。

「グレイスも大したものだ。

人間など――早々に見捨ててしまえばいいものを」

「では、そのくだらない存在に手を貸すあなたはどのようなのです？」
タシユアがすかさず、毒舌を返した。

「手を貸すつもりはない」

「ほう、では、今の所行は手を貸したわけではないと？」

「私はグレイスの望みには従う。ただそれだけだ」

人とは異なる存在であるがゆえだろう、彼女も淡々と言葉を返す。

Episode 115

「それを助力とは言わず何というのです？」

「その言葉を適当と思うなら、それで構わぬ。いずれにせよ、私はそのように在るだけだ」

「ずいぶんとつまらない存在ですこと。」

そういうのを、奴隷根性というのですよ」

タシユアの痛烈な皮肉。

だがそれでも尚、彼女の表情は変わらなかった。

「――面白いことを言うな。だがすべての存在は、所詮何かの奴隷であろう？」

こちらは皮肉などではなく、ただ単に事実を述べているだけ、といったふうだ。

「私は本来そのように創られたがゆえ否定はせぬが、そなたとて全てのものから、完全に自由ではないはずだ。

他人、時、あるいは自身の望み……いずれにせよ、あらゆるものは何かに支配されているのではないのか？」

「奴隷は支配されるものですが、支配されるものを奴隷とは呼びませんよ。」

タシユアの間髪入れずの切り返しが、興味を惹いたらしい。「彼女」がどこか面白がるような雰囲気をもとった。

「瑣末なこととも思えるが――なるほど、違うと言えば違いうだろうな」

このやりとりを、明らかに楽しんでいる。

一方のタシユアも、どちらかと言えば楽しそうだ。あるいは双方、

どこか似ているのかもしれない。

「私には、全く違うように見えますが？」

「……いい加減にしてもらえませんか？」

延々と続きそうな気配の応酬に、とうとうイマドが割って入った。

「人間がどうか、てめえらがどうか、俺はンなの構わねえ。

——ルーフェイアはどうしたっ！」

拳で殴りつけるかのような言葉が、叩きつけられる。

不思議なことに、「彼女」の表情がふと緩んだ。

「少年よ、その躊躇いのなさを大切にすることが良い。それがいつか、道を拓くだろう」

「そりゃどうも。」

けど俺が訊いてんのは、そんなことじゃねえ」

イマドの言葉はあくまでも刺々しい。

「——そうだ、それでいい」

満足げに「彼女」は頷いた。

そしてさらに言葉を続ける。

「案ずるな、グレイスならば髪の毛一筋たりとも、傷ついてもおらぬ。」

我が内にてただ——眠っているだけだ」

「だったらさっさと、元に戻せっ！」

「そうすることにしよう」

意外なことに、「彼女」はあっさりと同意した。

虚空にあった身体が舞い降り、両足が床を踏みしめる。

それから再び、「彼女」は3人に視線を向けた。

「身体にかなり負荷がかかっている。休ませてやるが良い」
まぶたが閉じられ、少女の身体がゆっくりと崩おれる。

「ルーフェイアっ！」

イマドが飛び出し、華奢な身体を抱き止めた。

先程までの傲然たるものは既に無く、儂げで妖精のような雰囲気
の――いつものルーフェイアだ。

その目がうつすらと開かれ、碧い瞳が不安と困惑に揺らめく。

「あた、し……？」

「全部終わった。もう心配ねえ」

少年の言葉に少女は淡く、だが嬉しそうに微笑んで、再び目を閉じた。

Episode..116

◇Tasha Side

病院の窓から既に高くなった陽を眺めながら、タシユアは退屈していた。夕べは結局、学院へ戻れなかったのだ。

どさくさに紛れて帰ろうとしたのだが、それをシルファはすかさず見つけ、病室へ引っ張ってこられてしまった。

(やれやれ……)

隣のベッドでは、昏々とルーフェイアが眠っている。

あのよく分からない状況から復帰した時、いちど正気を見せたが、その後すぐに眠ってしまった。そのためとりあえず、この病院に1泊させることになったのだ。

しかもタシユアの部屋が2人部屋で、かつ片方ベッドが空いていたために、そのままここへ寝かされている。

起きる気配は、まだなかった。

(これで、帰れるのですかね?)

今日の午後には学院側が引き取りに来るはずだが、目を覚まさないのに、連れて帰るわけにはいかないだろう。

このままでは、自分の入院まで延びそうだった。

なにしろルーフェイアがここへ入院?した際、シルファから「絶対にこの子を置いて行くな」と約束させられてしまっている。

(まあ、構いませんが)

早く帰りたいのは確かだが、ここにいれば邪魔は入らない。それ

に点滴も外れているから、最初ほどの不自由さはなかった。

本へ手を伸ばす。

昨日ルーフェイアが選んできた——シルファのほうは読み終わってしまった——ものだ。

院内は穏やかだった。それでも朝のうちまでは、後始末があったり患者が戻ってきたりしてざわついていたのだが、今は完全に落ち着いている。

病院のスタッフもあんな事件があったというのに、平常どおり仕事をこなしていた。「病院に休みナシ」とはあの主任の言葉だが、確かにそのようだ。

人質になった子供たちも幸いなことに、深刻な後遺症はないとの話だった。

途中でルーフェイアが入ってきちんと世話をし、犯人たちとの盾になったことがひとつ。それに眠っている間に惨劇が終わり、気づいたらベッドの上だったために夢との区別がつきづらくなったことが、功を奏したらしい。

（——なによりですか）

しばらくは怖い夢をみたりするかもしれないが、その程度で済むだろうとのことだった。

意識を戻し、そのまま本を読み続ける。実を言えば自分でも狙っていた新刊だ。面白くないわけがない。

そのまま夢中になって、しばらく時間が過ぎた。

辺りが騒がしくなる。

なんとなく顔を上げ時計に目をやって、タシユアはその理由を知った。

「もう、そんな時間でしたかね」

既に時計が12時を過ぎを差している。だがまだ、ルーフェイアは眠ったままだった。

「――いつまで寝ることやら」

言いながら立ち上がる。この病院では、動ける患者は食堂で食事を取る決まりだ。

一度だけ少女のほうに視線を向け、変化がないことを確かめてから、タシユアは病室を出た。

Episode..117

午後までにルーフエイアは、目を覚まさなかった。あの精霊が言ったとおり、そうとう身体に負担がかかったらしい。

学院からは予定通り午後には、シルファやイマドと一緒にムアカが出向いてきたが、容態を確かめただけで戻る羽目になっていた。

そしてタシユアは、結局今夜もここへ泊まりだ。

どこが悪いわけでもないのに、いいかげん帰っていいはずなのに、シルファが承知しなかった。加えて例の主任までシルファに同調してしまい、そのまま退院できずだ。

とは言え入院した時と違い、シルファがここへ何冊も本を持ってきてくれている。また食料も自由に売店へ行って調達できるため、不自由せずに済んでいた。

ルーフエイアのほうは相変わらず、ほとんど姿勢も変えずに眠っている。

胎児のような姿勢だった。

何かを恐れるかのように、自分の身を守るかのように、手足を締め身体を丸めて……。

（何をそれほど、恐れるのでしょうかね）

こういう形での恐れと言う感覚は、タシユアは持ち合わせていない。脅威が来たなら、目を覚まして退ければ済むだけ、そう思っている。

——もっとも今のルーフエイアには、それも出来ないだろうが。

なにしろ看護師が時々診回りにきても、全く目を覚まさないのだ。

本来彼女はは気配に敏感なことを考えると、やはり相当のダメージを受けたようだった。

もっとも、どこかが損傷したと言うわけではないらしい。事情を知った上でルーフェイアを診ているムアカの言葉は、「寝てれば治るわ」だった。

かの精霊とやらもあっさり引込んだままで、出てくる様子はない。

（面白かったのですがね……）
イマドに遮られてしまったが、もう少しいろいろ聞いてみたかったと言うのが本音だ。

なにしろ人外の存在の意見と言うのは、なかなか聞く機会がない。しかも精霊というのは人間と異なるだけに、予想もしなかったような反応を示す。

ある意味では、人と話しているよりもよほど面白かった。

——それにしても。

グレイスとは何なのか、何故あれほどの精霊がグレイスなる者と共生関係にあるのか……。

眠り続ける少女を見ながら、また思いを巡らす。

放たれた制御不能の呪石を、簡単に御する力。

だがなぜかその精霊は、グレイスの支配を受けている。

（……なぜそうなるのやら）

精霊は通常、なんらかの形で従えるのが普通だ。方法はともかく、屈服させて初めて、力が利用できるようになる。

だがルーフェイアの場合は、物心ついたときには既に、あの精霊

と共生関係にあったらしい。

かといってまさかそのくらいで、あれほどの精霊を屈服させるなど不可能だろう。

（結局、『グレイス』ですか）

その名を持つこと自体に何かあるとしか、考えようがなかった。
ルーフェイアⅡグレイスⅡシユマー。

華奢で儂げで泣き虫で、だが群を抜いた魔力と戦闘力とを持つ、
アンバランスで脆い少女。

その時、不意に少女が目を開けた。

Episode..118

◇Rufeir

ふと、目がさめた。

部屋の明かりが目刺さる。

見覚えのない部屋。見覚えのないベッド。自分がどこにいるのか、まったくわからない

眠る前に何をしていたのか思い出そうとしたけど、上手くないかなかった。ひどく疲れていて、ぼんやりしてる。

「目が覚めましたか？」

男の人の声が聞こえた。

——誰、だろう？

頭の中に靄がかかったみたいで、はっきりしない。ただなんとなく、起きなきゃいけないと思った。

ちょうど横向きだったから、そのまま手について起き上がろうとする。

でも、身体がとても重くて……。

「——きゃあっ！」

受身を取る暇もなくベッドから落ちて、毛布と一緒に床に叩き付けられた。

「痛っ……」

「まったく、何をやっているのです」

また男の人の声が聞こえて、顔を巡らす。

「タシユア、先輩……？」

けど先輩、どうしてこんなところにいるんだろう。それに何より、ここはどこなんだろう……。

「ルーフェイア、いつまで床に寝ているつもりですか」

「す、すみません……」

慌てて起き上がろうとする。

「……え？」

何度やつても同じだった。腕に力が入らなくて、身体が起こせない。

「うそ……」

言うことを聞かない身体に戸惑いながら、必死に力を込めた。何度も繰り返して、ようやく両手について上半身を起こす。

息がかなり荒くなっていた。

——どうしちゃったんだろう？

しかも、どうやつても立ち上がれない。

ベッドにすがろうとも思ったけど、両手をついてないと身体が支えきれなくて、結局そのままの姿勢で動けなくなってしまった。

「何がしたいのか知りませんが、その調子では夜が明けますよ」

よほど情けなく見えるんだろう。先輩にそんなふうに言われてしまう。

「ごめんなさい……」

「謝るより、立ったほうがいいと思いますがね」

だけどやっぱり動けない。どれほど力を入れてみても、体勢を変

えることさえできなかった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「謝れなどと、誰も言っていないですよ」

「ごめんなさいっ!」

どうしていいか分からなくなる。

ともかくもう一度、慌てながら立ち上がろうとして……。

「きゃっ——」

また、体勢を崩した。しかも今度は毛布まで絡まって、身動きが
できなくなる。

涙がこぼれた。

ベッドの上には呼び鈴のボタンがあるのに、それにさえ手が届か
ない。

あたし、いったい……。

「——やれやれ」

声がして、抱き上げられた。

「先輩……?」

毛布と一緒にベッドの上へ降ろされる。

Episode..119

「このまま床にいられては、私が医者や看護師に文句を言われかねませんからね」

「すみません……」

でもどういうわけか、先輩は何も言わなかった。

——どうしてだろう？

考えてみたけど、分からない。

結局それは諦めて、あたしは違うことを確かめることにした。

「あの、先輩……」

恐る恐る声をかける。

「なんです」

それだけで、叱られなかった。

少し勇気付けられて、残りのことを口にする。

「その……ここ、どこですか……？」

あたしの言葉に、先輩が真っ直ぐ視線を向ける。

「ご、ごめんなさいっ！」

「謝ってどうするのです。」

——病院ですよ、ここは」

言われてもまだ、ピンとこなかった。

「びょう、いん……？」

なんであたし、そんなところに……。

「昨日の騒ぎを、覚えていないのですか？」

まだどこかぼんやりしてる頭で、必死に考える。

昨日は確か、イマドがアヴァンから帰ってきて……？

そして、思い出した。

「あ、あの子たちっ！」

あたしが倉庫を出たときはみんな大丈夫だったけど、その後無事、保護してもらったんだろうか？

「先輩、あの子たちは?!」

「全員無事です」

簡潔だけどいちばん聞きたかった答えに、ほっとする。先輩がそう言うなら、大丈夫だ。

あとは後遺症がないことを祈るだけけど……こっちは詳しいことは、時間が経たないと分からない。

でも、みんなケガもなく済んだのが、なによりだった。

——動けるようになったら、会いに行こうかな？

ふと、そんなことを考える。

けどあたしの顔を見たら、あの恐怖を思い出しちゃうかもしれないし……。

そうやっていろいろ考えて、もうひとつ分からないことを思い出した。

「彼女」と代わったあとを——あたしは、知らない。

「……あの……」

思い切って声をかける。

「今度は何です」

「……………」

冷たい声に、何も言えなくなった。

「黙っていては、通じませんよ」

「その、すみません、だから……」

言われて必死に言葉を繋げる。

その間、不思議とタシユア先輩は何も言わなかった。

「……あのあと、どうなったんですか？」

「『あの』では、どの時点以後を差しているのか分かりかねますね」

「ごめんなさい……」

また泣きたくなる。

どうしてあたし、いつもこう……。

さすがにもう先輩の顔は見られなくて、反対側へ顔を向けた。

けどそこへ、もう一度先輩の言葉がかかる。

「その食事は、どうするつもりです」

「え……？」

びっくりして顔を巡らすと、確かにサイドテーブルの上に、食事が置かれていた。

——どうしよう。

まだ身体も動かないくらいだから、食べたくない。

Episode..120

しばらく考えて、あたしは載っていたミルクだけを手にとった。
それからまた恐る恐る、先輩に話しかける。

「先輩、これ……食べませんか……？」

「いただきます」

残りもので怒られるかと思ったけど、拍子抜けするくらいあっさり、先輩があたしの食事を持って行った。

そのまま黙って食べ始める。

——お腹、空いてたのかな？

先輩はいつもたくさん食べるから、病院の食事じゃ足りなかったのかもしれない。

どっちにしても嬉しくなって、あたしはミルクに口をつけた。

ゆっくり……ゆっくり、飲んでいく。

自分の身体のペースに合わせただけだったけど、かなりゆっくりだったらしい。どうにか飲み終わる頃には、先輩はだいたい食べ終わっていた。

また、眠くなる。

空になったカップをサイドテーブルに置いて横になると、目を開けているのも辛かった。

でも少し、目を開けたまま頑張ってみる。

「ルーフェイア、何をしているのです」

「え、いえ……」

もともと、あんまり意味は無い。

それを見透かしたように先輩が言った。

「早く寝なさい。その状態で起きていても、何にもなりませんよ」
「す、すみません！」

慌てて目を閉じる。

想像以上に疲れてたのか、すぐにあたしは眠ってしまった。

次にはつきり起きた時、辺りは明るかった。

視界にタシユア先輩の姿を見つけ、なんとなく挨拶する。

「……おはよう、ございます……」

「もう午後です」

「——え？」

びっくりして時計を見ると、もうお昼はとくに過ぎていた。

——そんなに、寝ちゃったんだ。

自分で自分に驚きながら、そっと動いてみる。

昨日はあんな調子だったけど、普通じゃ考えられないくらい寝ただけあって、だいぶ動けるようになっていた。

ゆっくり起き上がる。

先輩は椅子に腰かけ——寝てなくていいんだろうか？——て、本を読んでいた。

話し掛けたら邪魔をしてしまいそうで、黙って辺りを見回す。
あ、ここ……。

今ごろになって、自分がどこにいるのかやっとな得した。

分かってみればどうということではなくて、あたしがいるのはタシユア先輩が入院？した病室だ。2人部屋で、確か片方ベッドが空い

ていたから、そこへ入れられたらしい。

でも、そのほうがよかった。

個室にひとりつきりとか、大部屋に知らない人というよりは、このほうがずっといい。

けどどうして見ると、テロ事件があったなんて信じられないくらい、病院の中は落ち着いていた。

あの子たちも、こんなふう to 穏やかだといいんだけど……。

あとで看護師さんに訊こうと思いつながら、あたしはまた横になった。昨日が昨日だったから、まだすぐに疲れるみたいだ。

——これじゃ、いつ帰れるんだろう。

少し心配になる。

みんなの顔が見たかった。シーモアやナティエスやミル、それにイマドの……。

と、病室の扉がノックされる。

Episode..121

「どうぞ」

タシユア先輩が答えて、扉が開いた。看護師さんが入ってくる。

「あの時の……？」

「あら、よく覚えてるわねえ。けど良かった、目が覚めたのね」
入ってきたのは、事件の夜に手助けしてくれた看護師さんだった。
今見ると、名札に「主任」と書いてある。

——それで、だったんだ。

あんな状況で、どうしてあれほど落ち着いてたのか不思議だったけど、病棟の偉い看護師さんなら納得できる。

「ずっと眠ってて、ちょっと気を揉んでただけけど。

でも、思ったより元気そうだし」

わざとじゃないけど、ずいぶん心配させてしまったみたいだ。

「すみません……」

「いいのよ、謝らなくて。だいたい病気なんて、寝るのがいちばんの薬なんだから。

それより、気分はどお？」

言いながら手際よく、あたしの熱と脈とを計っていく。

「——うーん、小児のハートレートって、こんなだったかな？」

まあいいわ、あとでちゃんと、先生に診てもらおうね」

「あ、はい……」

あんまり気は進まないけど、嫌だとは言えなかった。

「大丈夫よ、うちのセンス、別にヘンなことしないから。

それに学院の……なんだっけ？　ともかく学院の先生も来て、一緒に診ることになってるし」

「ほんとですか？」

それだったら、いろいろと疑われずに済む。

「こんなことで、嘘言ったりしないわよ。

あ、そうそう、何か食べる？」

訊かれて困ってしまった。まだあんまり——食べたくない。そんなあたしを見て、主任さんが笑う。

「食欲、なさそうね。

そしたらミルクと、何か口あたりの良さそうなもの持ってきて——あら」

言葉が途中で止まったのは、部屋に人が入ってきたからだ。ムアカ先生とシルファ先輩と、それに……。

「——イマド！」

「よ。だいぶ良さそうじゃねえか」

いつもと変わらない調子で、彼が入ってくる。

不意に涙がこぼれた。

「お、おい、いきなりどした」

「タシユア……また、いじめていたのか？」

「人聞きの悪いことを言わないでください。ただ本を読んでいただくで、どうやったらそんなことが出来ますか」

イマドと先輩たちが、いつものやり取りを始める。

そう、「いつも」の。

あの時、思った。もし二度と戻ってこれなくても、構わないと。

でも……。

「ほら、泣きやめって。けどこんだけ泣けりゃ、帰れんじゃねえか？
——ですよね、センセ」

「まあ、大丈夫でしょうね」

イマドの言葉に、ムアカ先生が笑いながら答えた。
その様子に、よけい涙があふれる。
やっぱりあたし——今が、好きだ。

「あゝあ、こりゃ重症だな」

なかなか涙が止まらないのを見て、イマドが苦笑しながらあたしを覗き込んだ。

光の加減で金色にも見える彼の瞳に、あたしが映る。

「——なるほど、そゆワケか」

「ごめん……」

自分でももう、何に謝っているのか分からない。

イマドがもう一度笑った。

「ま、怒るにゃ時効だしな。けどもう、ムチャすんなよ？」

「——うん」

優しい言葉に泣きながら……あたしも、笑った。

◇あとがき◇

長い話を最後まで、本当にありがとうございました。
なお現在、第11作目を連載中です。いつもどおり“夜8時過ぎ”

の更新です。

評価・感想大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ

◇イメージイラストです > i 6 2 7 — 1 6 6 <
なおイラスト等、随時募集中です♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568g/>

至高の日常 ルーフェイア・シリーズ10

2011年2月8日07時14分発行